

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和62年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001215

昭和62年度

国立国語研究所年報

—39—

国立国語研究所

1988

昭和62年度

国立国語研究所年報

—39—

国立国語研究所

1988

刊行のことは

ここに『国立国語研究所年報（39）』を刊行します。昭和62年度における研究の概要及び事業の経過について報告するものです。

本年度は、以下にあげる刊行物9点を刊行しました。

『方言研究法の探索』（報告93）

『研究報告集(9)』（報告94）

『児童・生徒の常用漢字の習得』（報告95）

『方言談話資料(10)―場面設定の対話 その2―』（資料集10―10）

『国定読本用語総覧3 第二期と～ん』（国語辞典編集資料3）

『文字・表記の教育』（日本語教育指導参考書14）

『現代雑誌九十種の用語用字 五十音順語彙表・採集カード』

（言語処理データ集3）

『国語年鑑』（昭和62年版）

『昭和61年度国立国語研究所年報（38）』

このほか、『基礎日本語活用辞典 インドネシア語版』を編集刊行し、日本語教育機関に配布して試用に供することとしました。

当研究所の研究及び事業を進めるに当たっては、例年のように地方研究員をはじめ、各種委員会の委員、各部門の研究協力者や被調査者の方々の格別の御協力を得ています。また、調査について、各地の都道府県及び市町村教育委員会、学校、幼稚園、図書館等の御配慮を仰いでおります。その他、長年にわたって当研究所に寄せられた大方の御厚意に深く感謝いたしますとともに、今後とも今までと同様の御支援が得られるよう切にお願いいたします。

昭和63年7月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

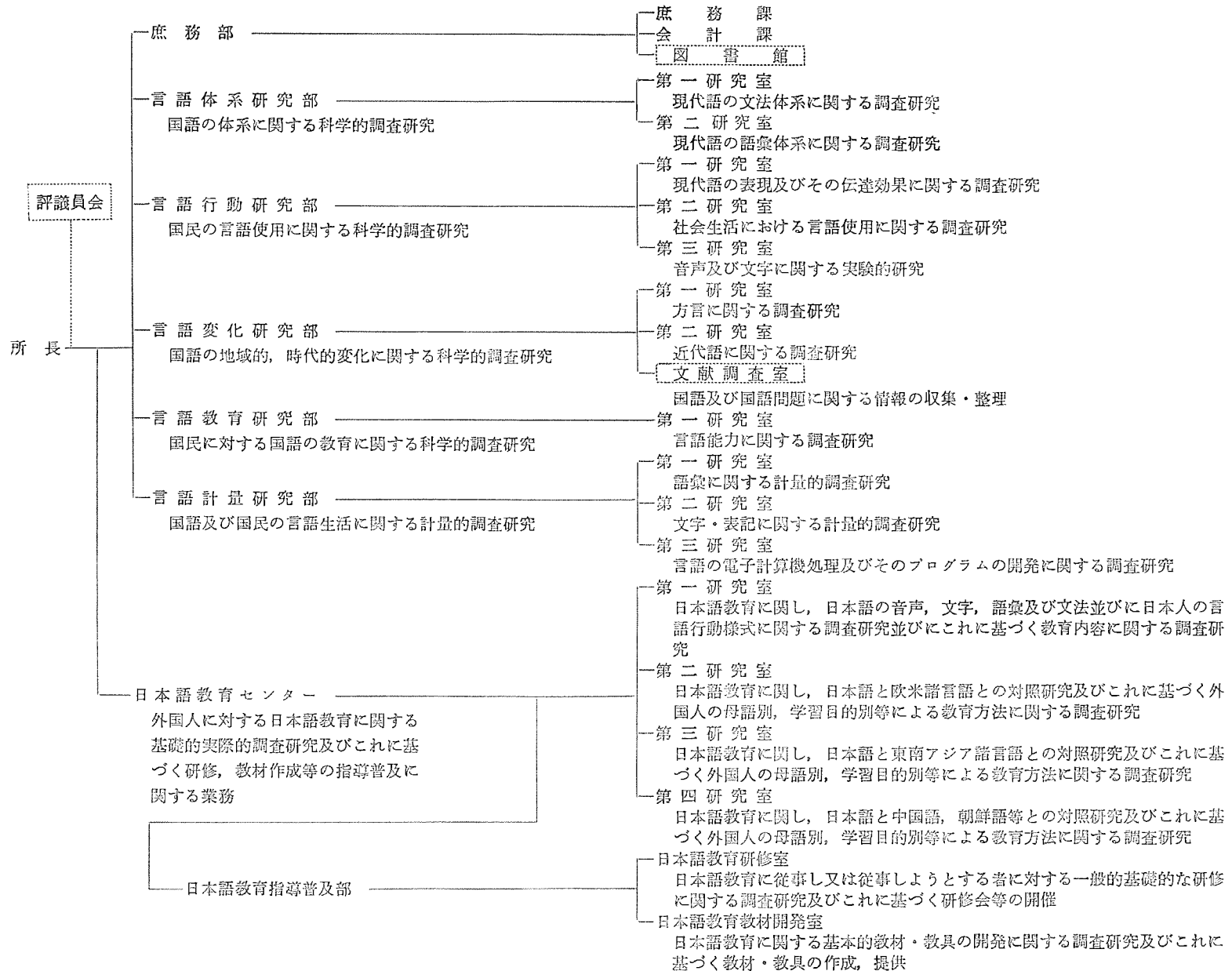
刊行のことば

昭和62年度調査研究のあらまし	1
昭和62年度刊行物等の概要	11
現代日本語文法の調査・研究	18
現代語彙の概観的調査	19
現代敬語行動の研究	22
各地方言親族語彙の言語社会学的研究	24
所属集団の差異による言語行動の比較研究	27
言語行動様式の分析のための基礎的研究	29
漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究	30
動的人工口蓋による発音過程に関する研究	32
文法的特徴の全国的地域差に関する研究	34
方言分布の歴史的解釈に関する研究	37
明治時代における漢語の研究	40
児童・生徒の言語習得に関する調査研究	46
言語計量調査—語彙調査自動化のための基礎的研究—	49
現代の文字・表記に関する研究	54
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	56
日本語の対照言語学的研究	61
日本語動詞の名詞句支配に関する文法的研究	63
日本語教育の内容と方法についての調査研究	65
日本語と英語との対照言語学的研究	68
日本語とインドネシア語との対照言語学的研究	69
日本語と中国語との対照言語学的研究	72
日本語教育研修の内容と方法についての調査研究	73

言語教育における能力の評価・測定に関する基礎的研究	75
日本語教育教材開発のための調査研究	77
談話の構造に関する対照言語学的研究	79
国語及び国語問題に関する情報の収集・整理	80
文部省科学研究費補助金による研究	87
日本語教育研修の実施	104
日本語教育に関する情報資料の収集・提供	115
日本語教育教材及び教授資料の作成	118
国語辞典編集に関する準備調査	121
母語別日本語学習辞典の編集	136
図書収集と整理	140
庶務報告	141

昭和62年度調査研究のあらまし

研究所の機構は次のとおりである（63年3月31日現在）。



なお、国語辞典の編集に関して、国語辞典編集準備室を設けて準備作業を進めている。

言語体系研究部

(1) 現代日本語文法の調査・研究 第一研究室

現代日本語動詞の打ち消しのアスペクトとテンスについて、及び、こそあどの指示するもの（人・物・場所など）についての調査を終え、原稿を執筆した。また、書きことば資料に基づき、動詞の統語論的特性を調査した。（18ページ参照）

(2) 現代語彙の概観的調査 第二研究室

前年度に『雑誌用語の変遷』（報告89）として成果を報告した、雑誌用語の経年調査を継続させた。また、「現代雑誌九十種の用語用字調査」をモデルとする大規模雑誌用語調査が、現体制で可能か、探索を行い、新しい調査の計画を立案した。（19ページ参照）

言語行動研究部

(3) 現代敬語行動の研究 第一研究室

言語行動としての敬語行動を把握する視点を考察し、その視点から具体的な敬語行動を調査・記述する方途を探る基礎的な研究を継続した。具体的には、言語行動の成立要件についての配慮を明示する表現と、言語行動の種類や機能を明示する表現について、実例の収集と整理を継続した。

（22ページ参照）

(4) 各地方言親族語彙の言語社会学的研究 第一研究室

全国各地の方言集・方言辞典から採集した方言親族語彙カード約3万3千枚を整理して、資料集『日本方言親族語彙資料集成』（仮称）の原稿を完成させる作業を前年度に継続して行った。本年度は、第4章から第17章までの原稿を執筆し終えた。（24ページ参照）

(5) 所属集団の差異による言語行動の比較研究 第二研究室

大阪府豊中市など3都市の市民を対象として実施した言語行動場面調査の分析を続けるとともに、今後の社会言語学研究を推進するための道具としてのデータベース構築に向けての準備的研究を行った。（27ページ参照）

(6) 言語行動様式の分析のための基礎的研究 第二研究室

身振りや動作などの「行動」を記述するための枠組み作り（方法論の検討）を行うことを主な目的として収集した座談資料を基に、言語表現と非言語的行動の関連性などについての分析を実施し、今後の検討諸課題の整理を行った。（29ページ参照）

(7) 漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究 第三研究室

読みの眼球運動における一つ一つの注視点の位置と、そこでの停留時間を、文章に重ねて表示するシステムを、眼球運動測定装置とパーソナル・コンピュータの組み合わせで実現し、予備的な実験を行った。

（30ページ参照）

(8) 動的人工口蓋による発音過程に関する研究 第三研究室

ダイナミックパラトグラフィを分析法の主軸として、現代日本語の標準語音声を調音的、音響的、機能的な側面から明らかにする。本年度は、青森方言の特徴的な音声及び標準語の子音を対象として実験音声学的な分析を行った。（32ページ参照）

言語変化研究部

(9) 文法的特徴の全国的地域差に関する研究 第一研究室

57年度までの研究テーマを発展させ、方言における文法の諸特徴について、その全国的地域差を明らかにしようとするものである。これまでの調査結果の一部について言語地図を作成した。また、新たに全国11地点で検証的調査を実施した。（34ページ参照）

(10) 方言分布の歴史的解釈に関する研究 第一研究室

方言分布の歴史的解釈を国語史に取りこみ、意味的・位相的・地理的観点から従来の文献による国語史を見直し、新たな国語史の記述を行う。本年度は、1)『日本言語地図』の関連意味項目地図作製のための準備、2)方言の史的位相性についての考案、3)東西対立方言分布の史的傾向に関する調査、などを行った。（37ページ参照）

(11) 明治時代における漢語の研究 第二研究室

英和辞書における訳語の研究は、語別訳語対照一覧表の検討・調整を完

了した。その際、新たに訳語の読み方・字体・振り仮名・漢語の表記などについて整理基準を定めた。また、訳語索引の作成を開始した。

自然科学用語の語史研究は、主に明治時代の専門書・概説書・啓蒙書などから用例採集を行った。その際、明治初期の啓蒙書として重要な通俗科学小説からの採集も行った。(40ページ参照)

言語教育研究部

- (12) 児童・生徒の言語習得に関する調査研究 第一研究室

児童・生徒の母国語の習得過程を明らかにすることを目的として、本年度は次の調査研究を行った。

- (1) 漢字について 1. 常用漢字の習得度調査 2. 児童の漢字使用に関する探索的研究

- (2) 作文について 1. 文章化能力に関する探索的研究 2. 児童の作文使用語彙調査 (46ページ参照)

言語計量研究部

- (13) 言語計量調査一語彙調査自動化のための基礎的研究 第一研究室

語彙調査自動化の準備的研究では自動単位分割・自動漢字解説・自動品詞認定・活用形変換の機能をもち、書きことばだけでなく、話しことばも処理出来る機能をもった語彙調査システムを作成した。語彙調査の実施とまとめでは、高校教科書と中学校教科書のデータを整理・統合し、次年度の分析にそなえた。(49ページ参照)

- (14) 現代の文字・表記に関する研究 第二研究室

現代の文字・表記の実態を記述するとともに、そこに含まれる諸問題について種々の観点から、理論的な検討を行う。本年度は、中学校・高等学校の教科書の表記データの整備及び集計プログラム開発と、新聞の語表記データの修正・加工作業を行った。(54ページ参照)

- (15) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 第三研究室

新聞3紙1年分の KWIC を中心に、関係形式データベースを使った日本語用例データベースの作成を開始した。また、国立国語研究所で行われ

た漢字調査、漢和辞書データ（新字源・大漢和・大字典）などから40項目の情報を統合し、漢字情報データベース作成の準備を行った。

その他、言語理解の研究を単一文の理解と文章（文脈をなす複数の文）理解の研究に分けて進めている。日本語のように語順の緩い言語のための確定節文法が完成し、また文章理解のための推論メカニズムの一部が完成した。（56ページ参照）

日本語教育センター

(16) 日本語の対照言語学的研究 第一研究室

「外国語としての日本語の研究」の中心的分野をなす研究である、日本語と諸外国語との対照研究の基礎を築くもので、「日本語音声の研究」と「単語の意味記述に関する対照語彙論的研究」について研究を進めた。

（61ページ参照）

(17) 日本語動詞の名詞句支配に関する文法的研究 第一研究室

日本語の動詞の名詞句支配について、動詞結合値理論の立場から記述を行い、個々の動詞について、その支配する名詞句の種類・分布を明らかにしようとする。3年計画の第3年次として、既に採集した用例の集計と用例集作成のための準備作業を中心に研究を進めた。（63ページ参照）

(18) 日本語教育の内容と方法についての調査研究 第一研究室

外国人に対する日本語教育の内容と方法について現状を把握し、日本語教育向上のための対策を検討するために、技術者研修の分野における日本語教育にたずさわっている7機関に委員を委嘱し、日本語教育研究連絡協議会を年度内に1回開催した。また、アンケート調査を実施して、この分野の最新の情報を収集することに努めた。（65ページ参照）

(19) 日本語と英語との対照言語学的研究 第二研究室

日本語教育のための基礎資料を得ることを目的とし、前年度に引き続き日・英両語に見られる文脈的制約の実証的研究を行った。特に本年度は、談話の結束性に関して、その内容を調査するとともに、日・英両語間の異言語間伝達においてそれがどのように移行するかを比較・検討し、その成

果の一部を『研究報告集(9)』(報告94)に発表した。(68ページ参照)

(20) 日本語とインドネシア語との対照言語学的研究 第三研究室

前年度に引き続き、インドネシア語の新聞、雑誌、小説等より、例文を収集し、インドネシア語の受動構文と能格構文との相違点を、特に統率・束縛理論の見地から探った。また、日本語の助詞・間投詞とインドネシア語の小詞との比較研究を行う目的で、本年度は、収集したインドネシア語の例文を基に、インドネシア語の小詞のもつ機能と、その現れる位置について考察を行った。(69ページ参照)

(21) 日本語と中国語との対照言語学的研究 第四研究室

中国語話者に対する日本語教育に資することを目標として、日本語の中の漢語と中国語との語構成の対照研究を行った。3年計画の第1年次として文献・資料の収集を中心に研究を進めた。(72ページ参照)

日本語教育指導普及部

(22) 日本語教育研修の内容と方法についての調査研究 日本語教育研修室

研修に必要な教育内容の明確化、教授資料・教材等の整備充実、また、研修受講者の能力・専門・受講期間等に応じた研修制度のあり方、カリキュラムの設定などについて、基礎的な調査研究を継続的に行い、その一環として、前年度に引き続き『日本語教育論集3』を刊行した。

(73ページ参照)

(23) 言語教育における能力の評価・測定に関する基礎的研究

日本語教育研修室

現在国内の日本語教育機関で施行されている種々のテストを収集し、その方法及び内容を検討するとともに、測るべき能力の特定、その評価手法の開発を進めた。同時に、実験的に数種のテストを開発し、外国人インフォーマントに対して試行した。(75ページ参照)

(24) 日本語教育教材開発のための調査研究 日本語教育教材開発室

日本語教育用各種教材の語彙・文型に関する調査を続行した。語彙教材開発のための基礎資料として、語義記述に使用されている用語の実態調査

に着手した。文の発話機能の分類案を作成し、その妥当性の検証を行った。

(77ページ参照)

25) 談話の構造に関する対照言語学的研究 日本語教育教材開発室

中上級向けの日本語教育に役立てるため、日本語において談話の構成を表示するために機能する音声的手段についての探索と基礎資料の作成を行った。(79ページ参照)

26) 国語及び国語問題に関する情報の収集・整理 文献調査室

例年のとおり新聞・雑誌・単行本について調査し、情報の収集整理を行い、『国語年鑑』〈昭和62年版(1986)〉を編集した。(80ページ参照)

なお、昭和62年度文部省科学研究費補助金の交付を受けて、以下の研究を行った。

特定研究(1) 連語構造における意味素性の適合に関する言語間比較

(代表 中道真木男)

機械翻訳用辞書の内容を改善することを目的として、語の意味の記述の精密化とその構文上の規制力の検討を行い、さらにそれらを英語・ドイツ語・ポルトガル語と対照して、言語間における語義の対応の実態を明らかにする。本年度は、第2年次に当たり、語の対者的特徴の現れ方と、外国語において対応する表現手段の調査結果を取りまとめるとともに、文体的特徴に関する調査に着手した。(87ページ参照)

特定研究(1) 言語データの収集と処理の研究 (代表者 野村雅昭)

言語情報処理の高度化のためには、大量かつ良質の言語データを利用しやすい形に整えることと、それを処理するための基礎技術を開発することが必要である。本年度は、第2年次として、複合語データの収集と造語モデルの構築、日本語の複合語解析、日英語彙データの収集・比較と機械辞書の作成、類義語の意味処理、現代日本語の名詞ソーラスの作成、意味情報の自動抽

出と付与の6方面から研究を進めた。(88ページ参照)

総合研究(A) 北海道における共通語化および言語生活の実態

(代表者 江川 清)

全国各地からの移住者によって成立した北海道の地域社会では、現在どのような言語生活が営まれているのか。この実態を把握するために、

①昭和33～35年度に国立国語研究所が実施した、北海道共通語の成立過程に焦点をあてた臨地調査の、四半世紀をへだてての継続研究。

②社会言語学、言語行動研究の立場での新しい観点からの臨地研究を行う。

本年度は札幌市で各種調査を実施した。(93ページ参照)

一般研究(A) 国語学研究的動向の調査研究

(代表者 佐竹秀雄)

国立国語研究所編『国語年鑑』を基にして、過去33年間の研究成果の国語学研究文献総合目録を作成し、それによって国語学研究的動向について分析と展望を行うことを目的とする。本年度は、文献を分野別・発行年月順に並べた文献目録(刊行図書)総集編の本文を作成するとともに、国語年鑑33冊の分類項目の異同について統一基準を定め、細分類するために分類コード表を作成した。(97ページ参照)

一般研究(A) 漢字情報のデータベース化に基づく常用漢字の学習段階配当

に関する研究

(代表者 村石昭三)

「常用漢字表」の告示にともない、常用漢字の学習段階配当について研究することが緊急の課題となっている。本研究は、漢字に関する調査資料をデータベース化することと、常用漢字の学習段階配当について研究することを目的とする。本年度は、データベース化する漢字情報を整える作業、漢字別語彙資料の整理、漢字の学習指導に関するアンケート調査、「分類漢字表稿本」・『児童・生徒の常用漢字の習得』(報告95)の報告、データベースの検討を行った。(98ページ参照)

一般研究(B) 日本語教育における指導要素としての言語単位に関する研究

(代表者 上野田鶴子)

日本語において一定の意味を持つ単位と認められる、造語要素、語、複合

語、連語、慣用句、等の言語要素を収集し、日本語教育における指導要素としての観点から分類・整理して、資料を蓄積した。一部の個別的な問題に関する分析を報告書として印刷した。(100ページ参照)

一般研究(B) 光学文字読み取り装置によるコンコーダンス作成システムの
開発 (代表者 飛田良文)

光学文字読み取り装置 (Optical Character Reader) は、手書きの片仮名・英文字・記号を読み取って計算機に入力することができるもので、本研究はこの装置を用いて用例集を作成するシステムを開発することを目的としている。このシステムを具体化するため、本年度は、第1年次として本文がすでに機械可読形式になっている第3期の『尋常小学国語読本』(約10万語)を対象として用例集の作成を進めた。(101ページ参照)

以上のほかに、当研究所では辞典関係の事業として昭和52年度以降、国語辞典編集と母語別日本語学習辞典編集の作業にとりかかっている。

国語辞典編集に関する準備調査 国語辞典編集準備室

国語辞典編集準備調査会を2回開催し、国語辞典編集の準備及び実験的試行を行った。準備としては、国語辞典編集準備資料9「スカウト方式による用例採集の実験試行」を印刷した。また、国定読本の底本を決定するため、教科書本文の修正経過を調査した。実験試行は、総索引方式の成果である『国定読本用語総覧3』(国語辞典編集資料3、三省堂刊)を刊行した。これは、いわゆるハタタコ読本の「と～ん」の部を取めたものである。

(121ページ参照)

母語別日本語学習辞典の編集 日本語教育教材開発室

インドネシア語版第1期分の校閲を終了し、『基礎日本語活用辞典インドネシア語版』として刊行した。(136ページ参照)

昭和62年度刊行物等の概要

方言研究法の探索（報告93）

言語変化研究部（第一研究室）が昭和52年度以降実施してきた実験的（探索的）調査研究の成果の一部についての報告である。この研究は、方言調査法、及び、調査結果の処理・分析法に関する基礎的な調査研究を行い、また今後に発展させるべき研究計画についての小規模な実験的調査研究を実施することを目的としたものである。昭和61年度までの10年間に11のテーマについての調査研究を行ったが、本書には、そのうちの5件の課題についての報告を取めた。

内容（執筆者）は以下のとおりである。

- ・『日本言語地図』の語形の数量的性質（沢木幹栄）……言語地図に見られる語形の出現地点数の分布について統計的な考察を行った。
- ・方言意識と方言使用の動態 ——中京圏における——（真田信治）……方言変容の将来の姿を予測するための一方法として、方言意識の研究を実験的に行った。
- ・特殊方言音の地域差・年齢差（飯豊毅一）……山形県鼠が関地区に見られる音韻の特徴に関して、場面差、調査法による差、調査者による差を含めて考察した。
- ・福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差、個人差、調査法による差（佐藤亮一）……無型アクセントと言われてきた福井市内において、高年層は三国式アクセント、中年層は無型アクセント、若年層は東京アクセント化という年齢差が存在することを、種々の調査法を用いて実証した。
- ・通信調査法の再評価（小林 隆）……従来、面接調査に比べて信頼性が低いものとみなされてきた通信調査法の利点を見直すべきであるという認識の下に、通信調査法の有効性と限界を検証した。

研究報告書 (9) (報告94)

本年度は、下記の6編について報告した。

1. 石井久雄「本文批判」……本文批判は基本的には古代語文献に関するものであるが、現代語についても必要であることを示唆し、あわせて「本文」の概念の現代における成長を指摘した。
2. 斎藤秀紀「漢字情報データベース」……国立国語研究所における機械辞書の歴史的な背景、各種漢字調査情報と漢和辞書情報の結合によって期待できる利用上の相乗効果、機械辞書のデータベース化と項目内容の検索方法について述べ、また、データベース化された漢字情報の有効性を示した。
3. 田中卓史「集合型言語の確定節文法」……日本語のように語順のゆるい言語を形式的に取り扱うための第一段階として、語順を全くもたない言語（集合型言語）を定義し、その言語を計算機上で生成・解析することのできる確定節文法 DCSG を提案した。
4. 西原鈴子「異言語間伝達における結束性の移行」……結束性とはどのようなものであるか、異言語間のコミュニケーションにおいてそれがどのように移行するかを、結束性の表出手段とされるもののうち、指示・省略・語彙の3点を選び、日本語と英語の相互翻訳例を資料として検討した。
5. 正保 勇「述語補文について——日本語とインドネシア語の場合——」……補文の構造については、種々の解釈が可能である。インドネシア語における対格付き不定詞構文を、英語の3種のタイプの構文と比較すると同時に、あわせて日本語の補文との比較も行った。
6. 日向茂男「日本語における重なり語形の記述のために」……日本語の一回語形、重なり語形の問題を広く考察し、また、日本語教育上、問題となる点を考察するための基本資料の一部として、「重なり語形の分類」「一回語形、重なり語形から見た擬音語・擬態語の分類」を作成した。

児童・生徒の常用漢字の習得（報告95）

常用漢字表の告示に伴い、常用漢字の学習段階配当を検討することが緊急の課題となった。そのため、国立国語研究所を中心にして、文部省科学研究費補助金特定研究(1)「常用漢字の学習段階配当に関する基礎的研究」（代表者村石昭三、昭和57年度～59年度）を行った。本書は、この研究の一部として行った漢字の習得度調査の主要部分についての報告である。

全部で下記の10章から成る。第1章で、上記の研究全体の目的・計画、研究全体の中での漢字の習得度調査の位置などについて述べている。第2章で、調査の概要について説明している。第3章で、調査の方法・手続きについて述べている。第4章～第9章で、調査の結果について、各種の集計表とともに詳しく説明している。そして、第10章に、得られた調査結果を簡単にまとめている。

調査を担当したのは、言語教育研究部であるが、執筆は、第1章・第9章が村石昭三、第2章～第8章が島村直己、第10章が村石と島村である。

第1章 研究の目的・計画

第2章 調査の概要

第3章 調査の方法

第4章 小学校に配当されている漢字(1)

—それぞれの学年の終了時点で、その学年の配当漢字を調査した結果—

第5章 小学校に配当されている漢字(2)

—1年上・2年上・4年上の学年の調査結果—

第6章 小学校に配当されている漢字(3)

—1年下の学年の調査結果—

第7章 中学校・高等学校に配当されている音訓・漢字

第8章 常用漢字表の付表の語

第9章 児童・生徒の常用漢字習得量

第10章 調査のまとめ

方言談話資料(10) ——場面設定の対話 その2—— (資料集10-10)

言語変化研究部(第一研究室)は、昭和49年度から3か年計画で「各地方言資料の収集および文字化」を実施した。この研究は、現今急速に失われつつある全国各地の方言を生のままに記録し(録音・文字化標準語訳及び注つき)集成し、国語研究の基礎的資料とすることを目的として、国立国語研究所地方研究員の協力を得つつ進められたものである。本書は昭和51年度に(全国19の府県から各1地点を選定して)実施した場面設定による会話資料(全8場面)のうち、標記の4場面分について刊行(カセットテープ付き)したものである。編集担当者は、飛田良文・佐藤亮一・沢木幹栄・小林 隆・白沢宏枝である。この研究企画には、以上のほか、飯豊毅一(現昭和女子大教授)、徳川宗賢(現大阪大学教授)、真田信治(現大阪大学助教授)が参加した。

本書に収めた場面と収録・文字化担当者(及び協力者)は次のとおり。

- (5) 隣家の主人の所在をたずねる
- (6) 道で知人に会う
- (7) 道で目上の知人に会う
- (8) うわさ話をする

なお、場面(1)~(4)は61年度に『方言談話資料(9)』として刊行済みである。

担当者

佐々木隆次・上野 勇(杉村孝夫)・加藤信昭・剣持隼一郎・馬瀬良雄・日野資純・山口幸洋・佐藤 茂(加藤和夫)・後藤和彦・飯豊毅一・佐藤亮一・真田信治・沢木幹栄・白沢宏枝・広戸 惇・杉山正世(江端義夫)・土居重俊・愛宕八郎康隆・中松竹雄

国定読本用語総覧は、国語辞典編集資料の一つとして国定読本のすべての用語を文脈付きで示した索引 (concordance) である。国定読本は明治37年4月から昭和24年3月まで使用された文部省著作の小学校用国語教科書 (1～6期) のことで、本書はそのうちの第2期『尋常小学読本』(1～12)の全用語のうち「と～ん」の部を検索できるようにしたものである。内容は索引(と～ん)、付録からなる。この第2期国定読本を対象とした『用語総覧2』と『同3』とをあわせると、見出し語数11,495、参照見出し数852、空見出し数38、用例数77,419を収録している。

本書に収められた語彙は、その編纂趣意書に「口語ハ略東京語ヲ以テ標準語トセリ。但シ東京語ノ訛音・卑語ト認ムルモノハ固ヨリ之ヲ採ラズ。例ヘバ[○]ヒ[○]ラ[○]ツ[○]タイ[○]トイ[○]ハズシテ[○]ヒ[○]ラ[○]タイ[○]トイ[○]ヒ、[○]イ[○]天気ヲ採ラズシテ[○]ヨ[○]イ[○]天気ヲ採レルガ如シ。」と記しているように、標準語である。しかし、そのもととなった口語の東京語は「未ダ確乎タル標準ヲ得ズ」という状況で、「社会ノ階級卑等ニ於テ、又ハ児童ノ男女間ニ於テモ特殊ノ言語アルヲ以テ、学校読本トシテハ純然タル自然的言語ヲ写スコト能ハザル憾尠シトセズ。」と記されている。

用語は、第1期と比較すると、同義語でありながら変わっているものがある。例えば、「うみばた→うみべ」「ぜに→おあし」「ともす→とぼす」「たつとぶ→とうとぶ」「よほど→よっぽど」など。また「電報をかける」から「電報をうつ」へと言い廻しが変わった。第2期の教科書のうちでも修正が行われ、その実態は付録7「尋常小学読本(ハタタコ読本)修正経過」に示した。「空中飛行器→航空機」(大正4年修正)は、時代のすう勢を反映する一例である。

本書の編集は国語辞典編集準備室(主幹 飛田良文、書記 高梨信博、調査員 林 大・見坊豪紀・木村陸子・加藤信明・貝美代子・服部 隆)が昭和60年から担当した。付録は高梨信博と貝美代子が作成した。

文字・表記の教育（日本語教育指導参考書14）

本書は、外国人に対する日本語教育にたずさわる教師の参考のために、現代日本語の表記法に関する知識と、外国人学習者に文字・表記の指導を行う際の実際的な留意事項をまとめたものである。

執筆は、第1章、第2章を加藤彰彦氏（実践女子短期大学教授）に、第3章、第4章を伊藤芳照氏（大東文化大学教授）に、それぞれお願いした。

本書の内容は以下のとおりである。

第1章 日本語の表記の基準

常用漢字表（字数／音訓／付表／字体／筆順・画数・部首／簡体字との比較） 現代仮名遣い（原則にもとづくきまり／表記の慣習による特例） 送り仮名の付け方（送り仮名の付け方の移り変わり／新旧「送り仮名の付け方」の比較／送り仮名の付け方の要領） ローマ字のつづり方 外来語 くぎり符号 総合問題

第2章 表記についての質疑応答

漢字について 仮名遣いについて 送り仮名について ローマ字について その他について

第3章 外国人学習者に対する表記の指導

外国人学習者と日本の文字（非漢字系学習者の困難点／漢字系学習者の困難点） 入門期・初級段階（仮名の読み書きについて／初級の漢字指導／ローマ字・数字・符号など／縦書きと横書き、ルビについて） 中・上級段階（六書——形声文字の重要性／部首についての知識／漢字熟語の構成について／漢字熟語の読みについての知識）

第4章 表記に関する評価と測定法

初級段階の測定項目，問題例，留意点 中・上級の測定項目，問題例，留意点，評価について

現代雑誌九十種の用語用字 五十音順語彙表・採集カード（言語処理データ集3）

昭和31年当時の代表的な一般雑誌90種の用語用字について調査研究した成果は、すでに『現代雑誌九十種の用語用字 第一・二・三分冊』（報告21・22・25, 昭和37～39年）として公表されている。その後20年以上を経た今日でも、この成果は高い評価を得ている。ただし、標本使用度数6以下の用語については報告されていなかったし、また、ほとんどの語について、用法ないし文脈は公表されていなかった。しかし、調査研究に使用した大量の50万枚以上にのぼる採集カードは、用語の出現ごとに文脈が記してあり、利用価値が高いと一般に広く認められてきた。特に、最近では、語彙・語法の研究において記述が精密化していることなどに伴い、利用したいという要求が増大している。利用の申込みにはできるだけ便宜を図ってきたが、今回の刊行は、利用に伴ってカードが損傷するのを防ぎつつ、そうした要求にこたえたものである。

五十音順語彙表は大学ノート約1200ページ、採集カードはB7判カード約50万枚の量に及ぶものであるが、これをすべてマイクロフィッシュで複製した。マイクロフィッシュは98こまモードで、量は、

五十音順語彙表 13シート

採集カード 914シート

になっている。刊行に当たっては、五十音順語彙表及び採集カードのもとの状態を説明し、そのマイクロフィッシュの状態を説明した、

解説書 B5判 本文26ページ

を添えた。以上が、高さ14cm×幅20cm×奥行33cmの箱1個に収まっている。体積にして、もとのものの約1/250である。

なお、このマイクロフィッシュ刊行については、昭和61・62年度文部省科学研究費補助金による特定研究(1)「言語情報処理の高度化のための基礎的研究」（研究代表者長尾真京都大学工学部長）の成果を利用した。

現代日本語文法の調査・研究

A 目的と内容

現代日本語の文法を体系的に記述することを目的とし、実際に使用された言語作品を資料として、それを分析するものである。本年度は、以下の題目の研究を進めるとともに、文献カード及び用例の補充を行った。

- 1) 動詞の形態論的分析
- 2) こそあどの分析
- 3) 単語の結合性の研究

B 担当者

言語体系研究部第一研究室

部長 高橋太郎 1, 2 室長 村木新次郎 3 研究補助員
鈴木美都代 2

C 本年度の作業

1では、現代日本語動詞の打ち消しのアスペクトとテンスについて、調査を終え、原稿を執筆した。

2では、シナリオを資料とし、こそあどの指示するもの（人・物・場所など）について調査し、原稿を執筆した。

3では、書きことば資料に基づき、動詞の統語論的特性を調査した。

D 今後の予定

次年度は、文法的類義表現の研究をする。まず、これまでの研究文献の目録を作り、また、現在ある資料によって、いくつかの類義表現の差について調査する。

現代語彙の概観的調査

A 目的と内容

現代日本語の語彙体系を、記述的・統計的・発生的など、いろいろな観点から調査・記述することを目的とする。本年度は、特に、雑誌用語について、これまでの経年調査を継続して進め、また、大規模調査の探索を行った。

B 担当者

言語体系研究部第二研究室

室長 宮島達夫 主任研究官 石井久雄 研究員 高木 翠

C 本年度の経過

1. 経年調査型の雑誌用語調査

雑誌『中央公論』の用語を、1906年から1976年まで10年おきに1万語ずつ合計8万語を調査した結果は、『雑誌用語の変遷』(報告89)として報告した。そのあとを受けて、1986年の『中央公論』の調査を行った。

a. 1986年度用語の五十音順 KWIC を作成した。

1万語を抽出し、パーソナルコンピュータ上で処理した。ついでいる情報は、平仮名表記の見出し及び付属語である。

b. 『雑誌用語の変遷』の「複年度語彙表」と「単年度語彙表」とを合併した。

その二つの語彙表には、読みが付いていないので、言語計量研究部第一研究室の言語計量調査「語彙調査自動化のための基礎的研究」の成果を利用して、読みを付け、全体を五十音順に配列した。

当初の予定では、1986年度分語彙表を本年度中に作成し、その後この作業に移ることとしていたが、同語異語判別の効率化のために、この作業を先行

させることとした。

c. 『雑誌用語の変遷』の基礎作業に関係して、次の論文を発表した。

石井久雄「本文批判」(『研究報告集—9—』(報告94), 1988年3月)

2. 大規模調査型の雑誌用語調査の探索

「現代雑誌九十種の用語用字調査」をモデルとする大規模雑誌用語調査が、現体制で可能か、探索を行った。

a. マイクロフィッシュにより、『現代雑誌九十種の用語用字調査 五十音順語彙表・採集カード』(言語処理データ集3)を刊行した。

「現代雑誌九十種の用語用字調査」について、全容を公開し、研究者等一般からの利用の要求に対応したものである。これに関する意見が得られれば、新しい調査に資することにもなる。(刊行物の概要17ページ参照)

b. 「現代雑誌九十種の用語用字調査」の採集語について、和語の表記を調査した。

漢語・外来語の表記については、すでに報告済みであり(『研究報告集—1, 5—』(報告62, 79)), それに続くものである。

c. 新しい大規模調査について、計画を立案した。

「現代雑誌九十種の用語用字調査」は、1956年の雑誌を対象としていて、30年以上経っていることからみて、それに相当する調査を行うべき時期にきていると考えられる。研究所の体制は、たずさわられる人員としては当時より少ないが、コンピュータが大型及びパーソナルで利用できる。そこで、資料とする雑誌1500冊・48万ページ、 α 単位60万・ β 単位100万の規模で、調査が可能であると結論した。経費が得られれば、調査雑誌の選定などに1年程度の準備期間を設けて、調査に着手したい。

3. 現代語彙成立過程の調査

現代語彙中の基本的な単語がいつから使われたかを日英両語について比較し、語彙の変化を概観した。

D 今後の予定

次年度は、今後の語彙調査に資するため、研究所で従来行った種々の語彙調査の方法・成果を総合的に検討する。単位の設定、同語異語の判別、外来語の扱いなどを問題とする。それを活かしつつ、雑誌『中央公論』の1986年度用語調査の結果をまとめる。また、経費が得られれば、新しい大規模語彙調査に着手し、次次年度以降当分の期間、それを当研究室の調査研究の主軸とする。

以上により、次年度の研究題目は次のようにする。

語彙調査の方法に関する基礎的研究

現代敬語行動の研究

A 目的と内容

現代日本語の敬語・敬語行動の実態を調査・記述するための基礎的研究を行う。特に、言語行動としての敬語行動を把握する視点を考察し、その視点から具体的な敬語行動を調査・分析する方途を探る。

B 担当者

言語行動研究部第一研究室

室長 杉戸清樹 研究補助員 塚田実知代

C 本年度の経過

昭和60年度まで科学研究費補助金の交付を受けて進めた二つの研究、

- ①言語行動の規範とその運用の実態（昭和57～59年度・特定研究「情報化社会における言語の標準化」の1グループとして杉戸が担当）
- ②言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現（昭和60年度奨励研究。代表者・杉戸）

のうち、研究成果が未発表の部分について、資料の補充と整理を進めた。

具体的には、

- ①言語行動の成立要件（たとえば、言語行動の主体、話題、媒体、場面、談話構成など）に直接的な配慮を加えていることを明言するような言語表現
- ②言語行動の種類や機能それ自体を明言する言語表現

という二つの言語表現類型（具体例は、『年報36, 37』を参照されたい）について、②に関しては従来継続した資料の収集を収束させて報告論文執筆のための整理に着手した。①に関しては外国語にも視野を広げて資料を補充す

る作業を進めた。

この研究作業を続けるのと並行して、対象とする言語表現を検討するための基礎的・理論的な研究も続けた。

D 今後の予定

上記で対象にした二つの表現類型のうち、資料の収集・整理が比較的進んだ「②言語行動の種類や機能を明示する言語表現」から、その分類と分析、及び報告論文の執筆を進める。「①言語行動の成立要件についての配慮の明示的表現」については、補充的な資料の収集を継続する。いずれも、昭和64年度末までに報告論文の執筆を完了することを目指す。

目的として掲げるところの〈言語行動としての敬語行動を調査・記述する視点〉に関する基礎的・理論的な考察は、上記の資料を具体的に検討するなかで継続していく。

各地方言親族語彙の言語社会学的研究

A 目 的

この研究課題は、昭和48年度から同51年度までの4年間にわたって実施したものであり、これまで既に下記の研究報告を公刊している。

- (a) 『各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)』（<報告64>昭和45年）
- (b) 「俗信と俚言——朧衣とアライゴ——」（『佐藤茂教授退官記念論集国語学』桜楓社 昭和55年）
- (c) 「私生児を意味する方言のこと」（『研究報告集(3)』<報告71>昭和57年）
- (d) 「標準語 オトウサン・オカアサンの出目」（『研究報告集(8)』<報告90>昭和62年）

今回この研究課題を再び取り上げたのは、これらの報告でも残されている未整理の部分を整理して資料集にまとめ、研究全体の一往の完結を図るためである。具体的には、次のとおり。

上記研究において、全国各地の900点をこえる方言集・方言辞典から採集した方言親族語彙のカードが約3万3千枚ある。カードには、親族語の語形とその意味用法・使用地域などに関する記述が原典のとおり記載されている。このカードを分類整理することによって、資料集『日本方言親族語彙資料集成』（仮称）の原稿を完成させる。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

部長 渡辺友左 研究補助員 塚田実知代

C 本年度の経過

本研究の初年度に当たる前年度には、上記資料集のうち、次の部分の原稿を執筆し終えた。

第1章 同族・親族 第2章 本家・分家など

第3章 隠居など

本年度は、これを受けて次の部分の原稿を執筆し終えた。

第4章 血筋・血統・家筋・家系 第5章 家長・主婦など

第6章 嫡子・相続人など 第7章 夫婦など

第8章 夫 第9章 妻 第10章 妾・本妻

第11章 後妻・後夫・前妻・前夫 第12章 鰥夫・寡婦

第13章 若主人・若主婦 第14章 親など

第15章 親子・擬制的親子 第16章 父

第17章 母

D 今後の予定

本研究の最終年次にあたる次年度には、残る次の部分の原稿を執筆して資料集全体の原稿を完成させ、刊行する予定である。

第18章 継母・継子など 第19章 子など

第20章 むすこ・むすめなど 第21章 長子・次子以下など

第22章 長男・長女

第23章 次男以下・次男・三男など

第24章 次女以下・次女・三女など

第25章 養子・養親・里子・里親など

第26章 祖父母・祖父・祖母

第27章 曾祖父母・曾祖父・曾祖母

第28章 孫・曾孫・玄孫など 第29章 きょうだい

第30章 兄 第31章 姉

第32章 弟

第34章 おじなど

第36章 おい・めい

第37章 いとこ・ふたいとこなど

第39章 婿など

第41章 私生児

第33章 妹

第35章 おばなど

第38章 嫁など

第40章 舅・姑・小姑など

所属集団の差異による言語行動の比較研究

A 目 的

人間の言語行動は、その人が置かれている社会的諸状況に依存する面が大きい。性・年齢などの自然的生得的なものをはじめとし、血縁的（例えば、家族）、地縁的（居住地）、社会的（職業や階層）あるいは心理的（仲間意識やパーソナリティ）などの諸条件が絡み合って、人間にあるタイプの言語行動を取らせていると考えられる。このような認識に基づいて、種々の観点から社会言語学的な調査研究を行う。

B 担 当 者

言語行動第二研究室

室長 江川 清 主任研究官 米田正人 研究補助員 磯部よし子

C 本年度の研究

1. 豊中・宮津・豊岡の各市で市民を対象として実施した言語行動場面調査の結果の一部の分析を行った。
2. 前年度に引き続き、社会言語学的調査研究の効率化及び日本人の言語生活史の概観などを目的としたデータベースを作成するための準備の一環として、各機関でのデータベースの現状を調査するとともに、基礎となる文献資料の収集を行った。また、データベース・マネージメント・システムとしての各種パソコン・データベースを比較検討した。

D 次年度の予定

1. 上記の言語行動場面調査の分析をさらに続け、報告書用の原稿を執筆する（刊行は昭和64年度の予定）。

2. 社会言語学データベースの一つとしての、「質問文データベース」の作成に取り組む（5年計画）。

言語行動様式の分析のための基礎的研究

A 目 的

コミュニケーションとしての言語行動を総合的に把握するための基礎として、身振りや動作などの「行動」を記述するための枠組み作りを主目的とする。あわせて、実際の会話の分析やコミュニケーション・ネットワークなどの解明及びこれらの定質的・定量的分析のための方法論を検討する。

B 担 当 者

言語行動第二研究室

室長 江川 清 主任研究官 米田正人 研究補助員 磯部よし子
同第一研究室 室長 杉戸清樹

C 本年度の研究

前年度に、言語表現と非言語的行動との関連性に関する研究の成果の一部を、『談話行動の諸相——座談資料の分析』（報告92）として報告書にまとめて刊行した。本年度は、将来の方向を探るために、報告書では十分には扱えなかった諸問題についての検討を行った。なお、本研究は本年度をもって一応終了する。

漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究

A 目 的

漢字仮名まじり文の読みの過程とアルファベットの文字体系による読みの過程を比較することによって、漢字仮名まじり文の読みの特徴を明確にする。

研究方法は、当面は、読みの際の眼球運動の測定を用いる。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

室長 神部尚武

C 本年度の経過

本年度は、特別研究5年計画の第1年次にあたり、次の研究を行った。

(1) 読みの眼球運動における一つ一つの注視点の位置と、そこでの停留時間を、文章を重ねて表示するシステムを眼球運動測定装置とパーソナル・コンピュータの組み合わせで実現した。頭が多少動いても文章の上の注視点の位置を正確にとらえる装置を目ざして、改良中。

(2) 文中の注視点での停留時間を変動させる要因を調べている。文の句構造の境目の手前や文末で停留時間の増加が見られる。

(3) 周辺視で得られる情報を、ディスプレイの上で制御したとき、読みの眼球運動にどのような影響が現れるかを調べている。これによって、周辺視で前もって、そこに漢字表記語があるか、片仮名表記語があるかという情報を得ることが、日本語の漢字仮名まじり文の読みでは、かなり重要な役割を果たしていることを明確にできると考えている。本年度は、注視点のまわりには、左右に非対称に文字が提示される条件で実験を行った。

(4) 研究結果の一部を「眼球運動と読みの過程」という題で日本心理学会

第51回大会発表論文集（1987. 10. 12—14, 東京大学）133 ページに報告した。

D 今後の予定

(1) 眼球運動測定装置の改良を進める。眼球運動測定部にアイ・カメラ方式（角膜反射光法）を取り入れる。

(2) SYNTAGMATIC な関係が、停留時間にどのように現れるかに関する実験を進める。

(3) 周辺視で得られる情報（例えば漢字表記語の有無）を制御する実験を進める。

動的人工口蓋による発音過程に関する研究

A 目 的

標記の研究は、言語行動第三研究室が継続的に行っている現代日本語の音声の、音韻論上の問題、表現的な個々の特徴などを調音的、音響的、機能的な側面から明らかにすることを目的とした一連の研究の中の一つである。本研究は、主に動的人工口蓋装置 (dynamic palatograph, 以下 DP と略す) による調音運動の観測、分析を通して研究を進める。当面は、標準語の音声を分析の対象とするが、比較の必要から、方言や外国語の音声も今後取り扱うことを予定している。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

主任研究官 高田正治

C 本年度の経過

前年度に引き続き、収集ずみの青森方言の DP 資料の中から、この方言の特徴的な音声現象 (中舌母音、特殊音節, t, ts, k の有声化, b, d, dz, g の鼻音化, k, g の破擦音化) に対象をしばり、標準語との対比的な分析を調音、音響の両側面から行い、その実態のまとめを進めた。

また、上記の作業と併行して、当研究室所有の日本語音声の X 線映画資料の中の子音を対象として実験音声学的な立場から分析及び考察を加え、その結果のまとめ作業も進めた。

D 年次度の計画

次年度は、この研究の最終年次に当たるので、現在までに得られた成果を

もとにして、以下の作業を進める予定である。

1. 「青森方言の実験音声学的分析」（仮題）を研究報告集（1988年度）の中で報告する。
2. 資料集『標準語のパラトグラム』（仮題）を刊行する。
3. 「X線映画資料による子音の発音の研究」（仮題）のまとめを終了する。

文法的特徴の全国的地域差に関する研究

A 目 的

方言における文法の諸特徴について、その全国的地域差を明らかにする。具体的には、これまでに行った個々の事象についての臨地調査結果(全国807地点)に基づいて言語地図を作成し、さらに新たに全国十数地点で体系的調査を実施し、両者を総合的に分析して報告書を執筆する。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

室長 佐藤亮一 主任研究官 沢木幹栄 研究員 小林 隆 白沢
宏枝 非常勤研究員 W. A. グロータース (62. 4. 1~63. 3. 31)

昭和62年度の地方研究員は次の各氏に委嘱した。

担当地区	氏名	所属機関(職)
南東北	加藤 正信	東北大学文学部(教授)
関 東	大島 一郎	東京都立大学人文学部(教授)
中 部	馬瀬 良雄	信州大学人文学部(教授)
東 海	山口 幸洋	静岡大学教養部(非常勤講師)
北 陸	真田 信治	大阪大学文学部(助教授)
近 畿	山本 俊治	武庫川女子大学文学部(教授)
中国 I	室山 敏昭	広島大学文学部(助教授)
四 国	土居 重俊	高知学園短期大学(非常勤講師)
北九州	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部(教授)
南九州	田尻 英三	鹿児島大学教育学部(助教授)

C 本年度の調査研究

この研究は昭和52年度～56年度の「方言における音韻・文法の諸特徴についての全国的調査研究」、及び、昭和57年度の「文法の諸特徴についての全国的調査研究」を引き継ぐものである。本年度は、特別研究5年計画の第5年次に当たり、下記の調査・作業を行った。

- (1) 前年度に引き続いて、電算機に入力したデータを出力して校正作業を行った。
- (2) これまでの調査結果の一部について言語地図を作成した。
- (3) 表現法Ⅲ（待遇表現）について、下記の12地点で検証的調査を実施した。

地区名	地点名	担当者
北東北	青森県黒石市大字袋	佐藤 亮一
南東北	宮城県多賀城市（高崎・八幡地区）	加藤 正信
関東	東京都八丈町三根	大島 一郎
中部	長野県松本市大字島立	馬瀬 良雄
東海	愛知県名古屋市（旧市街地中心部）	山口 幸洋
北陸	福井県吉田郡松岡町	真田 信治
近畿	大阪市東区道修町	山本 俊治
中国Ⅰ	広島県呉市苗代町	室山 敏昭
中国Ⅱ	島根県松江市新庄町	小林 隆
四国	高知県土佐郡土佐町	土居 重俊
北九州	長崎市手熊町	愛宕八郎康隆
南九州	鹿児島市（中心部）	田尻 英三
沖縄	沖縄県石垣市川平	沢木 幹栄

なお、『方言研究法の探索』（報告93, 11ページ参照）及び『方言談話資料(10)』（資料集10—10, 14ページ参照）を刊行した。また、本研究に関して、「方言文法の発見——方言文法全国調査から——」と題する中間報告を『日本語

学』(第6巻第3号, 昭和62年3月号)に行った。

D 今後の予定

次年度以降は, 新たな研究題目の下に, 報告書を執筆・作成し, 『方言文法全国地図』として, 順次刊行する予定である。報告書の構成はおよそ次のとおりである。

第1巻	助詞篇	(60図)	昭和63年度刊行予定
第2巻	活用篇Ⅰ	(45図程度)	昭和64年度刊行目標
第3巻	活用篇Ⅱ	(45図程度)	昭和65年度 //
第4巻	表現法篇Ⅰ	(50図程度)	昭和66年度 //
第5巻	表現法篇Ⅱ	(45図程度)	昭和67年度 //
第6巻	表現法篇Ⅲ	(55図程度)	昭和68年度 //

方言分布の歴史的解釈に関する研究

A 目 的

方言分布の歴史的解釈を国語史に取りこみ、意味的・位相的・地理的観点から従来の文献による国語史を見直し、また、新たな国語史の記述を行う。国立国語研究所がこれまで研究・蓄積してきた方言地理学的方法・資料を、積極的に国語史に生かすという、発展的継承のための研究として位置付けたい。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

研究員 小林 隆

C 本年度の仕事

(1) 方言・文献間における語の意味対応についての考察

文献国語史と方言地理学との対照から語史の構成を行おうとする場合、同一語形であるにもかかわらず、文献と方言とで意味が対応しない現象がしばしば確認され、問題となっていた。しかし、この問題を詳しく検討するためには、現在公にされている方言地図の項目では著しく不十分であり、体系的、かつ詳細に意味項目を設定した地図が必要となる。そこでまず、『日本言語地図』の身体項目について関連意味項目（例えば、<下顎>に対して<上顎><頬骨>など）の全国方言分布地図を作製する。そして、その資料を、意味的に問題のある語史の記述に役立てる。さらに、この資料を利用して、文献と方言との語の意味対応のパターンを整理し、不対応が生じた原因について概括的に考察する、というところまで踏み込みたい。

なお、作製する地図の資料として、昭和 61 年度に通信調査により 50 項目

1400地点分の回答を収集している。この地図は、現在、通信調査法で大規模な方言分布調査が可能かどうかという実験的意義ももつ。

本年度は、この地図のための回答者の情報（氏名・住所・年齢・居住歴など）について、整理作業を行った。

(2) 方言の史的位相性についての考察

従来、方言を国語史の資料として利用する場合、それが位相的にどのように位置付けられるかということについては、基本的なことでありながら十分おさえられていなかった。方言は、基本的に庶民階層の口頭語史を反映するものではないかと考えるので、その点を明らかにしたい。もし、それが当たっているなら、方言による国語史は、これまでの文献による国語史を位相的に見直し、補強することに役立つはずである。具体例において、文献と方言をからみあわせつつ、位相的な視野の広がりをもった語史の記述も行ってみたい。

本年度は、語史資料としての方言の位相的性格について理論的・実証的に考察した。その結果、大づかみに言って、方言は庶民階層の口頭語史を反映し、その点で、文献資料にない特質をもつことが納得された（小林「方言の史的位相性」『国語語彙史の研究8』昭62.11に報告）。また、方言分布によれば、従来、文献では十分知り得なかった庶民口頭語史を発掘し得るということを、〈薬指〉の名称の変遷を典型的な例として示すための準備を行った。具体的には、対立する位相に属すると思われるクスシユビとクスリユビの用例について、同一内容の諸本間における語形（表記）の異同を調査した。

(3) 全国方言分布の成立過程についての考察

これまで、国語史と言えば中央語史を指したが、日本全土にわたる国語史の記述が理想であることは、言うまでもない。そのためには、全国方言の形成史について知ることが必要となろう。従来、方言分布から中央語史を構成するという方向に比べ、文献（中央語史）から方言分布の形成を考えるという方向の試みは少なく、不十分であった。そこで、まず、『日本言語地図』に見る現代の全国方言分布と、中央文献資料とを対比することにより、前者

の史的傾向を概括的に探る。そして、そこから、全国方言分布がいかに作り上げられてきたか、その形成史への考察に及びたい。

本年度は、周圏分布と並び特徴的かつ事例の多い東西対立分布について、その史的傾向を考え始めた。東西対立分布にはどのような地理的パターンがあり、それぞれ、文献上の語史とどんな対応関係にあるのか（例えば、東西どちらに分布する語形が古くいつから文献に現れるかというようなこと）を調査している。

D 今後の予定

次年度は、次の仕事を行いたい。

(1) 方言・文献間における語の意味対応についての考察

『日本言語地図』の関連意味項目地図作製のために、回答地点番号の決定、回答結果の整理（調査票からカードへの転写など）の作業を行いたい。

(2) 方言の史的位相性についての考察

上で述べた〈薬指〉の名称の変遷について、クスシユビとクスリユビの位相差を問題にしてみたい。また、従来、庶民の話しことばとは無縁とされていた歌語について、その位相的位置付けを、〈馬〉のコマを例に、方言の側から再検討してみたい。

(3) 全国方言分布の成立過程についての考察

上で述べた調査を進め、東西対立分布の成立過程に考察を及ぼしたい。周圏分布の成立過程との関係にも配慮する。

明治時代における漢語の研究

A 目的・意義

明治時代は、現代語の直接的な源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化に伴い、日本語は大きく変化した。中でも語彙の変化が激しく、それは漢語に最も著しく現れている。そこで、本研究は明治時代の各種文献に現れた漢語の実態を調査し、さらに大正末期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語及び漢字表記の変遷の条件と方向とを見極め、現代語成立の歴史的背景を明らかにする。

B 担当者

言語変化研究部第二研究室

部長 飛田良文 (1)～(5) 室長 梶原滉太郎 (1)～(5) 主任研究官
高梨信博 (1)～(4) 研究補助員 中山典子 (1)～(4)

C これまでの経過

言語変化研究部第二研究室（昭和48年度までは近代語研究室）では、昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の用語索引を作成し、48年度には『安愚楽鍋用語索引』（資料集9）を刊行した（『年報21～30』参照）。現在、明治初期の代表的翻訳小説『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』の漢語について、また英和辞書の訳語及び自然科学用語の語史について調査を行っている。

D 本年度の作業

- (1) 『花柳春話』における漢語の研究

上記の作業は行わなかった。

(2) 英和辞書における訳語の研究

本年度は、語別訳語対照一覧表の検討、調整及び訳語索引の作成を行った。その際、漢字表記の訳語の読み方（索引の見出し）をきめる整理基準として、前年度に加え、新たに次のような基準を定めた。

訳語索引の見出しの立て方

1. 仮名表記の見出しは、すべて現代仮名遣いにする。

(例) tōhyō (トーヒョー) = トウヘウ = トウヒョウ (Vote)

2. 2字以上の漢字表記で、音読みをするか、訓読みをするか判断に迷う場合は、同じ漢字を含む訳語の読み方を参考にする。

(例) 尋出の場合 看出 (カンシュツ) }
 查出 (サシュツ) } の読み方にならない、
 探出 (タンシュツ) } 「ジンシュツ」とする。
 露出 (ロシュツ)

(例) 露示の場合 現示 (ゲンジ) }
 開示 (カイジ) } の読み方にならない、
 顕示 (ケンジ) } 「ロジ」とする。

(2例とも Discovery)

基本的に読み方の基準は『日本国語大辞典』による。

3. 「一」の読み方について

一 漢音 イツ

呉音 イチ

- ㊸ 「一」の複合語は「一体」イツタイ「一物」イチブツのように、読み方の固定しているものはその読み方による。

(例) 一人、一個、一頭、一員 (Individual)
イチニン イツゴ イツトウ イチイン

- ㊹ 読みのゆれる複合語は「一個人」「一個物」「一個体」「一私人」のような場合は、複合語で「一動物」のように「イチドウブツ」としか読めないものがあるので、イチ (呉音) で読むことにする。

(例) イチコジン, イチコブツ, イチコタイ, イチシジン (Individual)

4. (1) 振り仮名がなく, (2) 音読みであることが明らかで, (3) 漢音読みと呉音読みが可能である場合で, (4) しかも時代によって変化する場合, この四つの条件すべてを満たすものは, その時代の読み方に従う。

(例) 邪神 (Satan)

{ 『大字典』 (大正6年) ジャシン
『大漢和辞典』 (昭和35年) ジャシン
『漢英対照いろは辞典』 (明治21年) じゃじん
↓
『ことばの泉』 (明治31年) ぢゃまん
↓
『大辞典』 (山田美妙) (明治45年) じゃしん

漢字音は, 邪 {漢音 シャ} 神 {漢音 シン} である。 (『大漢和』)
 {呉音 ジャ} {呉音 ジン}

このような場合, 訳語は1814年 (文化11年) の『譜厄利亜語林大成』にのみ見えるので, 年代の一番近い『漢英対照いろは辞典』の「じゃじん」に従う。

5. 語別訳語対照一覧表の中に「=△△△」と別の英語の単語, 熟語が書いてあった場合, その単語を, それを書いてあった辞書で引き直し, 「△△△」の意味を加えて書く。その際, 注として「=△△△」と書く。

(例) Landscape ⊖風景, 景色, 山水, ⊖ [美] 山水畫, 風景畫,

⊕=LANDSCAPE—GARDENING, ⊕梗概, 要略

注に「=LANDSCAPE—GARDENING」と記した上で, 「庭園術, 造庭法」という訳語の項目を作る。

ただし, 「Learn する事」のように「動詞+する事」としてある場合, 日本語として意味が通じなくなるので, そのまま見出しも「Learn スルコト」とした。(Learning)

また, Coincidence=Concurrence of events のように, その辞書に「Concurrence」の項目がない場合も, 見出しは「Concurrence of events」とする。(Coincidence)

- (3) 自然科学用語の語史研究

この研究は5年計画の「現代語彙の源流に関する研究」でし残した調査を継続するものである。

以前の作業で選び出した用語について、それらの発生と定着の過程を明らかにするため、前年度に引き続き自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書などから用例採集を行った。本年度は数学・物理学・化学・生物学・天文学・地学の6科目について、主に明治時代の文献延べ38冊から合計約9,000枚の用語カードを作成した。

数学……合計4冊，同989ページ

- * 『^{九十七時}_{二十分}月世界旅行』 明治19年 井上勤 (訳述)
- 『実用 三角術ト対数用法』 明治34年 共益商社 (編)
- 『新式 三角法教科書』 大正1年 高木貞治
- 『代数学及幾何学の基礎概念』 大正10年 柳原吉次 (訳)

物理学……合計12冊，同2,120ページ

- * 『月世界一周』 明治16年 井上 勤 (訳述)
- * 『^{亞非利}_{加内地}三十五日間空中旅行』 巻1～7 (7分冊) 明治16～17年 井上勤 (訳)
- * 『^{六万}_{英里}海底紀行』 明治17年 井上勤 (訳述)
- * 『^{九十七時}_{二十分}月世界旅行』 明治19年 井上勤 (訳述)
- 『中学新物理』 巻上・下 いずれも昭和3年 (訂正再版)

化学……合計10冊，同1,682ページ

- * 『月世界一周』 明治16年 井上勤 (訳述)
- * 『^{亞非利}_{加内地}三十五日間空中旅行』 巻1～7 (7分冊) 明治16～17年 井上勤 (訳)
- * 『^{六万}_{英里}海底紀行』 明治17年 井上勤 (訳述)
- * 『^{九十七時}_{二十分}月世界旅行』 明治19年 井上勤 (訳述)

生物学……合計6冊，同1,608ページ

- * 『月世界一周』 明治16年 井上勤 (訳述)
- 『^五_{湖中}海底旅行』 上・下編 明治17～18年 大平三次 (重訳)
- 『^{改訂}生物Ⅰ』 昭和58年 藤井隆ほか
- 『^{改訂}生物Ⅱ』 昭和58年 藤井隆ほか
- 『^大_{教養}生物学』 昭和57年 (2訂版) 入来重盛 (編)

天文学……合計3冊，同810ページ

- * 『月世界一周』 明治16年 井上勤（訳述）
- * 『^{九十七時}_{二十分間}月世界旅行』 明治19年 井上勤（訳述）
- * 『地文学』 明治24年 敬業社（編）

地学……合計3冊，同810ページ

- * 『月世界一周』 明治16年 井上勤（訳述）
- * 『^{九十七時}_{二十分間}月世界旅行』 明治19年 井上勤（訳述）
- * 『地文学』 明治24年 敬業社（編）

以上の6科目の総計38冊，同8,019ページである。なお，上記の書名のうち*印をつけたものは，その内容が2科目以上にわたっていて，用例採集作業を2科目以上の視点で行ったものである。

本年度に調査した文献の中に，井上勤の訳または記述による，明治10年代の通俗科学小説が少なからず含まれている。これらの文献は当時の有力な啓蒙書であり，そこで使われている用語はそれぞれの1冊においても，自然科学の多くの分野にわたっている。また，それらの表記は振り仮名のついたものが多く，その点でも専門書や教科書などとは異なっているのである。いわゆる啓蒙書の中でも，これら通俗科学小説を少なからず取り上げ，科学用語（及び知識）の広がりについて見てみようとしたのは，本年度の調査の一つの特色である。

(4) 漢語研究のための著書・論文目録の作成

前年度に引き続き，漢語に関する研究文献を収集し，目録に補充した。

(5) 近代語研究資料の調査

昭和62年9月30日～10月4日の5日間にわたり，東北大学付属図書館所蔵の狩野文庫・林文庫・藤原文庫などの漢訳洋書について調査を行い，57年度に作成した「漢訳洋書目録」草稿の東北大学所蔵本についての確認作業を行った。調査に当たっては同図書館閲覧係の方々及び東北大学教授・加藤正信氏のお世話になった。

また，昭和63年3月24日～26日の3日間，神宮文庫所蔵の幕末・明治期の

自然科学の文献及び明治初期の速記関係の文献について調査を行った。調査に当たっては同文庫閲覧係の方々のお世話になった。

E 今後の予定

次年度は、本年度の作業を継続し、下記の作業を行う予定である。

- (1) 『花柳春話』の漢語の研究は文体別の用例集を作成する。
- (2) 英和辞書における訳語の研究は語別訳語対照表の索引作成作業を行う。
- (3) 自然科学用語の語史研究は明治・大正時代の自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書から用例採集を続ける。そして、一部の語については語史の論文を執筆する。

児童・生徒の言語習得に関する調査研究

A 目 的

児童・生徒の母国語の習得過程を明らかにすることを目的として、昭和60年度から行っている。

B 担 当 者

言語教育研究部

部長 村石昭三（室長事務取扱）(1) 研究員 島村直己（62.7.1 から主任
研究官）(1) 研究員 茂呂雄二(2) 川又瑠璃子(1)(2)

C 本年度の作業

(1) 漢字について

1. 常用漢字の習得度調査

文部省科学研究費補助金特定研究(1)「常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究」（代表 村石昭三、昭和57年度～59年度）の一部として行った漢字の習得度調査の集計作業を行い、主要な結果について、『児童・生徒の常用漢字の習得』（報告95）にまとめ、刊行した。

また、前年度に行った児童の漢字学習に関するアンケート調査の集計・分析を行い、その結果について、次の発表を行った。

島村直己「児童の漢字学習—アンケート調査の結果から—」日本教育学会
第46回大会、昭和62年8月28日

2. 児童の漢字使用に関する探索的研究

各種の分析に使えるように、約200編の作文について、コンピューターで文脈付き用語索引を作成し、それにいくつかの付加情報を付けるという作業を行った。

(2) 作文について

1. 文章化能力に関する探索的研究

文章を作り出す過程を吟味するために、作文の基本的な性格と書くうえで
の目的・機能を多面的に変えて資料を収集してきたが、本年度は次の二種類
の資料を収集した。

①実験的に統制した資料

一定の内容を他者に知らせるコミュニケーション場面を設定した。東京
都練馬区の小学生を被験者とした。各学年 100 人、合計 600 人の資料を収
集した。課題は二つで、第一の課題ではあるゲームを、第二の課題では絵
を伝達するように被験者に教示した。

この実験的な課題環境は、伝達すべき内容は統制されているが、その性
格は普通に教室で見られるテストに似たものとなっている。つまり、内容
を統制することで、それぞれの資料に共通した評価を与えることができる。
一方で、いわゆるテストに対する構えを子供たちに取りさせた環境で書かれ
た資料である。この資料は、この同じ内容を伝達する場面で、その目的や
目的と課題の制約の関連をより明確に設定した環境で書かれたものと、比
較・対照することができる。また、書く目的や課題の制約と目的の関連を
子供自身がどのように、どれほど作り出すことができるかを見るための資
料となる。

資料の収集は62年11月に行われた。

②実践資料の収集

教室で教師の援助を受け、教師及び他の子供たちとのやりとりを経て書
かれた作文資料は、実験的な環境で短時間の内に書かれるものと異なり、
子供の書くことへの身構えの変容とそれに伴う文章を書く能力の変化を明
らかにするうえで役立つ貴重な資料である。本年度は、絵を文章化すると
きに、事前に有意味な準備的活動を行う実践資料を収集し分析した。

横浜市の小学校の協力を得て、小学5年生を対象に、4コマ漫画を文章
化することをテーマにした実践過程で書かれた全資料を複写・整理した。

この実践は、単に絵を文章化するように子供に求めるのではなく、絵を文章化しなければならない場面を文章化に先立って設定していることが特色である。この準備的な活動によって、子供たちがそれまでにすでに獲得していながらも、目的とそれに必要な知識・技能の関連が与えられない課題場面では自らは遂行できなかった諸能力をあらわにするものと考えられる。

2. 児童の作文使用語彙調査

文部省科学研究費補助金特定研究(1) 「言語使用能力の発達段階とその標準化に関する研究」(代表 岡部慶三, 昭和57年度~59年度)の一部として行ってきた作文使用語彙調査については、国語研究所大型計算機のディスクファイルに全学年使用語彙表を作成し、その校正作業、並びに追加の計数作業を行った。

D 次年度の予定

1. 常用漢字の習得度調査に関しては、報告書に報告しなかったものについて集計・分析を継続する。
2. 児童の漢字使用に関する探索的研究は今年度で終了するが、文脈付き用語索引に付加情報を付ける作業は、続行する。
3. 語彙教育に関する探索的研究を開始する。
4. 文章化能力に関しては、収集した資料のまとめを行う。
5. 児童の作文使用語彙調査に関しては、校正作業を完了し、語彙表と分析を合わせた報告書を執筆し、刊行する。
6. 幼児・児童の書きことばの獲得に関する調査研究を開始する。この調査研究の目的は、文字の成立以前にあって、疑似的・模倣的でありながら書きことばの獲得につながる諸活動を明らかにすることにある。次年度はその準備を行う。

言語計量調査

語彙調査自動化のための基礎的研究

A 目 的

これまでに開発された電子計算機を用いた語彙調査システムは、きめ細かい調査・分析ができるようになったものの、自動処理、及び調査結果の管理運用方法などについては十分ではない。そこで、これらを目標とした新しい語彙調査システムを開発する。

具体的には次の4点について、研究開発・調査分析を進める。

1. 自動処理プログラムの開発
2. 効率的な修正システムの開発
3. 調査結果の蓄積・検索・分析方法の開発、及びその運用方法の研究
4. 新しい電子計算機・日本語処理システムの調査研究

B 担 当 者

言語計量研究部第一研究室

部長 野村雅昭 室長 中野 洋 研究員 石井正彦 山崎 誠

研究補助員 小沼 悦

C 本年度の研究経過

本年度の研究は、大きく二つに分かれる。すなわち、語彙調査自動化のための準備的研究と、これまでに行われてきた中学校教科書、及び高校教科書の語彙調査の実施とまとめとである。

I. 語彙調査自動化の基礎的研究

電子計算機を用いた語彙調査の中では、語の並べかえ・用例の作成・頻度や比率の計算・作表を計算機によって行い、文章の単語分割・漢字の読み仮名付け・品詞の認定・同じ語か異なる語かの判定などを人間によって行って

きた。ところが、電子計算機の性能が上がったことにより、人間が担当してきた作業の一部も計算機によって行うことが可能になった。一貫処理システムは自動単語分割・自動漢字解読の機能を持ったそのようなプログラムシステムである。

本年度は、テレビ放送のこたば (NHK NC 9) のデータを入力し、文節分ち書きで書いた話しこたばテキストを処理できるプログラムを作成した。また、この出力データを対象に KWIC や語彙調査のプログラムを作成した。

7月20日には、文部省科学研究費による特定研究「言語情報処理の高度化のための基礎的研究」(代表者:長尾真)の研究会「自然言語処理ソフトウェア」(会場:東京工業大学)で、下記の発表を行った。

中野洋「一貫処理システム」(言語情報処理の高度化研究報告4「文法と意味自然言語処理ソフトウェア」,昭和63年3月)

また、2月12日には研究会を開き、本特別研究の総括、評価を行った。また、パーソナルコンピュータ上で動く一貫処理プログラムの使用方法について説明した。

なお、研究経過報告は言語計量研究部の内部資料『CL通信』に随時報告した。すなわち、

研究目的の1「自動処理プログラムの開発」同2「効率的な修正システムの開発」については、

中野洋「パソコン上で動く語彙調査システム」(CL通信第7号)

研究目的の3「調査結果の蓄積・検索・分析方法の開発、及びその運用方法の研究」には、

山崎誠「教科書語彙調査データ解説」(CL通信第8号)

研究目的の4「新しい電子計算機・日本語処理システムの調査研究」には
米田純子「漢字総合辞書」(CL通信第8号)

米田純子「プリンタによる字体の違い」(CL通信第10号)

以上は、この研究目的に寄与する研究成果である。

以下に、本特別研究の5年間の成果をまとめて記す。

まとめ

1. 自動処理プログラムの開発

- ①一貫処理の実用化に成功した。大型計算機でも、パソコンでも動かせた。
- ②活用形変換プログラムを新たに作成した。
- ③それぞれの評価実験では、精度90%以上を見込むことができる。
- ④これらにより、入力パンチの費用や作業の省力化が図られた。
- ⑤機械辞書として、漢字解読辞書を拡充した (JIS 第1水準まで)。
- ⑥連語辞書、類義語辞書、動詞辞書を作成したが、処理に組込むにはいかなかった。
- ⑦話しことばの処理用に専用辞書や処理基準が必要であることがわかった。

2. 効率的な修正システムの開発

- ①データベースマネジメントシステムで可能になることがわかった。
- ②KWIC によるエラーの発見と一括修正のプログラムを作成した。
- ③パソコンや端末機による修正が有効であることが分かった。
- ④大型機で DBMS (Data Base Manegiment System) は、新たに作成はしなかった。

3. 調査結果の蓄積・検索・分析方法の開発、及びその運用方法の研究

- ①総合辞書について検討した。
- ②「分類語彙表」データを増補する作業 (科研費) が完成すれば、これを利用する。
- ③セマンティックカウントについて考えた。しかし、どのように実現するかまでは、検討できなかった。
- ④DBMS による実験はできなかった。次期プロジェクトで行う。
- ⑤したがって、語彙調査用 DBMS が実用に耐える処理速度を保てるか、また、どれほどディスクを占有するかはわからなかった。

4. 新しい電子計算機・日本語処理システムの調査研究

- ①PROLOG 言語について検討した。メーカー側のバックアップが必要である。

- ②パソコンを入力，修正機械として使えることがわかった。
- ③ワープロとデータの互換プログラムが便利であることがわかった。
- ④データベースプログラムで語彙調査を行うには処理時間とメモリーの点で無駄が多いことがわかった。

今後の課題

1. 次期プロジェクト「言語計量調査—テレビ放送の用語調査」用にプログラムシステムを検討すること。
2. 話しことばデータの処理に，一貫処理を利用するのか，昭和55～57年度科研費「話しことばの調査」（代表者 齋賀秀夫）を用いるのかは，今後の検討課題である。
3. 報告書の執筆
論文だけでなく，プログラムリスト及びプログラムと辞書が入ったフロッピーの公開を図りたい。
4. 高度な処理—構文解析・意味解析・文脈処理などは，単位分割や語の認定には必要な処理なので，今後とも研究を続けたい。
5. 総合辞書の構築を図りたい。

Ⅱ. 語彙調査の実施とまとめ

中学校教科書の語彙調査は，中学校社会科理科教科書7冊（社会科—地理的分野・歴史的分野・公民的分野，理科—第一分野・第二分野各上・下）の本文部分をすべて取り出し，全数調査するものである。言語量は約20万語（単位は文を構成する要素という観点から規定した単位のW単位）である。この調査は「高校教科書調査」に比べて自動化が図られている。すなわち，入力段階では，読み仮名等の情報を省き，高校教科書のデータを辞書として読み仮名・代表形を自動的につける。その後，検査を行い，情報のつかなかった箇所・情報の違っている箇所のみを，人手による修正を行った。

本年度は，高校教科書・中学校教科書の語彙調査の分析をするために，これまで蓄積してきた大量の教科書データを整理・統合した。これについては

次の報告がある。

山崎誠「教科書語彙調査データ解説」(CL通信第8号)

D 次年度の予定

語彙調査自動化の研究は、本年度で終了する。次年度は、研究成果を報告書に原稿としてまとめる。また、次年度から始まる特別研究「言語計量調査—テレビ放送の用語調査」のプログラムシステムに応用する予定である。

高校教科書・中学校教科書の語彙調査については、次年度に二者をあわせた分析のための報告書を刊行する予定である。

現代の文字・表記に関する研究

A 目 的

現代における文字・表記の実態を調査し、記述するとともに、そこに含まれる諸問題について種々の観点から、理論的な検討を行い、あわせて研究方法の開発を試みる。

B 担 当 者

言語計量研究部第二研究室

室長 鶴岡昭夫 (62.8.31 まで) 1 主任研究官 佐竹秀雄 (62.9.1 から
室長) 2 研究補助員 沢村都喜江 1, 2

C 本年度の研究経過

1. 教科書の表記の研究

教科書の語彙調査データを用いて、現代表記の実態の一端を計量言語学的に記述すること、またその分析方法を開発することを試みることを目的としている。そのために、前年度は、高校教科書（理科・社会科9教科）データ及び中学校教科書データ（理科・社会科7教科）データを、文字・表記研究用ファイルに変換した。本年度はそのデータファイルの修正・整備を行うとともに、各種の分析・集計用のプログラムを開発した。

2. 語表記データの整備

本年度は、二種のデータについて修正・加工の作業を終えた。

一つは、1966年の新聞3紙の語彙調査データで、これは、同語異語の判別をほどこし、かつ、表記形式別に整理した、新聞の語表記一覧ファイルを作成した。もう一つは、1978年の新聞3紙のデータで、こちらはサンプリングした原データの修正と、分析のためのフォーマットを完了した。

D 今後の予定

教科書の表記については、集計と分析結果を、言語計量研究部第一研究室が次年度に刊行を予定している報告書に掲載する。

語表記データについては、「文字体系の使い分け」や「表記のゆれの度合い」などの観点から数量的な分析を行う。

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目的・意義

本研究は、各種の調査に使用するシステム及びプログラミング技術に関する方法の開発と、言語のモデル化など理論に中心をおいた、二つの側面を対象にする。これらの研究は、現代日本語研究に必要な日本語データベースの作成、データベース化のための基礎資料の収集、データ提供手段の開発、用語・用字調査の効率化を図る方法論の研究に役立つものとなる。

また、日本語処理のための電子計算機導入に伴う、基本機能・システム構成を検討する場合にも重要である。

B 担当者

言語計量研究部第三研究室

室長 斎藤秀紀 主任研究官 田中卓史 研究補助員 小高京子
米田純子

C 本年度の研究及び作業

1. 言語処理に関する基礎的研究

現代日本語の用例集を対象とした総合データベースを作成するため、新聞3紙（昭和41年発行・朝日・毎日・読売各1年分）のKWIC用例集の校正及び修正作業を行った。用例数は、数字・記号類を省いた約1,944,800件である。また、漢字辞書については、属性情報の見直しと並行して、関係形式のデータベースへの移植と運用上の問題を探る基礎実験を行った。

さらに、異なるキーをもつ二つのデータベースを論理的に結合するため、疎結合方式によるデータ接続法を検討した。疎結合とは、漢字をすべてのデータの第一次キーとして使用し、次に検索された情報を以降の検索用キーと

して順次指定する方法である。現在、この方式によるシステムの作成を進めているが、異なるデータに対する総合的なデータ管理にも応用できる見通しを得た。

その他、直木賞受賞作品6点を対象に KWIC 用例集の作成を兼ねた、調査法の開発を行い、国定読本第3期(担当:国語辞典編集準備室)で使用した結果、同語異語判別を含む約91,200語を300人日程度で処理できることを確認した。

発表論文

1) 斎藤秀紀「漢字情報データベース」『研究報告集(9)』(報告94, 28-47, 1987)

2. 新しい言語処理システム

計算機による言語処理の質を向上し、意味内容にまで立ち入った高次の処理へと進むために、言語理解、推論、言語生成などの過程を情報処理の立場からモデル化する。計算機上に実現されたモデルは、計算機の動きとして、モデルの妥当性を確認することができる。すなわち、モデル化(理論化)と計算機実験の繰り返しによって理論を精密にしていく自然科学・実験科学の方法を用いて言語研究を進める。

言語理解の研究は、単一文の理解と文章理解(文脈をなす複数の文)に分けて研究を進めてきた。単一文の理解には文法規則に基づく構文解析が重要な役割を果たす。そこで、日本語のように語順のゆるやかな言語を記述することを目的とした確定節文法(句構造文法を述語論理の確定節で表す方法)を開発した。これまでに文脈自由言語の定義を拡張し、語順をもたない言語(集合型の言語)を定義し、集合型言語の文法規則から述語論理式へ変換するメカニズムを VAX 計算機(東大計算センター)上に実現した。確定節文法による下降型の構文解析は、入力文に現れる語に対して、可能性のある文法規則を順次適用していくのであるが、規則の数が大きくなると能率が低下する。62年度は、入力される語から、辞書を用いて直接的に適用可能な文法規則を導く新しい上昇解析の方法の開発に成功した。この上昇解析の方法に

より、左回帰の文法規則が陥るループの問題も解決することができた。

一方、文章理解には言外の情報を補い、文と文の間に意味的な関係を与えるため、対象世界の知識が必要になる。対象世界の知識は計算機内部に静的に蓄えられているだけでは不十分で、入力された文に対して動的に適用されねばならない。そこで知識は辞書のような形を取らずに、すべて述語論理に基づく推論規則の形を用いている。これまで、VAX 計算機上の演繹システム Duck (エール大学開発)を用いて、童話の世界を例に取り物語理解の実験を行った。演繹システムの前向き・後向き推論がそれぞれ、集合型言語の上昇・下降解析の特殊な場合に相当することが明らかになり、構文解析のメカニズムを推論に利用できる見通しが得られた。そこで、62年度は文法規則の形を利用して、対象世界の知識を記述する研究を進めた。

これまで、「電子計算機による言語処理に関する基礎的研究」のテーマの一環として、言語理解の過程に焦点を当て研究を進めてきたが、言語理解の過程は推論・思考過程、言語生成の過程とも深く関係しており、言語の計算機処理を研究する立場よりも、人の言語能力・言語行動の全体モデル(言語ロボット)を構築する人工知能・認知科学的な研究の中に位置付けるのがいいと考えられる。そこで次年度からは新しく「言語ロボット構築のための基礎的研究」のテーマを立て、言語理解、推論・思考、言語生成の過程の総合的なモデルを構築するための基礎的な研究をスタートさせる。

<報告>

- (1) 田中卓史, 集合型言語の確定節文法 DCSG と応用, 情報処理学会論文誌, Vol. 28, No. 10, 1987年10月
 - (2) 田中卓史, 集合型言語の確定節文法, 『研究報告集(9)』(報告94) 1988年3月
3. 装置の導入及び運用に関する研究

前年度に引き続き、電子計算機の利用環境の整備の一環として、照明の改善と無停電装置の設置を行った。また、昭和65年に切り替えを予定されている新システムに関する資料を収集した。その他、漢字及び仮名・漢字変換用

の辞書の整備を行った。

これまで、電子計算機で使用する辞書は、データを新機種へ移行するため、主にコード変換処理とメーカーから提供される漢字字形の調整のために使用されてきた。この利用は、コード変換用の対応表としての性格が強い。しかし、漢字処理が増えるにつれ、配列情報など電子計算機利用者が共通に使用できる基準情報として使用されるようになった。現在、この機能は、さらに拡張

表 1 漢字辞書項目の内容

項番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
項目名	見出し漢字	区・点番号	改訂情報	JIPSEコード	JIP SJコード	端末外部コード	端末内部コード	漢テレ盤内字コード	漢テレ盤外字コード	日立コード	旧日電コード	見出し部首	部首コード	画数	部首内画数	新字源番号
長さ	02	08	02	08	08	08	08	08	22	08	08	02	06	04	04	10
17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
大漢和番号	大字典番号	教育漢字 1	教育漢字 2	当用漢字	当用漢字補正 1	当用漢字補正 2	常用漢字	人名漢字 1	人名漢字 2	人名漢字 3	新聞順位	雑誌順位	新聞度数	雑誌度数	新聞人名度数	雑誌人名度数
12	10	02	02	02	02	02	02	02	02	02	08	08	10	10	10	10
34	35	36	37	38	39	40	41									
新聞地名度数	雑誌地名度数	読み別度数	高校教科書度数	中学教科書度数	余白	音読み	訓読み									
10	10	75	10	10	30	20	60									

ファイル名：DCL3. SOUGOU

ファイル形式：索引順

レコード長：1118 Byte

され各種の情報を統一的に管理し、元データの所在を知る索引の役割が重要になっている。

以上の背景を基に、電子計算機の運用に不可欠な漢字及び仮名・漢字変換用辞書を中心に、日本語データに対する統轄管理の方法を検討した。本年度は、総合化への基盤を整えるため以下の作業を行った。

- 1) 漢和辞書（新字源・大漢和・大字典）、雑誌九十種・現代新聞・中学・高等学校教科書の度数・読みなど、2回目の校正・修正を行った。
- 2) 第一次の照合で一致しなかった496字について、大漢和・大字典から情報を補填するとともに、これらの辞書にも収録されていない94字の読みの確定作業を行った。

発表論文

- 1) 米田純子「漢字総合辞書」『CL通第8号』（国語研究所内部資料、38-47, 1987)

D 今後の予定

- 1) 機械処理用の漢字辞書に対し、日本電気から提供されている拡張漢字3382字の見直しを行う。
- 2) 新聞 KWIC 及び機械処理用の漢字辞書の関係形式データベースへの追加登録を行う。
- 3) コード化できない文献類をコンピュータ処理するための、イメージ情報とコードデータとの結合実験を行う。また、光ディスクを使った応用プログラム利用上の問題を調査する。
- 4) 中国・日本・韓国などで使用されている漢字情報を相互交換するための統一漢字コードを検討する。
- 5) 昭和65年度に切り替えられる電子計算機のシステムの検討を行う。
- 6) 雑誌用語の変遷（言語体系研究部第二研究室調査）調査の度数を漢字辞書に追加する。

日本語の対照言語学的研究

A 目的と内容

本研究は、「外国語としての日本語の研究」の中心的分野をなすものであり、日本語を外国語としてとらえ、諸外国語と対照しつつ記述的研究を行おうとするものである。本年度は以下の2点に沿って研究を行った。

a. 日本語音声の研究

日本語の音声、特にアクセントについて、その機能を明らかにし、日本語教育の中に正当に位置付けるための基礎的研究を行った。

b. 単語の意味記述に関する対照語彙論的研究

日本語と個々の外国語との語彙面における対照研究の一般的方法論を確立することを目指して、日本語の単語と外国語の単語を対照させるときの概念枠、あるいは意味分野の取り方について、辞書等における単語の意味記述を手がかりに検討を加えた。

B 担当者

日本語教育センター第一研究室

室長 鮎澤孝子 研究員 相澤正夫

C 本年度の研究経過

a. 日本語音声の研究

前年度に引き続き、東京語のすべての単純動詞、及びそれからの転成名詞のアクセントについて、6種の辞典等における記載事項の調査を行い、ほぼ完了した。また、調査結果を集計するためのフォーマットを作成し、単純動詞については、活用の種類、モーラ数、アクセント核の有無、また、それから派生した転成名詞については、モーラ数、アクセント核の有無とその位置、

アクセント核の有無及びその位置による意味の弁別，等の観点から分析できるようにした。

b. 単語の意味記述に関する対照語彙論的研究

前年度に引き続き、『日独仏西基本語彙対照表』（報告88）の独語，仏語，西語のそれぞれに見られる語彙分布上の偏りに注目し，それらが対照表を作成した際に利用した，外国語・日本語辞典における訳語形の与え方によって影響を受けていないか，あるいは対照表作成の際に，便宜的に訳語形に対して施した処理によって，人為的・作為的に生じてしまったものではないのか，などについて試験的に調査を続けた。

D 今後の予定

a. 日本語音声の研究

調査結果の集計・分析を行い、『研究報告集』に報告論文を発表する予定である。（相澤）また，日本語のイントネーションの機能についての調査研究に着手する予定である。（鮎澤）

b. 単語の意味記述に関する対照語彙論的研究

対照表の語彙分布と訳語形の関係について，引き続き調査する。また，辞書における説明言語の特性や役割について，一言語辞書と二言語辞書を比較しながら事例研究を行う予定である。（相澤）

日本語動詞の名詞句支配に関する文法的研究

A 目 的

日本語動詞の名詞句支配について、動詞結合価理論の立場からの研究を進め、個々の動詞が実際に文を作るときに要求する名詞句の種類とその分布を求め、外国人のための日本語教育における、語彙・文法的側面からの教材開発の基礎資料を提供することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第一研究室

室長 鮎澤孝子 研究員 相澤正夫

C 本年度の研究経過

本年度は、特別研究として企画した3年計画の第3年次(最終年次)に当たり、これまでに採集した用例の整理と集計を重点的に行う一方、成果を用例集の形にまとめる際の形式について検討を重ねた。

用例採集の対象とした資料は、読売新聞の解説ページ(1982年5月25日から9月30日までの4か月余り)に掲載された、記者署名入りの解説記事(総計315件)の本文であり、すべての動詞用例を段落レベルの文脈付きで採集するという、全数調査の方法を取った。採集した動詞は、延べ語数で約21000、異なり語数で約3200である。

また、用例集作成のための準備として、既に刊行されている用例辞典類の収録語彙、及びその用法を示すために挙げられている例文の調査を行い、今回の採集結果と照合できるようにした。

D 今後の予定

この研究は本年度をもって終了するが、日本語教育のための基礎資料として活用されるよう、用例集の形にまとめる予定である。

なお、次年度から新規に始まる特別研究「日本語教育のための述部からみた文構造の研究」は、形容詞、形容動詞、名詞＋ダ、など動詞以外の述部の要素にも範囲を広げ、個々の述部をめぐる名詞句の現れかたの実態を調査しようとするものである。

日本語教育の内容と方法についての調査研究

A 目 的

外国人に対する日本語教育の現状と過去の実績について、教授法、教育内容、教材に関する問題点を収集整理し、日本語教育に関する研究上の方法論と具体的対策を検討し、日本語教育の内容と方法の向上改善に資する基礎的な研究資料を得ることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第一研究室

室長 鮎澤孝子 研究員 相澤正夫

C 本年度の研究経過

昭和60年度より62年度までの3年間は技術研修の分野における日本語教育を対象とし、その内容と方法についての調査研究を行ってきた。62年度はその最終年次に当たるので、日本語教育研究連絡協議会を1回開催し、これまでに3回開催した協議会のとりまとめの場とし、また協議会での報告、協議内容のまとめの意味で、アンケート調査による情報収集を行った。

本年度の協議会の委員を委嘱した機関は、次のとおりである。

国際協力事業団

(財)国際協力サービスセンター

(社)国際交流サービス協会(国際研修局)

(財)海外技術者研修協会

(財)オイスカ産業開発協力団

雇用促進事業団中央技能開発センター

(株)海外技術者研修調査会

協議会（昭和62年11月16日開催）には各機関の日本語教育関係の部署の担当責任者と、海外・国内で技術研修分野の日本語教育に直接たずさわっている日本語講師に出席を依頼し、技術研修を目的に来日する人々に対する、海外での日本語教育及び来日後の日本語研修に対する学習意欲の問題について発題と協議を行った。またアンケート調査のために調査項目、実施方法について検討し、アンケート調査実施に当たっては、協議会の委員を委嘱している7機関の下にある日本語教育機関を対象にすることとした。この協議会で発題が行われたのは次の2件である。

① 『マレーシア・マラ工科大学における技術研修員日本語教育』

——国際協力事業団 細井信子

② 『泰日経済技術振興会における日本語教育』

——海外技術者研修協会 鶴尾能子

出席者は次の13人である。

水田加代子（国際協力事業団東京国際研修センター業務課）

小野英美子（同上）

本多 敏子（同 東京国際研修センター業務第二部日本語研修室）

細井 信子（同上）

仁平 光（同 名古屋国際研修センター業務第二部日本語研修室）

山田 基久（(財)国際協力サービスセンター業務第二部日本語研修室）

森戸 規子（(社)国際交流サービス協会国際研修局研修第二課）

蛭川 泰夫（(財)海外技術者研修協会東京研修センター研修部日本語班）

鶴尾 能子（同上）

瀬野 照美（同上）

石沢 弘子（同 横浜研修センター日本語班）

渡辺 道行（(財)オイスカ産業開発協力団中部日本研修センター）

有馬 俊子（(株)海外技術者研修調査会研修部）

なおアンケート調査のための調査用紙は前述の7機関の日本語教育担当者の助言を得て、機関対象、日本語講師対象の2種類を作成し、教材、講師、教授法等についての現状、問題点、要望等の調査を行うことにした。調査用

紙は各機関を通して昭和63年1月末にそれぞれの機関所属の日本語教育機関に送付し、講師対象の調査用紙はさらに日本語教育機関から日本語講師に直接配布するよう依頼した。(講師対象の調査用紙は無記名での回答である。)国際協力事業団の委託先の日本語教育機関の10機関とオイスカ産業開発協力団の3機関については講師対象の調査用紙も機関に回収と返送を依頼したが、その他の機関の場合は講師対象の調査用紙は各講師から直接返送してもらった。昭和63年3月末までに全21機関及び常勤講師37名、非常勤講師98名から調査用紙を回収したがこれは調査対象の機関に所属する常勤・非常勤の講師それぞれの79パーセント及び67パーセントに当たる。

このアンケート調査による情報収集を補充する目的で、個別情報収集のための連絡会を開催したが各連絡会の開催日、議題、出席者は次のとおりである。

昭和63年1月28日 『日本語専修コースについて』

ヴァントロイヤー・大城朋子 (国際協力事業団沖縄国際センター研修課)

昭和63年3月22日 『技術研修員の日本語教育の展望について』

柏原淳江 (神戸YWCA学院)

西 雅恵 (同上)

昭和63年3月25日 『鹿児島県主催による南方諸国技術研修青年日本語基礎研修について』

新内康子 (鹿児島女子大学)

昭和63年3月30日 『工業高専における留学生の日本語教育について』

橋口美紀 (鹿児島工業高等専門学校)

D 今後の予定

62年度末に実施した技術研修分野の日本語教育に関するアンケート調査の結果を取りまとめ、小冊子を作成し関連機関、関係者に配布する。これをもって技術研修分野の日本語教育の調査研究は終了する。63年度からは3年間の予定で4年制大学における日本語教員養成の分野を対象とし、その内容と方法の調査研究を行う。

日本語と英語との対照言語学的研究

A 目 的

外国語を完全に習得するためには、言語の論理的な構造だけでなく、それをコミュニケーションの手段として使う際の話者の心的態度、表現意図などの理解と、運用能力の開発が必要である。本研究は、英語を母語とする学習者が日本語を学習する際に直面する障壁の一つであるそれらの側面について日・英両語の比較対照を行い日本語教育の充実発展の基礎資料として供することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第二研究室

室長 西原鈴子

C 本年度の経過

- (1) 意味論と語用論の接点にある諸要因について、内外の研究者による研究成果の調査を行った。
- (2) 日・英両語の構造に見られる文脈的制約の実証的研究の一環として、談話の結束性に関して日・英両語の翻訳資料調査を行い、異言語間伝達における結束性の移行に関する研究成果の一部を『研究報告集(9)』（報告90）に報告した。

D 今後の予定

次年度も引き続き、61、62年度研究の資料の拡充を行うとともに、語用論的前提を背景とする副詞群の文脈資料の収集もあわせて行う予定である。

日本語とインドネシア語との対照言語学的研究

A 目 的

日本語とインドネシア語の言語構造及び語彙の比較・対照研究を行い、その成果がインドネシア人学習者に日本語を効果的に教授する際の指針として役立つことを目的とする。本年度は、次のテーマについて、研究を行った。

- 1) 日本語とインドネシア語の受動構文の比較
- 2) 日本語の助詞・間投詞とインドネシア語の小詞との比較

B 担 当 者

日本語教育センター第三研究室

室長 正保 勇

C 本年度の作業

- 1) 上記研究テーマの1) に関して

前年度に引き続き、インドネシア語の受動構文と能格構文の相違について調査をするために、インドネシア語の新聞、雑誌、小説等より、例文を収集するとともに、統率・束縛理論の面からも両者の相違点を探った。以上の作業の結果、次のような知見を得た。

- イ) いわゆる人称形のうち一人称と二人称の接語代名詞が語根に付く形は、能格構文であると考えられる。
- ロ) di+語根の後に oleh が続く形、及び di+語根の後に名詞（代名詞ではなく）が続く形は受動構文であると考えられる。これらの形においては、意味上の目的語は通常旧情報であり、その占める位置は文の左方であるのが普通であり、文の右方に置かれることは稀である。そして、文の右方に置かれる場合には、動詞に接尾辞の -lah が付され、

それが倒置文であることを示している。これに対して、イ)の形では、意味上の目的語は、文の左にも右にも現れる。この点において、di+root...oleh, di+root...nounの形は、イ)の能格構文とは異なる。

ハ) di+rootの後に何も続かない形は、能格構文の場合も、受動構文の場合もあると考えられる。

ニ) di+root+nyaの形は、イ)の形と同じく、能格構文であると考えられる。

ホ) ter-...(oleh)の形は、受動構文ではなく、能格動詞構文であると考えられる。

ヘ) 能格構文において、意味上の目的語となる要素が動詞の直後にある場合、その要素はその位置で格付与がなされていると考えなければならない根拠がある。

ト) 受動構文において、意味上の目的語となる要素が動詞の後に現れる場合、その要素は主語の位置を占めており、動詞が倒置して主語の前に出た結果、その要素は一見すると動詞の後に置かれたように思われる位置を占めることになったと考えられる。

ロ) 上記研究テーマの2)に関して

前年度に引き続き、日本語及びインドネシア語から、例文を収集し、以後の比較研究のための見通しを立てた。また、収集したインドネシア語の例文を基に、インドネシア語の小詞の持つ機能とそれの現れる位置についての考察を行った。

D 今後の予定

1) に関しては、意味上の目的語が動詞の左に来る構文において、この文頭の要素が主語の位置を占めているのか、それともSに付加されているのか、あるいはまた、主題の位置を占めているのかという点に関して、不明な点が多いので、この問題については、次年度からの研究テーマである「日本語とインドネシア語の移動現象の比較」の中に包括し、他の問題とあわせて考察

することにした。

2) に関しては、インドネシア語の収集した例文の量にばらつきがあるので、不足している例については、次年度に補充を行う。また、インドネシア語の小詞に対して、日本語の対応表現を引き当てる作業も次年度に行う予定である。

日本語と中国語との対照言語学的研究

A 目的と内容

外国語を教育する際に、その対象言語と学習者の母語との間の異同点に関する知識が十分にあり、その知識に基づいて教育が行われれば、学習者は効率よく対象言語を習得することができると考えられる。本研究は日本語と中国語を対照し、中国語話者に日本語を教育するうえで有益な知識を得ることを目的とする。本年度からは次の研究を行っている。

・日本語の中の漢語と中国語との語構成の対照研究

日本語の語彙を構成する主なものは和語と漢語である。中国語の語彙と日本語の中の漢語との間には、高い共通性が見られるが、一方でそれぞれの独自性も見られる。本研究では、語構成に焦点をあて、日本語のなかの漢語と中国語の語彙とを対照し、その差異を明らかにする。

B 担当者

日本語教育センター第四研究室

室長（事務取扱）南不二男 研究員 水野義道

C 本年度の経過

3年計画の第1年次として、以下のことを行った。

1. 日本語と中国語の語構成に関する文献を収集した。
2. 日本語と中国語の新聞を収集し、その中から複合語の資料を収集した。

D 今後の予定

引き続き文献・資料の収集を行い、それに基づいて考察を行う。

日本語教育研修の内容と方法についての 調査研究

A 目 的

外国人に対する日本語教育に関して、教員の資質能力の向上を図ること、また、教育の効率化を目指すことは、現在大きな社会的要請となっている。本研究は、教員研修一般についてそのあり方を検討するとともに、国立国語研究所で実施している研修に対して適切な指針を樹立するため、具体的な研究及びその方法の開発を行うことを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

室長 田中 望 研究員 古川ちかし 沼田善子 研究補助員 早田
美智子 事務補佐員 新聞英世 (63. 3. 12まで) 笠井久美子 (63. 3. 14から)

C 本年度の経過

本研究は内容を二分し、

1. 日本語教育研修の評価に関する研究
2. 研修効率向上に資するための調査研究

とする。

1. 日本語教育研修の評価に関する研究

日本語教員に要求される能力を検討し、日本語教育の研修の内容としてどのようなものが適当であるかということ、日本語教育研修室の担当する日本語教育研修をとおして検討した。その一環として前年度に引き続き、『日本語教育論集 一日本語教育長期専門研修昭和61年度報告—4』(A5, 120ページ)を刊行した。昭和61年度の日本語教育研修の報告と合わせて、昭和61年度までの日本語教育長期専門研修の修了生の論文4篇、すなわち、

木原 節子（昭和59年度修了生）：心理的否定詞ナイとその日英比較

上條 厚（昭和57年度修了生）：ベトナム語の発音とベトナム語話者の日本語の発音に関して

荒井 雅子（昭和61年度修了生）：曖昧名詞句内の超分節的要素

橋本 博子（昭和61年度修了生）：適性テストの可能性

を収録した。これによって、修了生の研究能力の水準を知ることができる。

2. 研修効率向上に資するための調査研究

研修の需要・供給の実態について、的確な情報・知識を得るために、従来日本各地の実地調査を行ってきたが、本年度は実施しなかった。

D 今後の予定

次年度は以下のことを予定している。

1. 日本語教育研修の評価に関する研究

『日本語教育論集5』の発刊を予定している。昭和62年度日本語教育長期専門研修修了生の論文数篇を収録する。

日本語教育長期専門研修及び日本語教育夏季研修のあり方について、見直しをする。

2. 研修効率向上に資するための調査研究

研修修了者の動向を調査し、研修実施のための資料を得る。各地の実地調査は行わない。

言語教育における能力の評価・測定に 関する基礎的研究

A 目 的

外国人の日本語学習者に対する標準的な日本語能力試験の必要性は年々高まっている。しかし、そこである単一の能力尺度のみで、多様な日本語学習者の日本語力を測ろうとすることは現実的とはいえない。さまざまな言語能力分野において、標準的な能力試験が受けられる体制が望ましい。本研究は、そのための学習者の日本語能力分野と、その評価手法を体系づけるための基礎的研究である。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

室長 田中 望 研究員 古川ちかし 沼田善子 研究補助員 早田
美智子 事務補佐員 新聞英世 (63.3.12まで) 笠井久美子 (63.3.14から)

C 本年度の経過

本年度は、以下のような予備的な調査・研究を行った。

1. さまざまな外国語標準能力試験において目標とされる言語能力の観点、分野などの比較対照を行った。
2. その中で口頭での言語運用能力テストについて開発、試行、検討した。
3. テスティングシラバスは、基本的には教授シラバスと関連するものであり、テストデータの検討に際して教授データ（何をどんなやり方で勉強したか）が同時に得られることが望ましい。そのために、実際に日本語を学習している外国人インフォーマントの集団を確保し、データを取り分析した。

その結果に基づいて、上記2のテストの妥当性を検討した。

D 今後の予定

次年度には、以下の作業を計画している。

1. 本年度に引続き、国外・国内の外国語能力標準テストを収集・分析する。
2. 日本語教育プログラムの実際からデータを取り、形成的評価のためのデータベース化を検討する。
3. いわゆる教室での学習によって伸びる言語能力とは何かを上記2.と同じデータに基づいて分析・検討する。

実際のテストの開発・検討については能力試験全般という枠では進めるが、より個別的に何を行うかは未定である。上記2. 3. との関係で今後検討してゆく。

日本語教育教材開発のための調査研究

A 目 的

既存初級教科書及び国立国語研究所作成の日本語教育用映像教材について語彙・構文・文法上のいくつかの単位区分及び場面の比較対照を行い、その結果を教材開発に役立てると同時に資料として提供する。語彙教材開発のための日本語語彙の意味論的分析を進める。これらの成果を応用して教材試作実験を行い、また、教授者向けの資料を作成提供する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長 南不二男 部長 上野田鶴子 (62.10.1から室長事務取扱)
室長 日向茂男 (62.9.30まで) 研究員 中道真木男 (62.7.1から主任研究
官) 中田智子 (63.1.1から)

C 本年度の作業

1. 日本語教育用初級教科書及び所内で作成した『日本語教育映画 基礎編』『日本語教育映像教材』に用いられた語彙の調査を継続して行い、文脈付き語彙表を作成した。

2. 既に発表されている各種の意味分析結果を利用して辞書記述の効率化に役立てるための研究の一部として、既存国語辞典等で意味記述に用いられている用語の実態を、ワードプロセッサを用いて調査する作業を継続して行った。

3. 『日本語教育映画 基礎編』の分析から作成した発話機能の分類案を現実のテキストに適用して表現意図の記述を行い、分類表の妥当性を検証する作業に着手した。

D 今後の予定

日本語教育用教材に関する語彙・文型の調査は今後も継続し、計算機データとして保存して各種の使用に供する。

意味記述の手法開発の一環として、既存国語辞典等で用いられている意味記述用語の実態調査を続行する。

発話機能の整理に基づき、映像教材を利用した中級段階の日本語教育の内容を検討するとともに、その教授内容を提示する有効な手段をハードウェア・ソフトウェアの両面にわたって開発する。

談話の構造に関する対照言語学的研究

A 目 的

中上級向けの日本語教育に役立てるため、日本語において談話の構成を表示するために機能する手段と談話構造の規則性とを明らかにし、その内容を他言語と比較して教育上に役立つ知見を得る。

B 担 当 者

日本語教育センター

センター長 南不二男 第一研究室 室長 鮎澤孝子 研究員 相澤正夫 第二研究室 室長 西原鈴子 第四研究室 研究員 水野義道
日本語教育指導普及部 部長 上野田鶴子 日本語教育研修室 室長 田中望 日本語教育教材開発室 室長 日向茂男 (62.9.30まで) 研究員 中道真木男 (62.7.1から主任研究官) 中田智子 (63.1.1から)

C 本年度の経過

本年度は、特別研究4年計画の第2年次に当たり、談話研究全般の動向、主な研究課題と接近法などに関する研究会を引き続き開催した。特に、談話構造を表示し、話し手の意図、感情等を付随的に表現する音声的手段に関する課題を探索した。また並行して、基礎資料となる日本語の話しことば文字化テキストを計算機に入力し、出現語彙の調査等を継続して行った。

D 今後の予定

音声的手段によって表示される意味内容を記述し、日本語、英語、インドネシア語、中国語、等の間で比較を行う。

国語及び国語問題に関する情報の収集・整理

A 目 的

国語に関する学問の研究成果一般を知り、あわせて関係学会の動向、言語及び言語生活に関する世論の動きをとらえるために、国語及び国語問題に関する情報を収集・整理し、国語研究の基礎的資料を整備する。このために次のことを行う。

1. 刊行図書・雑誌論文等の調査を行い、分類別文献目録カードを作成する。
2. 諸新聞から関係記事を切り抜いて整理・製本し、研究資料を作成する。
3. 『国語年鑑』を編集する。

B 担 当 者

言語変化研究部文献調査室

部長 飛田良文 研究員 田原圭子 伊藤菊子 中曽根仁

C 本年度の作業

前年度に引き続き、昭和62年度に刊行された各種文献を調査し、情報を収集・整理した。昭和62年1月から12月までの情報については分類別文献目録カード及び「新聞所載国語関係記事切抜集」41冊を作成した。これらの文献の目録は、その他の資料・情報とともに『国語年鑑』〈昭和63年版（1988）〉に掲載する。

『国語年鑑』は、昭和62年版（1987）を編集した。昭和61年1月から12月までの国語に関する研究成果、関係学会の動向、ことばに関する世論などを主な内容とし、次の各部に分けて編集し、昭和62年12月に刊行した。

第1部展望 「話しことば」「国語学」「国語政策」「国語教育」「日本

語教育」「言語関連諸科学—出版と印刷—」など17項目。

第2部文献 刊行図書(1,403件)、雑誌論文(2,746件)、新聞記事(主な記事のみ275件)の文献目録ほか。

第3部雑報 各学会・関係諸団体(75団体)の活動報告、61年度文部省科学研究費による研究題目(272件)・刊行費補助金による学術図書(31件)の一覧ほか。

第4部国語関係者名簿 国内1,768人、国外91人。

第5部資料 「ことばに関する放送(おもな番組)」ほか。

索引 文献の部(刊行図書、雑誌論文、新聞記事)の著編者名索引である。

なお、本年度は、前年度に続いて『国語年鑑』昭和29～62年版に掲載した国語関係者名簿及び文献目録の著編者名を、電子計算機に入力し、次の「名簿資料」の補充及び修正をした。

1. 国語年鑑掲載国語関係者総合名簿(2,817件)
2. 名簿掲載者氏名一覧(2,817件)
3. 国語年鑑掲載文献著編者難読氏名一覧(9,416件)
4. 国語年鑑掲載文献著編者別資料'87(1986年版～)

以下、国語及び国語問題に関する昭和62年の情報の傾向を知る手がかりとして、採録した文献の冊数(または点数)を項目別に示す。()内は61年の数である。

外国発行の刊行図書・雑誌論文等については、その採録範囲を日本語の研究及び日本語教育に関するものに限定した。

I 刊行図書の調査

国語関係の刊行図書について、書名・著(編)者名・発行所・発行年月・判型・ページ数、並びに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、『日本全国書誌週刊版』(国立国会図書館編)、その他から情報を補い、総数1,519冊についての分類別目録カードを作成した。

刊行図書の分類とその冊数

国語一般	47	(44)	マス・コミュニケーション	8	(1)
国語史	20	(43)	国語問題	4	(7)
音声・音韻	15	(9)	国語教育	113	(122)
文字・表記	17	(24)	外国人に対する日本語教育	14	(25)
語彙・用語	63	(52)	言語(学)その他	70	(60)
文法	30	(12)	辞典・用語集		
文章・文体	20	(32)	辞典・用語集	165	(168)
方言・民俗	61	(75)	索引	31	(33)
ことばと機械	16	(6)	参考資料	139	(142)
コミュニケーション			国語研究資料	205	(177)
コミュニケーション一般(言語 生活)	32	(37)			
言語技術(話し方・書き方)	69	(61)			
				<u>計 1,139</u>	<u>(1,130)</u>
			追補(昭和61年12月以前刊行分)	380	(610)
				<u>総計 1,519</u>	<u>(1,740)</u>

なお、今回から分類項目名を前年までの資料、国文学からそれぞれ参考資料、国語研究資料に改めた。

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌、並びに大学、学会、研究所等から寄贈された雑誌、紀要・報告類から、関係論文・記事を調査し、題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月・ページ数を記載したカードを作り、分類別目録カードを作成した。採録した論文・記事の総数は、3,620点である。

1 一般刊行雑誌、及び大学・研究所等の紀要報告類

a. 一般刊行雑誌(学会誌等を含む)……463(461)種

国語・国文・言語ほか	200	(200)	週刊誌・総合誌	2	(2)
方言・民俗	16	(16)	文芸・詩歌・芸能	1	(1)
国語問題	5	(5)	その他(教育・社会学・心理学ほか)		
国語教育	29	(25)		81	(80)
日本語教育	3	(2)	臨時に入った雑誌	22	(27)
マス・コミ関係	12	(11)	外国誌	79	(79)
外国語	13	(13)			

b. 大学・研究所等の紀要・報告類……426(418)種

2 論文・記事の分類とその点数

国語（学）	247 (158)	国語問題	77 (117)
国語史	88 (74)	国語教育	808(1,065)
音声・音韻	85 (109)	外国人に対する日本語教育	139 (155)
文字・表記	98 (113)	言語（学）	308 (353)
語彙・用語	379 (391)	資料	54 (84)
文法	222 (267)	書評・紹介	77 (139)
文章・文体	186 (205)		
古典の注釈	107 (94)		
方言・民俗	182 (197)		
ことばと機械	66 (41)		
コミュニケーション	157 (204)		
マス・コミュニケーション			
	75 (97)		
		計	3,355 (3,863) 点
		追補（昭和61年12月以前発行分）	265 (209) 点
			総計
			3,620 (4,072) 点

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は4,236点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日（夕）刊紙		西日本	252 (226)
朝日	755 (536)	週刊・その他	
毎日	364 (558)	週刊読書人	59 (59)
読売	657 (451)	図書新聞	36 (24)
東京	590 (535)	新聞協会報	42 (50)
サンケイ	449 (420)	教育学術新聞	13 (12)
日本経済	540 (362)	その他	82 (77)
北海道	407 (543)		
		計	4,236 (3,853) 点

2 月別の切り抜き点数

1月	329 (262)	2月	346 (297)	3月	360 (369)
4月	317 (272)	5月	347 (292)	6月	311 (304)
7月	383 (318)	8月	344 (282)	9月	357 (331)
10月	402 (411)	11月	384 (351)	12月	356 (364)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	503 (517)	表記一般	19 (23)
音声・音韻	28 (11)	常用漢字など	6 (4)
文字		仮名遣い	8 (48)
文字・表記	78 (72)	送り仮名	0 (4)
活字	9 (10)	仮名書き	1 (8)
語彙		横書き・縦書き	9 (6)
語彙一般	149 (185)	人名・地名の表記	24 (21)
各種用語	58 (108)	外来語表記	38 (10)
新語・流行語・隠語	190 (147)	ローマ字	3 (2)
外国語・外来語	207 (138)	国語教育	
辞書	50 (65)	国語教育一般	37 (31)
問題語・命名	151 (146)	学習指導の問題	
人名・地名	203 (198)	学習指導一般	24 (13)
文法	2 (7)	話す(聞く)	2 (4)
文体		読む(読書指導)	35 (23)
文体・表現	51 (37)	書く(作文指導)	9 (17)
方言		文学・古典教育	1 (4)
方言一般	39 (38)	特殊教育	36 (23)
方言と標準語	10 (8)	視聴覚教育	6 (10)
各地の方言	92 (102)	学力テスト	22 (12)
言語生活		幼児教育	12 (37)
言語生活一般	107 (101)	海外帰国子女教育	62 (56)
ことばの問題	64 (75)	言語学	
ことばづかいの問題	54 (59)	言語学一般	78 (72)
敬語の問題	45 (29)	外国語一般	125 (92)
情報化社会	107 (66)	比較研究	52 (16)
言語活動		翻訳の問題	61 (52)
言語活動一般	27 (32)	外国語教育	150 (143)
話すこと(聞くこと)	55 (53)	外国語に関する紹介ほか	66 (66)
書くこと(読むこと)	78 (56)	日本語の研究と教育	180 (170)
読書	142 (90)	マス・コミュニケーション	
ことばと機械	118 (107)	マス・コミ一般	14 (8)
国語問題		新聞	34 (31)
国語問題一般	13 (11)	放送	53 (34)
表記の問題		広告・宣伝	35 (32)

出版 119 (63)
 書評・紹介ほか 285 (250)

計 4,236 (3,853) 点

切り抜き点数は、前年より383点多かった（主な記事は『国語年鑑』〈昭和63年版〉に掲載）。本年の主な動向を記す。

国鉄の分割・民営化に伴って、長年親しまれてきた「国鉄」の略称が「JR」に変わった。また、首都圏を走る「国電」の愛称が「E電」に決まった。E電は公募の中では20位だったが「響きがよく、親しみやすい」との理由で採用された。これらの名称について、各紙のコラム欄や投書欄などに賛否両論が掲載された。

出版界では文学作品などのカセット化が盛んで、“耳で読む本”，“聴書の秋”などという表現が各紙の紙面をにぎわわせた。また、宅配便で読者に読みたい本を届けるシステムも誕生し、好評を博しているようだ。

なお、分類項目の点数で、「各種用語」の項が前年に比して少なくなっているが、前年は連載記事があったためである（『年報38』参照）。また、本年は「外国語・外来語」の点数が前年よりも多いが、これも連載記事の点数が多いことによっている。

〔付 所外からの質問について〕

昭和62年度に電話で受けた質問件数を示すと次のとおりである。

月 計	62年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	63年	2月	3月
	4月									1月		
856	53	78	69	79	76	73	87	54	74	49	84	80

（前年度の質問件数は923件であった。）

質問の内容は例年どおり多方面にわたっていた。件数の多かったものを示すと次のとおりである。用字用語について287件（用語一般128件，用字一般67件，ゆれのある語38件，同音類義語19件），漢字の読み138件（姓名に関して29件），語源58件，敬語42件，字体・語（字）の意味37件，ことわざの由来

22件などである。

上記の件数のうち、同一（又は、同類）の内容について2回以上質問を受けた事項を仮名遣い、送り仮名、字体などから例示する。

仮名遣い		淵・瀧	2	～)	3
ザ・づの使い分け	4	葛・葛	2	固執（コシツ・コシ	
送り仮名		頬・頬	2	ユウ)	2
落とす	2	発音にゆれのある話		七（シチ・ナナ）	2
字体		行（イク・ユク）	3	入水（ジュスイ・ニュ	
吉・吉	3	十～（ジッ～・ジュッ		ースイ）	2

また、くり返しの「々」は文字なのか、名称があるのかなどが6件、うさぎの助数詞はなぜ「羽」なのか6件、ちょうちょうの助数詞は「頭」なのか、「匹」を使ってはいけないのか4件、「殿」と「様」の使い分けについて5件、「各位」に殿や様をつけてもいいか5件などが件数の多い事項であった。

なお、研究所及び研究所の刊行物についての照会が16件あった。電話による質問のほかには、はがき、封書による質問が19通、直接来所しての質問が2件あった。

以上の件数は、すべて文献調査室で受けた質問で、研究員等が個人的に受けた質問は含んでいない。

文部省科学研究費補助金による研究

連語構造における意味素性の適合に関する言語間比較

(代表 中道真木男) <特定研究(1)>

<研究目的>

言語間の機械自動翻訳を実現するためには、まず各言語の統語規則とその対応関係を知ることが必要であり、言語学の側からの従来の研究は主にこの点に関して行われてきたが、多様な言語使用を限られた数の統語規則で記述することには限界がある。必要な情報の多くは、個々の語彙要素ごとに、その統語上・意味上の特性を記載した辞書に依存せざるを得ない。そのような辞書を作成する手順としては、第一に、連語構造が成り立つために修飾語・被修飾語の間で適合しなければならない意味素性のカテゴリー（対立項）の種類を知ること、第二に、個々の語に付与される対立項の種類及びそれらに対応する意義特徴を記述すること、の2段階が必要である。本研究ではその第一段階として、連語構造における適合条件としての対立項の種類を日本語の語について収集・分類して主な類型を示し、さらに外国語についても同様の分析を行い日本語と比較して、翻訳における困難点を予測することを目的とする。

<研究組織>

研究代表者

中道真木男（日本語教育教材開発室研究員，62.7.1 から主任研究官）

研究分担者

南 不二男（日本語教育センター長）

島 郁（日本語教育センター客員研究員）

三枝 令子（筑波大学留学生教育センター非常勤講師）

馬場 良二（文化女子大学講師）

<研究経過>

語の意味を構成する意義特徴は、語の指し示す事物を他の語のそれから区別する弁別的な特徴を含む「語義限定的特徴」と、語のニュアンスを形成する「含蓄的特徴」に大別できるが、従来の計算機用辞書等の開発は主として語義限定的特徴の記述に限られていたと言える。語義限定的特徴は語義の中心的部分であり、その記述が第一義的に必要であることはもちろんであるが、日本語においては、言語使用の際のいわゆるモードゥスの側面の規制が強く、自然な訳文を得るためには、こうした含蓄的特徴の種類、文を構成する際の適合条件としての機能、さらに実際の言語使用における異言語間の対応を明らかにして、従来の辞書開発研究を補うことが望まれる。

前年度は、含蓄的特徴のうち、いわゆる丁寧語、終助詞、応答語、人称代名詞、などに含まれ、聞き手に対する表現態度を表示する「対者的特徴」の現れ方を日本語について整理し、それらを外国語において表現することが可能であるかを調査したが、本年度はその結果を分析し、英語、ドイツ語、ポルトガル語についてある程度共通した枠組みで記述することを試みた。この結果を報告書として印刷した。

また、書きことば的・話しことば的、女性語的、雅語的、などのいわゆる「文体的特徴」の実態を知るため、実質的意味を共有し文体的価値のみを異にする語の組を収集する作業を続行するとともに、上記対者的特徴と同様の調査を行うための計画に着手した。

〈今後の予定〉

文体的特徴の各言語における現れを調査し、そこに設定される対立項を明らかにした後、語義限定的特徴が修飾関係においてもたらす制約を分析する予定である。

言語データの収集と処理の研究

(代表 野村雅昭) 〈特定研究(1)〉

〈研究目的〉

言語情報処理の精度を高めるための基礎的な研究としては、所与の文字列

を適切な単位に分割し、それに必要な情報を与え、より高次のレベルの処理を可能にするための処理技術の開発が重要である。また、機械翻訳システムの構築のためには、その基礎データとして、語、句、文の各言語単位レベルにおける複数言語対照の基礎データの蓄積と処理の方法の開発とを行うことが必要になる。そのためには、膨大な量の言語データを集め、それを種々の観点から処理・整理して活用することが大切であり、それに必要な技術確立することが緊急の課題となっている。特に、日本語データは、複数の文字体系を使用し、言語単位の切れ目が明らかでないなどの難しい問題を含んでいる。そして、抽出した語の意味処理は、まだその緒についたばかりである。

なお、本研究は、特定研究「言語情報処理の高度化のための基礎的研究」の計画研究の一つとして行われている。本年度は、3年計画の第2年次に当たる。

<研究組織>

研究代表者

野村 雅昭 (言語計量研究部長)

研究分担者

中野 洋 (言語計量研究部第一研究室長)

山崎 誠 (言語計量研究部第一研究室研究員)

田中 康仁 (姫路短期大学助教授)

荻野 綱男 (筑波大学文芸言語学系助教授)

坂本 義行 (電子技術総合研究所ソフトウェア部主任研究官)

上記の分担者のほか、下記の研究協力者が参加した。

宮島 達夫 (言語体系研究部第二研究室長)

石井 久雄 (言語体系研究部主任研究官)

齋岡 昭夫 (言語計量研究部第二研究室長, 62.9.1 から上越教育大学助教授)

石井 正彦 (言語計量研究部第一研究室研究員)

横山 晶一 (電子技術総合研究所パターン情報部研究員)

荻野 孝野 (日本電子化辞書研究所主任研究員)

藤田 正春（国立教育研究所研究員）

渡辺 展男（姫路短期大学助手）

〈研究経過〉

1. 本年度の作業概要

本年度は、下記の六つの方面から、研究を進めることとした。

ア．複合語データの収集と造語モデルの構築

分担者…野村雅昭・石井正彦

イ．日本語の複合語解析及び機械処理のための複合辞書の作成

分担者…田中康仁・渡辺展男

ウ．日英語彙データの収集・比較と機械辞書の作成

分担者…中野 洋・宮島達夫・石井久雄・鶴岡昭夫・藤田正春

エ．類義語の意味処理

分担者…山崎 誠

オ．現代日本語の名詞ソーラスの作成

分担者…荻野綱男・横山晶一・荻野孝野

カ．日本語解析用意味情報の抽出及び自動意味情報付与

分担者…坂本義行

研究の遂行に当たっては、この六つの分担課題が相互に関連をもちつつ展開するように留意した。

研究題目からも明らかなように、われわれの班の研究の主眼は、大量のデータを集め、それを効果的に処理することにある。その意味から、第2年目に当たる本年度は、データの収集と加工に重点を置き、ほぼ目標とする処理量に達した。それとともに、整理のすんだデータについての分析・考察にも着手し、進展を見た。

以下に、それぞれの要点を記す。カッコ内のア～カの略号は上記の分担課題を示す。

2. 方法論の検討

a. 造語モデルの枠組み（ア）

造語の過程を、造語概念・意味構造・複合語の3者からなる依存関係としてとらえ、造語規則や造語辞書によってコントロールされるモデルとして検討した。

b. 英和辞典データの処理 (ウ)

「コンサイス英和辞典」から語義を比較するファイルを作成する手順を開発し、処理を行った。

c. 意義特徴の記述法の明確化 (エ)

語の意義特徴を記述するための観点を整理し、記述法を確定した。

d. シソーラス作成手順の検討 (オ)

上位語が判定しにくい語について、作業手順を追加し、データ処理プログラムを作成した。

e. 用言の格フレームの分析 (カ)

格フレームを構成する、表層格、深層格、名詞意味マーカの関係进行分析する手順を確立した。

3. データの収集と加工

f. 学術用語・新聞記事データの整理 (ア)

上記のデータから複合語を抽出・整理し、学術用語については、語基連接表として刊行した。

g. 科学技術文献抄録文データの加工 (イ)

3文字・4文字漢字列を整理し、知識データ・ファイルとして分析を行った。

h. 慣用表現の収集 (イ)

各種慣用句辞典・抄録文からデータを採集し、慣用表現ファイルとして加工を施した。

i. 語と語の関係データの整理 (イ)

朝日新聞データから、格助詞を中心にした語と語の関係データを抽出し、「を」を含むデータについては、総括班から資料集として刊行した。

j. 分類語彙表の増補 (ウ)

各種辞典・語彙調査資料等から増補候補語を採集し、5割強に当たる1万6千語を追加し、ほぼ整理を終えた。

k. 類義語集の作成 (エ)

国語辞典から採集したデータを、基礎ファイルとして加工する作業を継続した。

1. 名詞シソーラスのデータ入力 (オ)

第一次の判定作業をほぼ終え、2分の1の量の入力をすませた。

4. データの分析

m. 学術用語の生産性 (ア)

学術用語を構成する語基の生産力について分析し、同音語と同音語基についても分析を試みた。

n. 上位/下位関係の考察 (オ)

シソーラス作成にかかわり、問題になる語の意味関係について、各種の観点から考察を加えた。

o. 日本語と外国語の対照 (ウ)

和英辞典と国語辞典の見出し語を対照し、語彙の対照研究の問題点を抽出した。

p. 格フレームの調査 (カ)

用言約3千語について、用語辞書の格パターンを用いた分析を行い、名詞意味マーカの特性を抽出した。

<研究発表>

[論文等]

野村雅昭・石井正彦：学術用語語基連接表 (1988.3)

石井正彦：学術用語における同音語と同音語基(1) (『C L 研究』, 2, 1988.3)

石井正彦：Economy in Japanese Scientific Terminology (Proceedings/ International Congress on Terminology and Knowledge Engineering, 29 Sept. -1 Oct. 1987. Univ. of Trier, FRG)

中野 洋：「コンサイス英和辞典」の処理(1) (『C L 通信』, 8, 1987.7)

[口頭発表]

野村雅昭：言語研究と辞書データ（特定研究「言語情報処理の高度化」研究発表会，1987. 12. 21）

石井正彦：造語モデルの構想（同上）

山崎 誠：意義特徴記述上の問題点（同上）

石井久雄：国語辞典の見出し——和英辞典との対比によるひとつの日本語辞書解析（同上）

北海道における共通語化および言語生活の実態

（代表 江川 清）〈総合研究(A)〉

〈研究目的〉

国立国語研究所では、昭和33年度から昭和35年度にかけて文部省科学研究費補助金を受けて、北海道における共通語化の過程についての実態調査を行った（『共通語化の過程——北海道における親子三代のことば』（報告27）を参照。以下この調査を前回調査と呼ぶ）。本研究は 前回調査の成果を踏まえつつ新しい視野からの社会言語学的研究を目指すものであり、主要な目的は以下の2点である。

1. 近年発達の著しい社会言語学並びに言語行動研究の観点にたつて、現在の北海道道民の言語生活を調査する。特に、農村型地域社会の事例として前回調査の中心的調査地でもある富良野市を、また、これに対する都市型地域社会として札幌市をそれぞれ取り上げ、例えば情報流通経路、各種コミュニケーション行動など、それぞれの地域社会における住民の間の言語状況・言語生活の実態をとらえ両者の特徴を対比的に考察しようとする。
2. 前回調査の追跡調査を行うことにより、発音・語彙・文法などの諸側面についてその後25年間のことばの変化の実態を明らかにする。追跡調査のうちには、前回調査と同一の調査対象者への経年調査もふくみ、特にその後の共通語の定着過程を具体的にあとづけようとする。また前回調査の対象となった世代の次世代、次々世代の新しい世代にも調査の枠を広げ共通

語化の実態を把握しようとする。

国立国語研究所ではこれまでに、山形県鶴岡市、愛知県岡崎市において同種の追跡調査を行い貴重な言語学的知見を得ており、今回の北海道調査においても成果が十分に期待できる。

以上、本研究は前回調査の視野を拡張した研究であり、その成果が実際の生活における言語生活の事実を明らかにするばかりでなく、言語研究の一般理論面に対しても寄与することを目ざすものである。

〈研究組織〉

研究代表者

江川 清（言語行動研究部第二研究室長）

研究分担者

野元 菊雄（所長）

南 不二男（日本語教育センター長）

杉戸 清樹（言語行動研究部第一研究室長）

米田 正人（言語行動研究部主任研究官）

佐藤 亮一（言語変化研究部第一研究室長）

沢木 幹栄（言語変化研究部主任研究官）

小林 隆（言語変化研究部第一研究室研究員）

日向 茂男（日本語教育センター教材開発室長，62.10.1 から東京学芸大学助教授）

相澤 正夫（日本語教育センター第一研究室研究員）

水野 義道（日本語教育センター第四研究室研究員）

池上 二良（札幌大学女子短期大学部教授）

小野 米一（北海道教育大学旭川分校教授）

菅 泰雄（旭川工業高等専門学校助教授）

南 芳公（北海道教育大学岩見沢分校講師）

吉見 孝夫（北海道教育大学札幌分校助教授）

徳川 宗賢（大阪大学文学部教授）

真田 信治（大阪大学文学部助教授）

高田 誠（筑波大学文芸言語学系助教授）

志部 昭平（千葉大学文学部助教授）

鈴木 敏昭（富山大学人文学部助教授）

研究協力者

菱沼 透（明治大学商学部教授）

村山 昌俊（国学院女子短期大学講師）

吉岡 泰夫（熊本短期大学講師）

このほか、現地調査の補助、調査結果の整理、研究事務の処理に、塚田実知代（言語行動研究部第一研究室研究補助員）、磯部よし子（同・第二研究室研究補助員）、白沢宏枝（言語変化研究部第一研究室研究員）がたずさわった。また現地調査には、大阪大学大学院生の中島孝幸、尾崎喜光、金沢裕之、渋谷勝己、宮治弘明の補助を得た。

なお、市民調査実施に当たっては、札幌市（板垣武四市長）及び札幌市民各位の御協力を、また単身移入者調査の実施には「全国単身赴任者の会」（代表者・沢井声伺氏）の御協力を得た。記して謝意を表する。

〈研究経過〉

本年度は、3年計画の第2年次として、下記の調査・研究・研究発表を行った。

1. 札幌市言語生活調査

現代の北海道の代表的な都市型地域社会における言語状況や言語生活の実態を把握するため、札幌市民500人を無作為抽出し、留置調査と個別面接調査を実施した（62年9月18日～27日）。補充調査（63年1月28日～2月10日）を含めて351人（70.2%）から回答を得た。

2. 札幌への単身移入者への言語生活調査

大都市札幌の言語状況を考えるうえで注目される、札幌に単身で移入して暮らす勤労者や学生を対象にして、アンケート調査を実施した。「全国単身赴任者の会」の協力により、計162人の回答を得た。

3. 61年度に実施した富良野調査の中間報告講演会の開催

前年度に実施した富良野調査に関して、富良野市との共催で中間報告講演会を開催し、これまでにまとまった調査結果の一部を発表報告した。また、札幌調査の一部についても、国立国語研究所研究発表会で発表した。いずれも、後掲の研究発表の項を参照のこと。

4. 調査結果の集計・整理

これまでに完了した各調査について、結果の整理を進めた。詳しい録音チェックを必要とする発音・アクセント項目を除いて、大部分の質問項目に関するデータの電子計算機入力を完了し、基本的な集計表の出力などの集計作業を進めた。

5. 高校生調査の準備, その他

63年度に高校生を対象にして全道的に実施する予定の言語調査の調査内容を確定し、調査票印刷などの準備を進めた。

〈今後の予定〉

63年度

研究の最終年度として、以下の研究作業を行う。

1. 27年前の全道高校生調査との比較のための調査

全道的な視野から若い世代の言語変化と言語生活の現況を把握するため61年度の予備調査をふまえて、全道から100高校(27年前の調査の対象40校を含む)で各校40名への通信調査を実施する。

2. 調査結果の整理・集計, 及びまとめ

各年度ごとに入力済みの調査データについて集計を進め、集計表の印刷を行う。

これらの結果について、検討のための会議を随時開きながら、分析に着手し、まとめを進める。なお、研究報告書は64年度末までに刊行することを目指す。

〈研究発表〉

A. 富良野調査中間報告講演会(昭和62年7月18日・富良野市文化会館)

「ことばを調査する」

野元 菊雄

「富良野言語調査から — 1 — ことばとくらし」 米田 正人

「富良野言語調査から — 2 — 27年間で使われ方
変ったことばと変らなかったことば」 杉戸 清樹

「北海道のことば——そのなりたち」 小野 米一

B. 国立国語研究所研究発表会（昭和62年12月12日・国立国語研究所）

「非全国共通形の使用意識——北海道言語調査から」 相澤 正夫

国語学研究の動向の調査研究

（代表 佐竹秀雄）〈一般研究(A)〉

〈研究目的〉

近年、国語研究は、研究領域がひろがり、研究者数、研究発表数が増大している。研究テーマも専門化し、細分化して全体の傾向がつかみにくい現状である。そこで、国立国語研究所編『国語年鑑』をもとにして、過去33年間の研究成果の国語学文献総合目録を作成し、それによって国語学研究の動向について分析と展望を行う。

〈研究組織〉

研究代表者

佐竹 秀雄（言語計量研究部主任研究官，62.9.1 から同部第二研究室長）

研究分担者

野元 菊雄（所長）

飛田 良文（言語変化研究部長）

田原 圭子（言語変化研究部研究員）

伊藤 菊子（言語変化研究部研究員）

〈研究経過〉

1. 昭和29（1954）～61（1986）年版国語年鑑掲載文献目録（刊行図書）
総集編の本文を作成した。これは、文献を〈音声・音韻〉〈文字・表記〉
などの大項目の分野別に分類し、発行年月順に並べたものである。

2. 文献数の増加，研究分野の消長を示す国語年鑑33冊の分類項目の異同について統一基準を定め，細分類するために分類コード表を作成した。

3. 現在，分類コード表によって，コード付加作業を進めている。

なお，本年度は4年計画の第3年次に当たる。

〈今後の予定〉

現在，できている文献目録（刊行図書）総集編の本文に著者別索引を付けるとともに，分類コードを利用した，より精密な「文献目録（刊行図書）総集編」を作成することを目ざしている。

漢字情報のデータベース化に基づく常用漢字の学習段階配当に関する研究

（代表 村石昭三）〈一般研究(A)〉

〈研究目的〉

「常用漢字表」の告示に伴い，常用漢字の学習段階配当に関して研究することが緊急の課題となっている。本研究は，漢字に関する調査資料をデータベース化することと，常用漢字の学習段階配当に関して研究することを目的とする。

〈研究組織〉

研究代表者

村石 昭三（言語教育研究部長）

研究分担者

林 大（名誉所員）

島村 直己（言語教育研究部主任研究官）

茂呂 雄二（言語教育研究部第一研究室研究員）

川又瑠璃子（言語教育研究部第一研究室研究員）

野村 雅昭（言語計量研究部長）

鶴岡 昭夫（言語計量研究部第二研究室長，62.9.1 上越教育大学へ転出，以後，研究分担者を辞退）

佐竹 秀雄（言語計量研究部主任研究官，62.9.1 から同部第二研究室長）

齋賀 秀夫（大妻女子大学文学部教授）

〈研究経過〉

1. 3年計画の第2年次にあたる本年度は、次の作業を行った。
 - ①林四郎ほか「語彙調査四種の使用度による漢字のグループ分け」の各漢字の階級合計点をコンピューターに入力した。
 - ②国立国語研究所で行った「雑誌九十誌調査」「現代新聞調査」「中学校教科書・高等学校教科書調査」の各漢字の使用率・使用順位などのコンピューターに入力した情報の校正作業を行った。
 - ③児童・生徒の各漢字の読み書きの程度と、その漢字の画数・使用率との関係について分析した。
 - ④小学校の教科書に出現する語彙と漢字の関係を見るために、漢字別の語彙表が必要である。それも、学年を追って語の表記がどのように変化していくかが分かるものでなければならない。前年度は、6教科（理科・社会・音楽・図工・家庭・算数）の教科ごとの資料を作成した。本年度は、それらのデータの修正と、全教科を合わせた資料を作るために必要なコード付加の作業を行った。
 - ⑤児童の文集作文の語彙についてコンピューターに入力した情報の校正作業を行った。
 - ⑥阪本一郎『教育基本語彙』の漢字別意味別語彙表を作成して、どの学年の配当漢字は、どの意味分野の語に多く使われているか、ということについて分析した。
 - ⑦秋田県・東京都・奈良県の小・中学校全500校の教員を対象にして、漢字の学習指導に関するアンケート調査を行った。
2. 次の報告を行った。
 - ①常用漢字1945字を、『分類語彙表』（資料集6）に基づいて意味分類したものを、表の形式に整理して、『分類漢字表稿本』という冊子にまとめた。
 - ②漢字の習得度調査の結果を、『児童・生徒の常用漢字の習得』（報告95）

にまとめた。

3. どのような漢字情報をデータベース化するかということに関して、検討を行った。

〈今後の予定〉

1. 研究経過の1で述べた作業を続行する。
2. データベースを作成する。
3. 作成したデータベースから漢字の学習指導の効率化について研究する。
(本研究では、当初、そのデータベースから常用漢字の学習段階配当表を作成する計画であった。しかし、文部省の研究協力者会議がそのことを審議していることを考えて、計画を変更した。)
4. 前年度実施した漢字学習指導に関するアンケート調査を集計・分析して、漢字学習指導上の問題点を検討する。

日本語教育における指導要素としての言語単位に関する研究

(代表 上野田鶴子) 〈一般研究(B)〉

〈研究目的〉

外国人に対する日本語教育においては、単語・連語をはじめとして文型にまで及ぶ種々の語彙要素の意味・用法を習得することが一つの目標であるが、その具体的な内容は、理論的な基準によらず、主に教授者の主観によって決定されているのが現状である。教育内容の適正化のためには、語を超える各レベルの単位を収集して使用実態を把握し、その意味・用法上の特徴を個々に記述したうえで、教授プログラムを再編成する必要がある。

本研究では、一定の意味をもつものと認められる種々の言語単位を現実のテキストから収集して、教育における指導要素としての観点から分類し、そのおのおのについて問題となる語法上・意味上の特性を明らかにする。さらに、語を超える単位を構成する語・形態素の意味的な結合の類型を整理し、次の段階において行われるべき意味記述に備える。

〈研究組織〉

研究代表者

上野田 鶴子（日本語教育指導普及部長）

研究分担者

日向 茂男（日本語教育教材開発室長，62.9.30 まで）

西原 鈴子（日本語教育第二研究室長）

正保 勇（日本語教育第三研究室長）

中道真木男（日本語教育教材開発室研究員，62.7.1 から主任研究官）

〈研究経過〉

2年計画の第2年次に当たり、すでに蓄積されている用例資料に、本研究の観点に従った分類を施し、一定の意味をもつ単位として機能していると認められる要素を抽出した。また、これらの要素の用法分類を行った。さらに、慣用句、擬音語・擬態語を含む表現などの個別の部類について、その問題点を検討し、副詞の意味、インドネシア語と日本語の身体部位名を含む慣用句の比較などを中心として報告書を作成した。

光学文字読み取り装置によるコンコーダンス作成システムの開発

（代表 飛田良文）〈一般研究(B)〉

〈研究目的〉

コンピュータ利用による用例集作成の方法は、日本でも外国でもいくつか開発されており、外国で公表されたコンコーダンスの例は400を超える。しかし光学文字読み取り装置（Optical Character Reader，以下OCR）を用いた例は、外国に1，2例あるのみで日本では例を見ないようである。

本研究はOCRを用いて用例集作成を行なうシステムを開発することを目的としている。

〈研究組織〉

研究代表者

飛田 良文（言語変化研究部長・国語辞典編集準備主幹）

研究分担者

- 林 大 (名誉所員・国語辞典編集準備調査員)
見坊 豪紀 (国語辞典編集準備調査員)
木村 睦子 (国語辞典編集準備調査員)
斎藤 秀紀 (言語計量研究部第三研究室長)
加藤 信明 (国語辞典編集準備調査員)
貝 美代子 (国語辞典編集準備調査員)

〈研究経過〉

OCR 装置は手書きの片仮名・英文字・記号を読み取って計算機に入力することができるものであり、OCR 用紙を使った作業台帳を用いて、本文の単位切りデータ、及び見出し語・品詞・同音語判別情報等の付加データの作成を行うことができる。本システムは OCR 用紙を使った台帳によるデータの入出力を中心においたシステムを構築し、用例集作成の作業能率の向上と計算機利用システムを準備した。

このシステムを具体化するため本年度は本文がすでに機械可読形式になっている第3期の『尋常小学国語読本』（約10万語）を対象として用例集の作成を進めた。また、用例集作成のための作業環境の一部としてパーソナルコンピュータを導入した。データ作成過程の支援ホストコンピュータが作成した用語データの加工・利用などをローカルに行うためである。

データの作成に関しては、国定読本第3期の本文データの

- ①単位切り作業を完了し、
- ②全用語について口語文・文語文・会話文・韻文等の別を示す層別情報データの作成・入力・点検
- ③品詞付け OCR シートを用いた見出し語・品詞・同音語判別情報データの記入・点検
- ④OCR 装置による読み取り作業を行った。

計算機処理に関しては、

- ①作業を進めるために必要な語彙表の出力

②データの点検を行うためのプログラムの作成

③上記作業によって入力したデータによる作業用の KWIC の出力を行った。

なお、本年度は2年計画の第1年次に当たる。

〈今後の予定〉

第3期国定読本の用例集作成の作業を続行し、KWIC 最終出力プログラムを開発し、光学文字読み取り装置による用例集作成の全システムを構築する。

日本語教育研修の実施

A 目 的

日本語教育センター日本語教育指導普及部では、日本語教育の社会的要請にこたえるために、専門家として日本語教員の育成とその資質能力の向上とを目的として、教育研修の機会を提供している。本年度も、これまで実施してきた日本語教育長期専門研修，日本語教育特別集中研修，東京・大阪両地での日本語教育夏季研修を実施した。

長期専門研修は、将来、日本語教育の中心となる人材を養成することを目的として、日本語教育の実務及び研究の基礎知識について研修を行うものである。特別集中研修は、緊急に日本語教育の実務に従事しなければならない者に対し、約1か月の短期間に最小限の教授能力を授けることを目的とする。夏季研修は、日本語教育の研究もしくは実務に現に従事してその経験が豊かな者のための現職者研修と、経験がまだ浅いか全くない者のための初級研修との2種類に分け、日本語教育の内容及び方法について、ごく短期間に研修を行うものである。これらの研修に共通する特色は、研究所の調査・研究の成果を十分に取り入れた研修内容にある。これらの研修によって育成された「研究する教員」は、将来の日本語教育の質的向上に重要な役割を果たすものと思われる。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

センター長 南不二男 部長 上野田鶴子 室長 田中 望 研究員 古川ちかし 沼田善子 研究補助員 早田美智子 事務補佐員
新聞英世 (63.3.12 まで) 笠井久美子 (63.3.14 から)

C 本年度の経過

昭和62年度日本語教育長期専門研修は、昭和62年4月13日より63年2月26日までの約10か月にわたって行った。

1 募集方法及び応募者の資格

本年度は、61年10月23日に案内書を公表し、募集を開始した。案内書を配布したのは、各大学、日本語教育機関、日本語教育関係団体、各都道府県教育委員会など約800機関である。

応募者の資格は、従来どおり、日本語教育又は他の言語教育の経験を有する者については四年制大学卒業以上の学歴を持つこと、経験を有しない者については大学院在学以上の学歴をもつこととした。また、いずれの場合も大学（指導教官）又は日本語教育機関・日本語教育関係団体などからの推薦を求めた。また、前年度同様機関推薦枠を設け、四年制大学卒業以上の学歴を有し、推薦機関の専任教員として昭和60年4月1日に在職していてそれ以後現在に至るまで在職し、かつ、昭和63年4月1日以後在職する予定であることを条件とした。

2 研修生数と選考方法

62年度の有資格応募者は38人であった。（機関推薦枠6人、一般募集枠32人）。定員は30人であるが、次の選考により、18人の受け入れを決定した。第一次選考 昭和62年2月10日締切。応募書類、事前調査票審査。応募者38人、合格者38人。

第二次選考 昭和62年3月2日実施、7日発表。日本語の文章構造、読解、表記に関する筆記試験。受験者37人、合格者25人。

第三次選考 昭和62年3月9日実施、11日発表。口述試験（外国人場面でのコミュニケーションテスト、一般面接）。受験者25人、合格者18人。

3 研修年間日程

研修日程は、次のとおりであった。

昭和61年10月23日 募集要項配布開始

昭和62年 2月10日 応募締切・第一次選考（書類）
 3月2日 第二次選考（筆記）
 3月9日 第三次選考（面接）
 4月13日 レジストレーション，開講式，第一学期開始
 7月18日 第一学期終了
 7月19日より夏季休業
 8月31日 第二学期開始
 12月18日 第二学期終了
 12月19日より冬季休業
 昭和62年 1月11日 第三学期開始
 2月26日 修了式

4 研修内容

講座名	コマ数	講師および内容（1コマ75分）	所属
開講特別講演Ⅰ	1	野元 菊雄	国立国語研究所
Ⅱ	1	南 不二男	国立国語研究所
開講特別講義Ⅰ	選考問題解説（音声）		
	1	上野田鶴子	国立国語研究所
Ⅱ	選考問題解説（文構造）		
	1	田中 望	国立国語研究所
Ⅲ	選考問題解説（表記）		
	1	石井 久雄	国立国語研究所
Ⅳ	選考問題解説（読解）		
	1	古川ちかし	国立国語研究所
（第一学期）			
言語学概論	8	上野田鶴子	国立国語研究所
社会言語学	8	野元 菊雄	国立国語研究所
対照言語学	7	F. クールマス	ジョージタウン大学
対照音声学	7	城生伯太郎	筑波大学
日本語音声学	4	水谷 修	名古屋大学

日本語意味論	7	森田 良行	早稲田大学
日本語表記法	7	武部 良明	
日本語文法Ⅰ	7	松本 泰丈	千葉大学
日本語文法演習	9	沼田 善子	国立国語研究所
外国語教授論	11	古川ちかし	国立国語研究所
教材分析	7	田中 望	国立国語研究所
談話分析	8	田中 望	国立国語研究所
学習過程分析	10	古川ちかし	国立国語研究所
自由研究	16	日本語教育研修室	
教育実習	10日間	日本語教育研修室	
実習準備・整理	10日間	日本語教育研修室	
(第二学期)			
日本語音声学Ⅱ	5	大坪 一夫	筑波大学
日本語文法Ⅱ	7	高橋 太郎	国立国語研究所
日本語語彙論	7	田中 章夫	学習院大学
言語心理学	7	芳賀 純	筑波大学
古典文法	7	沼田 善子	国立国語研究所
日本語方言学概論	5	W. A. グロータース	
日本語教育			
コースデザイン論	6	田中 望	国立国語研究所
機能分析	9	田中 望	国立国語研究所
日本語教授法	7	古川ちかし	国立国語研究所
日本語研究	16	研究部各部及びセンター	国立国語研究所
論文講読	6	沼田 善子	国立国語研究所
モデルクラス分析・参観	12	日本語教育研修室	
教育実習	15日間	日本語教育研修室	
実習準備・整理	15日間	日本語教育研修室	
(第三学期)			
特別講義			

日本語表現論	2	宮地 裕	帝塚山学院
語彙の体系	2	玉村 文郎	同志社大学
表記の教育	2	伊藤 芳照	大東文化大学
作文教育	2	堀口 和吉	天理大学
日本語教育の歴史	2	斎藤 修一	慶応義塾大学
日本語教育と文学	2	吉田弥寿夫	大阪外国語大学

5 研修生

研修修了者17名（男2名、女15名）及びその修了レポート題目は次のとおりである。

修了者氏名 性別 年齢 最終学歴

修了レポート題目

押谷 祐子 女 30 早稲田大学第一文学部文芸科

日本語教育のシラバスを考えるための基礎的考察

笠井久美子 女 32 長崎大学教育学部

日本語の再帰動詞

川石 道子 女 24 広島大学大学院教育学研究科

「のだ」に関する一考察

河西 優子 女 29 慶応義塾大学文学部

インタビューにおける非言語行動—“目の動き”の記述

川畑 美樹 女 27 慶応義塾大学大学院社会学研究科

中間言語話者の会話修復行動—日本語学習者の事例から

岸田 誓子 女 27 広島女学院大学文学部日本文学科

シミュレーションにおける accuracy の考え方

金原 由紀 女 30 東京女子大学文理学部史学科

未知語推測能力 (word attack) と文化的親密度について

桜井喜久子 女 24 青山学院大学大学院文学研究科日本文学・日本語

専攻在学中

シミュレーションによる fluency 教育への一考察

塩入 すみ 女 26 東京学芸大学教育学部

読みの過程における「シカシ」の機能

住田 幾子 女 39 梅光女学院大学大学院

話しことばに見られる接続詞

田島 弘司 男 29 防衛大学理工学部応用化学科

女言葉・男言葉のイメージと機能

田嶋 美穂 女 27 国際基督教大学教養学部教育学科

興味と態度を評価する一質問紙法の試み

栃木 由香 女 40 千葉大学大学院文学研究科在学中

テイク・テクルの表す主観的方向とアスペクト

二通 信子 女 40 東京教育大学教育学部教育学科

文章理解力の習得への教師の援助

萩原 順子 女 27 法政大学第一文学部哲学科

授受補助動詞表現の機能に関する一考察

待鳥 敏子 女 28 西南学院大学文学部外国語学科仏語専攻

授受補助動詞に関する日仏対照の一考察

山元 啓史 男 27 明治大学文学部文学科

聴解練習における練習問題調査

II 日本語教育特別集中研修

1 日程及び会場

日程 昭和63年2月1日(月)～2月26日(金) 20日間

午前9時30分～午後4時15分 1日4こま6時間

会場 国立国語研究所

2 講義題目及び講師

講義題目	時間	講師	所 属
日本語概説	3	南 不二男	国立国語研究所
日本語の音声	3	大坪 一夫	筑波大学
日本語の語彙・意味	6	玉村 文郎	同志社大学
日本語の文法Ⅰ・Ⅱ	6	沼田 善子	国立国語研究所
表記の教育	3	上野田 鶴子	国立国語研究所

日本語教授法Ⅰ	3	鮎澤 孝子	国立国語研究所
日本語教授法Ⅱ	3	西原 鈴子	国立国語研究所
日本語教育概論	3	古川ちかし	国立国語研究所
外国人と日本語	3	野元 菊雄	国立国語研究所
日英語対照研究 ニュージーランド	3	水谷 信子	お茶の水女子大学
日本語教育事情 オーストラリア	3	広瀬 正宣	国際基督教大学
日本語教育事情	3	A. アルフォンソ	放送教育開発センター
欧米人に対する日本語教育Ⅰ	3	福地 務	米加大学連合 日本研究センター
欧米人に対する日本語教育Ⅱ	3	高見沢 孟	米国国務省日本語研修所
教材・評価	3	古川ちかし	国立国語研究所
日本語教育情報収集	3	古川ちかし	国立国語研究所
機関見学	3		米加大学連合日本研究センター
〃	3		米国国務省日本語研修所
日本語教育研究	60		日本語教育研修室

3 受講者

中等教育教員派遣事業及び日本・ニュージーランド文化交流促進計画に基づき、文部省学術国際局長の依頼による2名を受講者とした。2名の派遣先、氏名及び所属は次のとおりである。

オーストラリア	1名	浜田 幸裕	福岡県立福岡中央高等学校
ニュージーランド	1名	水村 達英	群馬県立沼田高等学校

Ⅲ 日本語教育夏季研修

1 日程及び会場

東京会場

日程	昭和62年7月20日（月）～7月24日（金）	5日間
	午前9時15分～午後4時15分	1日4こま6時間
場所	国立国語研究所（東京都北区西が丘三丁目9番14号）	

大阪会場

日程 昭和62年 7月27日（月）～ 7月31日（金） 5日間

午前 9時15分～午後 4時15分 1日 4こま 6時間

場所 大阪府立労働センター（大阪市東区京橋三丁目15番地）

2 講義題目及び講師

現職者研修

講義題目	こま数（1こま90分）	所 属	東京会場講師	所 属	大阪会場講師
対照研究と日本語	2	国立国語研	上野田鶴子	国立国語研	上野田鶴子
対照研究・誤用・適切性	2	国立国語研	田中 望	国立国語研	田中 望
文法の対照研究	2	日本女子大	奥津敬一郎	同志社女子大	佐治 圭三
英語を母語とする者に対する日本語教育	2	お茶の水女子大	水谷 信子	大阪外語大	小泉 保
音声の対照研究	2	慶応義塾大	野沢 素子	大阪樟蔭女子大	杉藤美代子
中国語を母語とする者に対する日本語教育	2	国立国語研	水野 義道	神戸大	中川 正之
語彙の対照研究	2	国立国語研	宮島 達夫	関西学院大	影山 太郎
朝鮮語を母語とする者に対する日本語教育	2	慶応義塾大	渡辺 吉容	大阪外語大	塚本 勲
日本語学習の問題点					
英語圏学習者の立場から 1		国立国語研	西原 鈴子	大阪外語大	吉田弥寿夫
		財政経済協会	W. スピックス	大阪外語大	ブレント・ A. ボールディングハウス

中国語圏学習者の立場から 1

文化庁国語課	山田 泉	同志社大	玉村 文郎
大連外国語学院	張 清華	南京大学	玉 嵐
韓国人学習者の立場から 1			
日本女子大	奥津敬一郎	帝塚山学院	宮地 裕
誠信女子大	金 慶恵	大阪大	姜 錫元
		大阪大	崔 暎淑

初級研修

講義題目	こま数 (1こま90分)		所 属	大阪会場講師
所 属	東京会場講師		所 属	大阪会場講師
日本語と日本語教育		2		
国立国語研	野元 菊雄		国立国語研	野元 菊雄
教授法		2		
国立国語研	上野田鶴子		国立国語研	上野田鶴子
語彙の研究・教育		2		
大東文化大	伊藤 芳照		学習院大学	田中 章夫
表記の研究・教育		2		
	武部 良明		大阪外国語大	小泉 保
音声の研究・教育Ⅰ		2		
筑波大	大坪 一夫		大阪樟蔭女子大	杉藤美代子
音声の研究・教育Ⅱ		2		
名古屋大	土岐 哲		名古屋大	土岐 哲
国際基督教大	今田 滋子		大阪外国語大	山本 進
文法の研究・教育Ⅰ		2		
国立国語研	西原 鈴子		天理大	大鹿 薫久
文法の研究・教育Ⅱ		2		
国立国語研	南 不二男		国立国語研	南 不二男
教材・評価				
国立国語研	古川ちかし		国立国語研	古川ちかし

3 参加者

定員は、現職者研修が東京・大阪各会場40名、初級研修が東京・大阪各会場80名である。応募の資格は、次のとおりであった。

(a)(b)いずれかの条件を満たし、日本語教育機関、日本語教育関係団体又は大学等からの推薦がある者。

現職者研修

- (a) 日本語教育の研究又は実務に現に従事し、又はかつて従事したことがあって、特に最近の現職者研修の主題の発展を図ろうとする者。
- (b) 本研修の初級研修を既に修了し、現職者研修で専門的な知識の充実を図ろうとする者。

初級研修

- (a) 日本語教育の研究又は実務に現に従事し、特に基礎的な知識の充実を図ろうとする者。
- (b) 大学3、4年又は大学院修士課程に在学し、日本語教育の研究及び実務について関心がある者。

募集は、昭和62年4月22日(水)～5月6日(水)に行い、参加申込書及びレポートの提出を求めた。この書類二件の審査によって、参加の許可・不許可を決定した。応募及び参加許可の概要は次のとおりである。

	応募	参加許可	全日程参加	参加証明書交付
現職者研修東京会場	69	46	43	44
大阪会場	80	48	40	46
初級研修 東京会場	184	94	90	91
大阪会場	141	101	87	93

4 運営委員会

集中的な研修を円滑にするために、東京・大阪各会場にそれぞれ運営委員を委嘱し、委員及び国立国語研究所日本語教育センター研究員で運営委員会

を組織した。研修の運営に関して必要な事項は、運営委員会の決定するところによった。

運営委員及び関係研究員は、次のとおり。

東京会場	大東文化大学外国語学部教授	伊藤 芳照
	社団法人日本語教育学会理事	木村 宗男
	慶応義塾大学国際センター教授	斎藤 修一
大阪会場	同志社大学文学部教授	玉村 文郎
	天理大学文学部教授	堀口 和吉
	帝塚山学院長	宮地 裕
	大阪外国語大学外国語学部教授	吉田弥寿夫
	国立国語研究所日本語教育センター	南 不二男
		上野田鶴子
		田中 望
	古川ちかし	
	沼田 善子	

日本語教育に関する情報資料の収集・提供

A 目 的

第二言語としての日本語教育を有効に行うために、これまでの国内・国外における日本語研究・日本語教育の実態及び日本語教育に関する教科書・副教材・視聴覚教材などの情報資料を収集整理し、今後の研究及び教育の参考資料として提供し得るよう整備することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第二研究室

室長 西原鈴子 非常勤研究員 小出いづみ (62. 4. 1~63. 3.31)

C 本年度の作業

第二言語としての日本語教育に関する教科書、副教材、辞典及び対照研究に参考となる言語研究・外国語教育に関する文献を収集し、整理した。

一方、日本語教育に用いる文献リストを作成するために、学術雑誌等に掲載の論文及び関連資料のカード化を進め、その一部を内部資料『日本語教育学会誌・機関誌掲載論文集 文献一覧』(1987)にまとめた。収録文献は以下に示す2種の学会誌及び17教育機関の機関誌計29誌に掲載された論文等総計2150篇である。

I. 学会誌

- 1 『日本語教育』1-60号 (1962—1986)
- 2 『JATJ』 Vols. 1: 1-20: 2 (1963—1986)

II. 機関誌

- 1 『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』1-9 (1978—1986)
- 2 大阪外国語大学研究留学生別科『日本語・日本文化』第1-13号 (1969—1984)

- 3 慶応義塾大学国際センター『日本語と日本語教育』第1-14号 (1966—1986)
『日本研究』第1-3号 (1971—1973)
- 4 言語文化研究所『日本語教育研究』第1-22号 (1970—1986)
- 5 『国際学会友会日本語学校紀要』第1-10号 (1976—1986)
- 6 国際基督教大学語学科
『Annual Reports』Vols. 1-10 (1976—1985)
『語学研究』Vol. 1: 1 (1986)
『ICU 夏期日本語講座論集』1-2 (1984—1985)
- 7 国際交流基金『在中華人民共和国日本語研修センター紀要日本語教育研究論
纂』第1-4集 (1983—1986)
- 8 国際日本語普及協会『AJALT』第1-9号 (1978—1986)
- 9 国立国語研究所『研究報告集』1-7 (1978—1986)
国立国語研究所日本語教育センター『日本語教育論集』1-3 (1984—1986)
- 10 『大東文化大学紀要〈人文科学〉』第1-24号 (1963—1986)
大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』1-3 (1984—1985)
- 11 筑波大学文芸・言語学系内 外国人に対する日本語教育プロジェクト『外国
人と日本語』1-5 (1976—1980)
筑波大学文芸・言語学系『文藝言語研究 言語篇』1-10 (1977—1985)
筑波大学外国語センター『外国語教育論集』第1-8号 (1980—1986)
筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』第1-6号 (1981—1986)
筑波大学留学生センター『日本語論集』第1号 (1986)
- 12 『天理大学別科日本語課程紀要』第1号 (1986)
- 13 『東海大学紀要 留学生教育センター』1-7号 (1978—1986)
- 14 『東京外国語大学論集』第1-36号 (1951—1986)
『東京外国語大学特設日本語学科 年報』1-8 (1978—1986)
東京外国語大学大学院外国語学研究科言語文化研究会『言語文化研究』第1-
4号 (1983—1986)
- 15 東京外国語大学附属日本語学校『日本語学校論集』1-13号 (1974—1986)
- 16 東北大学『日本語教育研究論集』第1号 (1986)

17 『早稲田大学語学教育研究所紀要』 I-31 (1962—1985)

早稲田大学語学教育研究所『講座 日本語教育』第1-22分冊 (1965—1986)

また、1985年に刊行された単行本及び学術誌等を対象として、国立国語研究所の蔵書から日本語教育のための関連文献1288篇を選出し、キーワード付けを行い、著者名・キーワード両方による検索が可能となるよう編集した『日本語教育文献索引 1985』を内部資料としてまとめた。

D 今後の予定

引き続き、文献等の情報資料の収集・整理を行い、提供に備える。

日本語教育教材及び教授資料の作成

A 目 的

日本語教育における有効適切な教材の開発を目ざして、モデル教材を作成し、また教授上の参考に供するために日本語教育の基礎知識に関する教授資料を刊行する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長 南不二男 部長 上野田鶴子 室長 日向茂男 (62. 9. 30まで) 研究員 中道真木男 (62. 7. 1 から主任研究官) 中田智子 (63. 1. 1 から)

C 本年度の作業

1. 日本語教育映像教材の作成

前年度に作成した日本語教育映像教材（中級編）ユニット1に引き続き、ユニット2を企画・制作した。その題名及び規格等は、次のとおりである。

イ. 題名及び内容

日本語教育映像教材（中級編）

ユニット2「人に何かを頼むとき——依頼・要求・指示——」

セグメント7 届出をする ——市役所で——

セグメント8 買物をする ——デパートで——

セグメント9 打合せをする——出版社で——

セグメント10 お願いをする——大学で——

セグメント11 手伝いを頼む——家庭で——

セグメント12 友達を誘う ——友達の家で——

このユニットでは、さまざまな言語場面のうち、さまざまな関係にある人の間で、何かを依頼したり指示したりする表現の用いられ方を、六つのセグメントに分けて映像で描いた。

ロ. 規格等

VTRカラー (1/2インチ, 1/3インチ)

16ミリカラー

企画 国立国語研究所

制作 日本シネセル株式会社

この日本語教育映像教材の企画・制作に当たっては、日本語教育映画等企画協議会を設け、学習項目や主題の検討、シナリオの検討等の協力を仰いでいる。また、制作面では、特に言語上の問題について指導・助言を受けている。本年度の委員は次の諸氏である。

(所外委員)

川口 義一 (早稲田大学助教授)

木村 宗男 (日本語教育学会副会長)

佐久間まゆみ (筑波大学講師)

丸山 敬介 (国際教育振興会日本語研修所主任)

吉岡 英幸 (東京外国語大学助教授)

(所内委員)

相澤 正夫 (日本語教育センター第一研究室研究員)

村木新次郎 (言語体系研究部第一研究室長)

杉戸 清樹 (言語行動研究部第一研究室長)

2. 日本語教育映画解説の作成

すでに作成されている『日本語教育映画 基礎編』の解説書を内部資料として刊行した。内容は以下のとおりである。

日本語教育映画解説基礎編

第26巻「このきっぷを あげます」——やり・もらいの表現1——

第27巻「にもつを もって もらいました」

3. 日本語教授資料の作成

日本語教育指導参考書シリーズの一つとして下記参考書を編集・刊行した。約 500 部を国内の日本語教育機関等に配布するほか、大蔵省印刷局より市販された。

題名 『文字・表記の教育』（日本語教育指導参考書14）

執筆者 加藤彰彦（実践女子短期大学教授）

伊藤芳照（大東文化大学教授）

規格等 A 5 版 181 ページ

D 今後の予定

日本語教育の現場での利用を目的として、「日本語教育教材開発のための調査研究」（77ページ参照）の成果を応用し、教授者向け参考資料、学習者向け教材資料の開発を継続して、『日本語教育映像教材』の作成、『日本語教育指導参考書』『日本語教育映画解説』等の編集・刊行を行う。

国語辞典編集に関する準備調査

A 目 的

国語辞典編集の具体的計画を定め、編集の準備、用例採集の実験的試行を行う。

B 担 当 者

国語辞典編集準備室

主幹 飛田良文 書記 高梨信博

C これまでの経過

昭和52年度末、国語辞典編集準備委員会を設け、国語辞典の編集について、辞典の種類・規模・その他編集実行上の可能性・手順・体制などの検討を始めた（「国語辞典覚書」参照）。54年度からは調査員を委嘱し国語辞典編集準備室を開設した。また、国語辞典編集準備調査会を設け、国語辞典編集の具体的計画を定めるための準備及び用例採集の実験的試行を開始した。成果としてまとめたものは次のとおりである。

- 諸外国における大辞典（国語辞典編集準備資料 1）
- 現代語用例辞典の構想—用例採集法を中心にして（同6）
- 用例採集のための主要文学作品目録（同2）
- 用例採集のための主要雑誌目録（同3）
- 用例辞典編集作業のために（一）、（二）（同5—1、5—2）
- 用語総索引作成のための電算機利用方式（同7）
- スカウト式用例採集の手引き（同8）
- 用例採集のためのベストセラー目録（同4）
- スカウト方式による用例採集の実験（同9）

国語辞典編集準備室所蔵見坊文庫目録（別冊）

D 本年度の作業

I 国語辞典編集準備調査員の委嘱

本年度は、辞典編集の準備及び用例採集の実験のため、下記の調査員を委嘱した。

貝 美代子 (62. 4. 1~63. 3.31)	
加藤 信明 (62. 4. 1~63. 3.31)	上智大学非常勤講師
木村 睦子 (62. 4. 1~63. 3.31)	計量計画研究所言語情報研究室長
見坊 豪紀 (62. 4. 1~63. 3.31)	元国立国語研究所第三研究部長
服部 隆 (62. 4. 1~63. 3.31)	上智大学大学院生
林 大 (62. 4. 1~63. 3.31)	国立国語研究所名誉所員

II 国語辞典編集準備調査会の開催

調査会の委員には所外委員11人，所内委員8人を委嘱した。

(所外委員)

菅野 謙	大正大学教授
見坊 豪紀	元国立国語研究所第三研究部長
阪倉 篤義	甲南女子大学教授
佐藤喜代治	フェリス女学院大学客員教授
惣郷 正明	朝日新聞社社友
田島 宏	明治大学教授
林 大	国立国語研究所名誉所員
松井 栄一	山梨大学教授
馬淵 和夫	中央大学教授
山田 俊雄	成城大学教授
頼 惟勤	千葉経済短期大学教授

(所内委員)

高梨 信博	言語変化研究部第二研究室主任研究官
高橋 太郎	言語体系研究部長

中野 洋 言語計量研究部第一研究室長
野村 雅昭 言語計量研究部長
飛田 良文 言語変化研究部長
南 不二男 日本語教育センター長
宮島 達夫 言語体系研究部第二研究室長

調査会は2回開催し、下記の議題について検討した。

第1回 昭和62年12月22日

- (1) 梵語辞書について
- (2) その他

第2回 昭和63年3月16日

- (1) 辞書の意味記述
- (2) その他

なお、このほか、第1回には、貝調査員が「第2期・第3期国定読本の書誌」について報告した。第2回には、科研費で行っている「光学文字読み取り装置」による用例集作成の実演を行った。

Ⅲ 国語辞典編集準備室の作業

① 用例採集法の実験

手作業による採集法（総索引方式）の実験

第2期国定読本『尋常小学読本』（明治42～43）について『国定読本用語総覧3』の原稿作成作業（用例カードの複写・見出しの記入・注記の記入・例文の長さの指定）を行った。

この作業は、飛田良文・高梨信博・貝美代子・加藤信明・見坊豪紀・服部隆・林大が担当した。

② 光学文字読み取り装置によるコンコーダンス作成システムの開発（科研費の項参照）

③ 第2期・第3期国定読本の書誌

第2期国定読本（巻一～巻十二）は使用期間中に、本文・振り仮名・上欄・挿絵・挿絵の中の文字などがたびたび修正された。そこで底本の位置を明

らかにするため、その修正経過を調査した。その成果は、『国定読本用語総覧3』付録7『『尋常小学読本』(ハタタコ読本) 修正経過』として示した。その資料は以下のとおりである。

- 1 国定教科書使用上ノ注意 明治四十三年十二月調 明治四十四年二月十日発行 文部大臣官房図書課
- 2 国定教科書使用上ノ注意 明治四十五年二月調 明治四十五年四月十八日発行 文部省図書局
- 3 国定教科書使用上ノ注意 大正元年十月調 大正元年十二月七日発行 文部省図書局
- 4 国定教科書使用上ノ注意 第四編 大正二年三月調 大正二年四月八日発行 文部省図書局
- 5 国定教科書使用上ノ注意 第五編 大正二年十二月調 大正三年一月三十日発行 文部省
- 6 小学読本小学書キ方手本 (前期用) 修正事項 大正三年十一月 大正三年十二月十二日発行 文部省普通学務局
- 7 小学読本小学書キ方手本 (後期用) 修正事項 大正四年四月 大正四年六月十三日発行 文部省普通学務局
- 8 国定教科書使用上ノ注意 大正六年九月調 大正六年十月廿八日発行 文部大臣官房図書課
- 9 国定教科書使用上ノ注意 大正八年十月 文部省

このほか『教育時論』第九五二号(明治四十四年九月二十五日発刊)に「尋常小学読本正誤表」があるが、その内容は挿絵の訂正以外は1と2に含まれている。

1, 3, 4, 5は国立国会図書館所蔵本, 2, 6, 7, 9は筑波大学学校教育部所蔵本, 8は『近代^{日本}教科書教授法資料集成』第十二巻 編纂趣意書2(昭和59年東京書籍)を使用した。

1～9の原本の調査は、飛田良文・貝美代子が担当した。そのさい、筑波大学講師塩沢和子、文化庁文化教育部国語課主任国語調査官安永実、同国語調査官西田絢子の三氏のお世話になった。

これらの資料にもとづき、第2期・第3期の国定読本を実地に調査した。延べ教科書数は966冊である。その内訳は、

(第2期)		(第3期)	
巻1	32	巻1	26
巻2	35	巻2	34
巻3	39	巻3	34
巻4	38	巻4	33
巻5	37	巻5	45
巻6	36	巻6	49
巻7	37	巻7	45
巻8	45	巻8	45
巻9	52	巻9	40
巻10	42	巻10	40
巻11	38	巻11	50
巻12	48	巻12	46
合計	479冊	合計	487冊

である。

その結果、奥付にある符号「(〇七五二), (一七五二), (二七五二)」(日本書籍・東京書籍・大阪書籍), 「234……」(日本書籍), 「倭又得……」(東京書籍)は使用年度を示すもので、奥付が同一年月日であっても内容に異同のある場合のあることが明らかになった。使用年度と奥付の符号との関係は次頁の表のとおりであると考えられる。

明治43年から45年までの四桁の数字は紀元と一致する。東京書籍の符号は昭和6年ごろから「いろはに……」にかわるようだが、この平仮名の符号については調査継続中である。また大阪書籍の教科書にも第2期・第3期とも片仮名その他による符号が見られ、この点も現在調査中である。なお日本書籍の符号「2345……」の所在については中村紀久二氏の示唆を得た。この成果は、貝調査員が、第一回国語辞典編集準備調査会において発表した。

教科書の使用年度と奥付の符号の関係

日本書籍：翻刻発行兼印刷者の住所の末尾

東京書籍：定価欄の下

共 通：文部省検査日の下

使用年度	期	日本書籍	東京書籍	共 通				
明治四十三	(ハタタコ) 第二期	2	懐	(〇七五二)				
四十五				(一七五二)				
大正四十五				(二七五二)				
元二								
三								
四								
五								
六								
七								
八								
九	(ハナハト) 第三期	10	ぬ		ハナハト 卷一・二			
十					ハナハト 卷一～四			
十一					ハナハト 卷一～六			
十二					ハナハト 卷一～八			
十三					ハナハト 卷一～十			
十四								
十五								
昭和二				(サクラ) 第四期	16	そ		
三								
四								
五								
六								
七								
八								
九								
十								
十一								
十二								

原本の調査に当たったのは貝美代子・安井 篤・加藤信明・服部 隆・妹尾和子である。調査した機関は以下のとおりである。

国立教育研究所附属教育図書館	昭和62年から	貝・加藤
東書文庫	昭和62年から	貝
藤沢市文書館	{昭和62年1月21日	妹尾
	{昭和62年7月9日	妹尾
国立公文書館	昭和62年1月30日	貝
横須賀市教育研究所	{昭和62年2月2日	貝
	{昭和62年7月13日	貝・妹尾
筑波大学学校教育部	{昭和62年2月5日	貝
	{昭和62年6月12日	貝
愛知教育大学附属図書館	昭和62年2月18日	貝
奈良女子大学附属図書館	昭和62年2月19日	貝
滋賀大学附属図書館教育学部分館	昭和62年2月20日	貝
福岡県教育センター	昭和62年3月27日	安井
福岡教育大学附属図書館	昭和62年3月30日	安井
増穂町立増穂小学校教育資料展	昭和62年11月26・27日	貝
御宿町歴史民俗資料館	昭和63年3月2・3日	貝・妹尾
五倫文庫		
大分県立大分図書館	昭和63年3月24日	貝
同上	昭和63年3月30日	服部

調査に当たっては国立教育研究所附属教育図書館事務室長中村紀久二，横須賀市教育研究所副所長正林喬，横須賀市教育委員会教育研究所高橋真雄，筑波大学専任講師塩沢和子，滋賀大学教授鈴木博，増穂町教育委員会教育長井上幹也，同次長大久保俊彦，同社会教育係志村広文，増穂町立増穂小学校長塩沢清，増穂町立増穂小学校教諭長沢房文，御宿町歴史民俗資料館長吉野博夫，財団法人五倫文庫理事長松本勝哉，同常務理事田軸武士の各氏の協力を得た。

個人所蔵本としては，中村紀久二，飛田多喜雄，松井栄一の三氏のものを

調査し、高松敬明氏からは情報を得た。また、東京都文京区立誠之小学校で、当時の教科書の供給状況についての情報を得た。その際校長柳下昭夫氏のお世話になった。

④『国定読本用語総覧3』の刊行

第2期国定読本の「と～ん」の原稿を作成し、8月から三省堂に渡しはじめ、校正作業・付録の作成を行なった。『国定読本用語総覧3』の内容はハタタコ読本の「と～ん」の部と付録からなる。付録は、1. 課名一覧 2. 文字のある挿絵一覧 3. 仮名一覧 4. 音図・いろは 5. 漢字一覧（提出順） 6. 漢字一覧（五十音順） 7. 「尋常小学読本」（ハタタコ読本）修正経過 からなる。1～6は高梨信博，7は貝美代子が作成した。

⑤国定読本第2期『尋常小学読本』の用語統計

『用語総覧2』と『同3』によって第2期国定読本（ハタタコ読本）の用語が確定したので、見出し語（空見出し，参照見出しを除く）によって使用度数分布表を作成したので報告する。

使用度数分布表（ハタタコ）

使用順位	度数	異なり	累積異なり	累積延べ	(%)
1	4630	1	1	4630	5.98
2	3408	1	2	8038	10.38
3	3344	1	3	11382	14.70
4	3295	1	4	14677	18.96
5	2962	1	5	17639	22.78
6	1277	1	6	18916	24.43
7	1171	1	7	20087	25.95
8	1120	1	8	21207	27.39
9	1082	1	9	22289	28.79
10	1075	1	10	23364	30.18
11	1069	1	11	24433	31.56
12	843	1	12	25276	32.65
13	586	1	13	25862	33.41
14	529	1	14	26391	34.09
15	512	1	15	26903	34.75

使用順位	度数	異なり	累積異なり	累積延べ	(%)
16	460	1	16	27363	35.34
17	457	1	17	27820	35.93
18	447	1	18	28267	36.51
19	429	1	19	28696	37.07
20	421	1	20	29117	37.61
21	409	1	21	29526	38.14
22	403	1	22	29929	38.66
23	382	1	23	30311	39.15
24	358	1	24	30669	39.61
25	347	1	25	31016	40.06
26	345	1	26	31361	40.51
27	290	1	27	31651	40.88
28	284	1	28	31935	41.25
29	280	1	29	32215	41.61
30	277	1	30	32492	41.97
31	266	1	31	32758	42.31
32	265	1	32	33023	42.65
33	263	1	33	33286	42.99
34	248	1	34	33534	43.31
35	245	1	35	33779	43.63
36	221	1	36	34000	43.92
37	217	1	37	34217	44.20
38	211	1	38	34428	44.47
39	210	1	39	34638	44.74
40	205	1	40	34843	45.01
41	204	1	41	35047	45.27
42	203	1	42	35250	45.53
43	191	1	43	35441	45.78
44	189	1	44	35630	46.02
45	183	1	45	35813	46.26
46	182	2	47	36177	46.73
47	164	2	49	36505	47.15
48	163	1	50	36669	47.36
49	153	1	51	36821	47.56

使用順位	度数	異なり	累積異なり	累積延べ	(%)
50	152	1	52	36973	47.76
51	143	2	54	37259	48.13
52	138	1	55	37397	48.30
53	137	1	56	37534	48.48
54	136	1	57	37670	48.66
55	134	1	58	37804	48.83
56	130	1	59	37934	49.00
57	128	1	60	38062	49.16
58	124	2	62	38310	49.48
59	120	1	63	38430	49.64
60	114	1	64	38544	49.79
61	110	2	66	38764	50.07
62	108	1	67	38872	50.21
63	107	1	68	38979	50.35
64	102	1	69	39081	50.48
65	101	1	70	39182	50.61
66	99	1	71	39281	50.74
67	95	1	72	39376	50.86
68	94	1	73	39470	50.98
69	92	1	74	39562	51.10
70	89	2	76	39740	51.33
71	88	2	78	39916	51.56
72	87	1	79	40003	51.67
73	84	1	80	40087	51.78
74	81	1	81	40168	51.88
75	80	2	83	40328	52.09
76	77	1	84	40405	52.19
77	75	3	87	49630	52.48
78	74	2	89	40778	52.67
79	73	2	91	40924	52.86
80	72	3	94	41140	53.14
81	71	1	95	41211	53.23
82	70	2	97	41351	53.41
83	69	2	99	41489	53.59

使用順位	度数	異なり	累積異なり	累積延べ	(%)
84	68	1	100	41557	53.68
85	66	3	103	41755	53.93
86	65	3	106	41950	54.19
87	64	4	110	42206	54.52
88	61	3	113	42389	54.75
89	60	1	114	42449	54.83
90	59	2	116	42567	54.98
91	57	1	117	42624	55.06
92	56	2	119	42736	55.20
93	55	3	122	42901	55.41
94	54	2	124	43009	55.55
95	53	1	125	43062	55.62
96	52	3	128	43218	55.82
97	51	4	132	43422	56.09
98	50	4	136	43622	56.35
99	49	3	139	43769	56.54
100	48	1	140	43817	56.60
101	47	4	144	44005	56.84
102	46	1	145	44051	56.90
103	45	1	146	44096	56.96
104	44	3	149	44228	57.13
105	43	1	150	44271	57.18
106	42	3	153	44397	57.35
107	40	6	159	44637	57.66
108	39	5	164	44832	57.91
109	38	3	167	44946	58.06
110	37	5	172	45131	58.29
111	36	1	173	45167	58.34
112	35	5	178	45342	58.57
113	34	7	185	45580	58.87
114	33	7	192	45811	59.17
115	32	6	198	46003	59.42
116	31	5	203	46158	59.62
117	30	9	212	46428	59.97

使用順位	度数	異なり	累積異なり	累積延べ	(%)
118	29	5	217	46573	60.16
119	28	10	227	46853	60.52
120	27	12	239	47177	60.94
121	26	16	255	47593	61.47
122	25	15	270	47968	61.96
123	24	14	284	48304	62.39
124	23	22	306	48810	63.05
125	22	33	339	49536	63.98
126	21	16	355	49872	64.42
127	20	17	372	50212	64.86
128	19	24	396	50668	65.45
129	18	27	423	51154	66.07
130	17	21	444	51511	66.54
131	16	30	474	51991	67.16
132	15	32	506	52471	67.78
133	14	29	535	52877	68.30
134	13	53	588	53566	69.19
135	12	53	641	54202	70.01
136	11	63	704	54895	70.91
137	10	70	774	55595	71.81
138	9	108	882	56567	73.07
139	8	186	1068	58055	74.99
140	7	182	1250	59329	76.63
141	6	212	1462	60601	78.28
142	5	341	1803	62306	80.48
143	4	530	2333	64426	83.22
144	3	845	3178	66961	86.49
145	2	2141	5319	71243	92.02
146	1	6176	11495	77419	100.00

使用度数順用語統計表からは、上位10語で30パーセント、66語で50パーセント、217語で60パーセント、641語で70パーセント、1803語で80パーセントとなることが明らかになった。

使用度数25以上の上位語 146 語を列挙すると次のとおりである。

度数順語彙表（度数25以上）

番号	見出し	度数	番号	見出し	度数
1	て（接助）	2962	28	いま〔今〕（名）	124
2	が（格助）	1120	29	うえ〔上〕（名）	110
3	た（助動）	1069	30	う（助動）	108
4	だ（助動）	843	31	いく〔行〕（動）	99
5	その〔其〕（連体）	586	32	おおし〔多〕（形）	95
6	ある〔在〕（動）	529	33	うち〔内〕（名）	94
7	こと〔事〕（名）	512	34	おもう〔思〕（動）	89
8	あり〔在〕（動）	460	35	くに〔国〕（名）	89
9	いう〔言〕（動）	457	36	しる〔知〕（動）	88
10	いる〔居〕（動）	447	37	それ〔其〕（代名）	87
11	ず（助動）	421	38	つくる〔作〕（動）	84
12	たり（助動）	409	39	いたる〔至〕（動）	80
13	これ〔此〕（代名）	382	40	き〔木〕（名）	80
14	き（助動）	284	41	うま〔馬〕（名）	75
15	この〔此〕（連体）	266	42	でる〔出〕（動）	75
16	する〔為〕（動）	265	43	ござる〔御座〕（動）	73
17	で（格助）	265	44	てき〔敵〕（名）	73
18	です（助動）	248	45	ため〔為〕（名）	72
19	す〔為〕（動）	211	46	きく〔聞〕（動）	71
20	から（格助）	210	47	できる〔出来〕（動）	70
21	が（接助）	203	48	ここ〔此処〕（代名）	69
22	して（接助）	182	49	ても（接助）	66
23	そうろう（助動）	163	50	ある〔或〕（連体）	65
24	ごとし（助動）	143	51	うみ〔海〕（名）	64
25	か（終助）	138	52	たり（並助）	64
26	から（接助）	137	53	こころ〔心〕（名）	61
27	くる〔来〕（動）	128	54	う〔得〕（動）	60

番号	見出し	度数	番号	見出し	度数
55	て〔手〕（名）	59	83	うつくしい〔美〕（形）	37
56	たくさん〔沢山〕（副）	56	84	せる（助動）	37
57	あいだ〔間〕（名）	55	85	おどろく〔驚〕（動）	36
58	いえ〔家〕（名）	55	86	ち〔地〕（名）	35
59	たつ〔立〕（動）	55	87	ついに〔終〕（副）	35
60	おおきな〔大〕（連体）	52	88	あたひ〔価〕（名）	34
61	た〔他〕（名）	51	89	かかる〔掛〕（動）	34
62	いる〔入〕（動）	50	90	かく〔斯〕（副）	34
63	すぐ〔直〕（副）	50	91	たかい〔高〕（形）	34
64	いち〔一〕（課名）	49	92	きしゃ〔汽車〕（名）	33
65	かぜ〔風〕（名）	48	93	くち〔口〕（名）	33
66	いず〔出〕（動）	47	94	した〔下〕（名）	33
67	かえる〔帰〕（動）	47	95	しまう〔仕舞〕（動）	33
68	つねに〔常〕（副）	46	96	たかし〔高〕（形）	33
69	こえ〔声〕（名）	45	97	たり（助動）	33
70	でも（副助）	45	98	いぬ〔犬〕（名）	32
71	こども〔子供〕（名）	44	99	おおい〔多〕（形）	32
72	しむ（助動）	44	100	および〔及〕（接）	32
73	いろ〔色〕（名）	43	101	かく〔書〕（動）	32
74	さく〔咲〕（動）	42	102	おく〔置〕（動）	31
75	ちち〔父〕（名）	42	103	がっこう〔学校〕（名）	31
76	か（副助）	40	104	すこし〔少〕（副）	31
77	かたち〔形〕（名）	40	105	あさ〔朝〕（名）	30
78	すすむ〔進〕（動）	40	106	あし〔足〕（名）	30
79	さかん〔盛〕（形状）	39	107	かわ〔川〕（名）	30
80	すくなし〔少〕（形）	39	108	だす〔出〕（動）	30
81	ちから〔力〕（名）	39	109	だんだん〔段段〕（副）	30
82	こ〔子〕（名）	38	110	あめ〔雨〕（名）	29

番号	見出し	度数	番号	見出し	度数
111	うたう [歌] (動)	29	129	うお [魚] (名)	26
112	しょくもつ [食物] (名)	29	130	およぶ [及] (動)	26
113	すべて [総] (副)	29	131	けもの [獣] (名)	26
114	そう [相] (形状)	29	132	さらに [更] (副)	26
115	あき [秋] (名)	28	133	ぞ (終助)	26
116	しろい [白] (形)	28	134	ただ [唯] (副)	26
117	つかう [使] (動)	28	135	ちゅうさ [中佐] (名)	26
118	てんのう [天皇] (名)	28	136	いろいろ [色色] (形状)	25
119	あの [彼] (連体)	27	137	おと [音] 名	25
120	いと [糸] (名)	27	138	およそ [凡] (副)	25
121	えだ [枝] (名)	27	139	きせん [汽船] (名)	25
122	かう [買] (動)	27	140	こな (形状)	25
123	きょう [今日] (名)	27	141	さくら [桜] (名)	25
124	くう [食] (動)	27	142	すぐ [過] (動)	25
125	ころ [頃] (名)	27	143	ずつ (副助)	25
126	つく [付] (動)	27	144	すなわち [即] (接)	25
127	つける [付] (動)	27	145	せいしん [精神] (名)	25
128	あたま [頭] (名)	26	146	ちかし [近] (形)	25

⑥国語辞典編集準備資料の印刷

本年度は、見坊豪紀調査員執筆の「スカウト方式による用例採集の実験試行」(昭和60年執筆済み)を印刷した。

母語別日本語学習辞典の編集

A 目 的

日本語学習者には、それぞれの母国語によって解説を加えた学習辞典が必要不可欠である。現在、中級用のものが特に不足しているため、各国語別の中級用日本語学習辞典を編集する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長 南不二男 部長 上野田鶴子 室長 日向茂男 (62.9.30
まで) 研究員 中道真木男 (62.7.1 から主任研究官) 中田智子 (62.1.1 か
ら) 第三研究室長 正保 勇

C 本年度の作業

1. 母語別日本語学習辞典編集委員会の開催

インドネシア語版第1期の編集終了に伴い、編集作業の全般に関する報告と問題点の検討のため、会議を1回開催した。この委員会には、所外委員10名、所内委員8名を委嘱した。

(所外委員)

窪田 富男 (東京外国語大学教授)

倉持 保男 (慶応義塾大学教授)

斎藤 修一 (慶応義塾大学教授)

佐々木重次 (東京外国語大学教授)

柴田 紀男 (天理大学教授)

玉村 文郎 (同志社大学教授)

富田 隆行 (亜細亜大学助教授)

西尾 寅弥 (大妻女子大学教授)

松山 納 (元国際大学教授)

松原 直路 (国際交流基金日本研究部日本語課長)

(所内委員)

南 不二男 (日本語教育センター長)

上野田鶴子 (日本語教育指導普及部長)

日向 茂男 (日本語教育教材開発室長, 62.9.30 まで)

中道真木男 (日本語教育教材開発室研究員, 62.7.1 から主任研究官)

西原 鈴子 (日本語教育センター第二研究室長)

正保 勇 (日本語教育センター第三研究室長)

田中 望 (日本語教育センター日本語教育研修室長)

高橋 太郎 (言語体系研究部長)

2. インドネシア語翻訳原稿の校閲

59年度に作成した「翻訳校閲要領」に基づき、校閲を実施した。作業は次の各氏に依頼した。

石井和子, 石田規子, エディ・ヘルマワン, 崎山 理, 佐々木重次, 柴田紀男,
高殿良博

3. インドネシア語翻訳原稿の母語話者による校閲

60年度に作成した「母語話者校閲要領」に基づき、インドネシア語として自然な訳文を得るための内容修正を行った。作業は次の各氏に依頼した。

エディ・ヘルマワン, エミリアーナ・チャンドラ, ジョンジョン・ジョハナ,
K. S. スディアルタ, グルシマ・マンダ, トルセノ・A. S.

4. 表記・形式の統一

翻訳及び校閲の行われた原稿について、日本語・インドネシア語双方の表記及び記号類の使用等、形式上の統一を行った。

なお、和文原稿の最終点検とインドネシア語版向けの原稿調整のため、引き続き以下の客員研究員を委嘱した。

ウィン・カルジョ (東京外国語大学外国人教師)

佐々木重次 (東京外国語大学教授・母語別日本語学習辞典編集委員)

高殿 良博（亜細亜大学講師）

島 郁（聖ヨゼフ日本語学院講師）

ブラウィラネガラ・ファリド（日本放送協会非常勤職員）

5. インドネシア語版第1期分の印刷

以上の作業を経て作成された原稿を内部資料として刊行した。この刊行は政府開発援助（ODA）事業として行われ、印刷された1,000部のうち約500部をインドネシア及びマレーシア両国内の日本語教育機関に配布する計画である。本書の内容は以下のとおりである。

題 名	基礎日本語活用辞典 KAMUS PEMAKAIAN BAHASA JEPANG DASAR インドネシア語版
規 格 等	B5版 凡例・本文・索引 計1,500ページ
見出し語数	約4,000項目
対象利用者	インドネシア語を母語とする中級以上の日本語学習者・教授者

各項目の記述内容は以下のようなものである。

見出し……アクセントを含む発音、日本字による表記、品詞及び活用型、
活用語については主な活用形を表示する。

対訳語……インドネシア語ではほぼ同じ意味を表す語をあげる。

語 釈……文章により語義を説明する。

文例・造語例……見出し語の用例を翻訳とともに示す。

対義語・類義語・参照項目……関連する語・表現をあげる。

補足説明……発音・表記・文法などの面における留意事項、語源・語構成
の説明、使用上の参考情報、文化的な参考情報、派生語などを解説する。

また、各項目で触れられた語は、巻末の索引によって検索することができ、これらを含めれば、実質上約10,000語の語彙について情報が得られる。

D 今後の予定

辞書編集を始めとする語彙教材の作成の基礎となる用例資料の収集を行い、

日本語教授者が教育内容を決定する際の参考として提供する事業に着手する。
この過程で、母語別日本語学習辞典のために執筆された和文原稿が利用される予定である。

図書の収集と整理

前年度に引き続き、研究所の調査研究活動に必要な研究文献及び言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位のご好意に対して感謝する。

昭和62年度に受け入れた図書及び逐次刊行物の数並びに蔵書累計は、次のとおりである。

図書

受入 2,183冊

	購入	寄贈	製本雑誌	その他	計
和書	957	283	251	49	1,540
洋書	409	94	136	4	643
計	1,366	377	387	53	2,183

蔵書数 76,846冊 (63.3.31 現在)

逐次刊行物 (学術雑誌, 紀要, 年報類)

継続受入 822種

	購入	寄贈	計
和	50	693	743
洋	57	22	79
計	107	715	822

庶務報告

I 庁舎及び経費

1. 庁舎

所在 東京都北区西が丘3丁目9番14号

敷地 10,030㎡

建物

第一号館 (延) 5,719㎡

(管理部門・講堂・図書館・日本語教育センター)

第二号館 (延) 3,015㎡

(研究部門)

第三号館 (延) 238㎡

(会議室・その他)

第一資料庫 (延) 213㎡

第二資料庫 106㎡

その他付属建物 (延) 330㎡

計 (延) 9,621㎡

2. 経費

昭和62年度予算額

人件費 (455,944,000円)

455,944,000円

事業費 (256,389,000円)

247,717,000円

合計 (712,333,000円)

703,661,000円

※上段カッコ内は補正後予算額，下段は当初予算額を示す。

II 評議員会 (昭和63年 3月31日現在)

会長	有光 次郎 (再任 63. 2.15)	副会長	佐藤喜代治
	碧海 純一		石井 敏裕 (再任 63. 2.15)
	石橋幹一郎 (新任 63. 2.15)		大岡 信
	岡部 慶三 (新任 63. 2.15)		加藤 秀俊 (再任 63. 2.15)
	倉沢 栄吉 (再任 63. 2.15)		小山 弘志
	坂井 利之 (再任 63. 2.15)		阪倉 篤義
	笹沼 澄子		鈴木 孝夫
	高橋 英夫 (再任 63. 2.15)		外山滋比古
	林 大 (再任 63. 2.15)		肥田野 直
	山田 年栄 (再任 63. 2.15)		頼 惟勤

III 組織と職員

1. 定員 72名

2. 組織及び職員名 (昭和63年 3月31日現在)

国立国語研究所	所 長	野元 菊雄	62. 8.28~62. 9. 5	外国出張 (中華人民共和国)
庶務部	部 長	足立昭二郎	62. 8.28~62. 9. 5	所長事務代理
庶務課	課 長	大内 登	63. 3. 1~63. 3.31	庶務課長事務代理
	"	松本 保之	62. 4. 1	小山工業高等専門学校に出向 (事務部長)
	"	笹沼 忠	62. 4. 1	奈良国立文化財研究所庶務部庶務課長から配置換
	課長補佐	菊地 貞	62. 10. 1	文化庁文化部国語課専門員に配置換
	"	井上 政和	62. 10. 1	岐阜大学庶務部庶務課長から転任
	庶務係長(併)	菊地 貞	62. 4. 1	宮城工業高等専門学校に出向 (学生課長)
	庶務係長	細田 信	62. 4. 1	庶務部庶務課人事係長から昇任
	事務補佐員	荒川佐代子	62. 4. 1	併任解除
		神戸 恭子	62. 4. 1~63. 3.30	東京大学庶務部人事課任用第二掛主任から昇任

	図書主任	大塚 通子 澤木喜美子	
	人事係長(併)	井上 政和 横山 哲也	62. 4. 1 併任
会計課	課 長	中村 悦忠	
	課長補佐	山本 光夫	
	総務係長(併)	山本 光夫	
	総務主任	岩田 茂男	
	経理係長	土佐南洋夫	
		高田 洋一	62. 4. 1 放送教育開発センターに出向 (管理部会計課)
		菅井 祐司	62. 4. 1 国立日高少年自然の家庶務課 から転任
	事務補佐員	村山 嘉美	(62. 4. 1~63. 3. 30)
	用度係長	木村 権治 三浦 篤	
		千葉 直樹	62. 4. 1 日本芸術院に出向
		太田 修治	62. 4. 1 採用
	文部技官	浅香 忠雄	
言語体系研究部	部 長	高橋 太郎	63. 3. 31 停年退職
第一研究室	室 長	村木新次郎	63. 3. 31 退職
		鈴木美都代	
第二研究室	室 長	宮島 達夫	
	主任研究官	石井 久雄	
		高木 翠	
言語行動研究部	部 長	渡辺 友左	
第一研究室	室 長	杉戸 清樹	
		塚田実知代	
第二研究室	室 長	江川 清	
	主任研究官	米田 正人	
		磯部よし子	

			早田美智子	
第三研究室	室長	神部 尚武		
	主任研究官	高田 正治		
	非常勤研究員	石井 朱美	(62. 7. 1~63. 3. 31)	
言語変化研究部	部長	飛田 良文		
第一研究室	室長	佐藤 亮一		
	主任研究官	澤木 幹栄		
		小林 隆		
	非常勤研究員	白沢 宏枝		
		W. A. グローター	(62. 4. 1~63. 3. 31)	
第二研究室	室長	梶原滉太郎		
	主任研究官	高梨 信博		
		中山 典子		
		田原 圭子	文献調査室	
		伊藤 菊子	〃	
		中曾根 仁	〃	
言語教育研究部	部長	村石 昭三		
第一研究室	室長(取)	村石 昭三		
	主任研究官	島村 直己	62. 7. 1 研究員から昇任	
		茂呂 雄二		
		川又瑠璃子		
言語計量研究部	部長	野村 雅昭		
第一研究室	室長	中野 洋	62. 8. 27~62. 11. 12 外国出張(中華人民共和国)	
		石井 正彦	62. 9. 27~62. 10. 13 海外研修(西ドイツ, オーストリア, チェコスロバキア, デンマーク)	
		山崎 誠		
		小沼 悦		
第二研究室	室長	鶴岡 昭夫	62. 9. 1 上越教育大学に出向(学校教育学部助教授)	
	〃	佐竹 秀雄	62. 9. 1 主任研究官から昇任	

		沢村都喜江	
第三研究室	室長	齋藤 秀紀	
	主任研究官	田中 卓史	
		米田 純子	
		小高 京子	
日本語教育 センター	センター長	南 不二男	63. 3. 31 停年退職
第一研究室	室長(取)	南 不二男	62. 4. 1 室長事務取扱免
	室長	鮎澤 孝子	62. 4. 1 鹿児島大学教養部助教授から 転任
		相澤 正夫	
第二研究室	室長	西原 鈴子	
	非常勤研究員	小出いづみ	(62. 4. 1~63. 3. 31)
第三研究室	室長	正保 勇	
第四研究室	室長(取)	南 不二男	
		水野 義道	62. 11. 13~63. 1. 30 外国出張(中華人民共和国)
日本語教育 指導普及部	部長	上野田鶴子	62. 5. 8~62. 5. 15 海外研修(アメリカ合衆国)
			62. 7. 4~62. 7. 17 外国出張(カナダ)
			62. 9. 17~62. 9. 23 海外研修(アメリカ合衆国)
			63. 1. 14~63. 1. 20 海外研修(アメリカ合衆国)
			62. 10. 15~63. 2. 6 日本語教育研修室 長事務代理
			63. 2. 14~63. 6. 30 日本語教育研修室 長事務代理
日本語教育 研修室	室長	田中 望	62. 10. 15~63. 2. 6 外国出張(フランス)
			63. 2. 14~63. 6. 30 外国出張(フランス)
		古川ちかし	
		沼田 善子	
	併任	早田美智子	
	事務補佐員	新聞 英世	(62. 4. 1~63. 3. 12)
	〃	笠井久美子	(63. 3. 14~63. 3. 30)
	非常勤研究員	大坪 一夫	(62. 4. 1~63. 3. 31)
日本語教育 教材開発室	室長	日向 茂男	62. 10. 1 東京学芸大学に出向(教育学部助教授)
	室長(取)	上野田鶴子	62. 10. 1 室長事務取扱

(国語辞典編集 準備調査員)	主任研究官	中道真木男	62. 7. 1 研究員から昇任
		中田 智子	63. 1. 1 採用
	非常勤研究員	貝 美代子	(62. 4. 1~63. 3. 31)
	〃	加藤 信明	(〃)
	〃	木村 睦子	(〃)
	〃	見坊 豪紀	(〃)
(日本語教育セ ンター客員研 究員)	〃	服部 隆	(〃)
	〃	林 大	(〃)
	〃	佐々木重次	(〃)
	〃	島 郁	(〃)
	〃	光信 仁美	(〃)
	〃	ウィン・カ ルジョ	(〃)

3. 名誉所員

- 西尾 実 (初代所長 昭35.1.22 退職 昭54.4.16 死去)
 大石初太郎 (元第一研究部長 昭43.3.31 退職)
 興水 実 (元第二研究部長 昭45.3.31 退職 昭61.3.5 死去)
 岩淵悦太郎 (2代所長 昭51.1.16 退職 昭53.5.19 死去)
 芦沢 節 (前言語教育研究部長 昭53.4.1 退職)
 飯豊 毅一 (前言語変化研究部長 昭57.4.1 退職)
 林 大 (3代所長 昭57.4.1 退職)
 大久保 愛 (前言語教育研究部第一研究室長 昭58.4.1 退職)
 斎賀 秀夫 (前言語計量研究部長 昭60.3.31 退職)

IV 昭和62年度事業

1. 刊行書

- 方言研究法の探索 (報告93) <秀英出版刊>
 研究報告集(9) (報告94) <秀英出版刊>
 児童・生徒の常用漢字の習得 (報告95) <東京書籍刊>

方言談話資料(10)——場面設定の対話 その2——

青森・群馬・千葉・新潟・長野・静岡・愛知・福井・奈良・

鳥取・島根・愛媛・高知・長崎・沖縄 (資料集10-10) <秀英出版刊>

国定読本用語総覧3 第2期〔と〜ん〕

(国語辞典編集資料——3) <三省堂刊>

現代雑誌九十種の用語用字 五十音順語彙表・採集カード

(言語処理データ集3) <東京都板橋福祉工場>

国語年鑑(昭和62年版)

<秀英出版刊>

国立国語研究所年報—38—(昭和61年度)

<秀英出版刊>

2. 日本語教育関連教材

日本語教育指導参考書14 文字・表記の教育

<大蔵省印刷局刊>

基礎日本語活用辞典インドネシア語版

日本語教育映画解説26

「このきっぷをあげます」——やり・もらいの表現1——

日本語教育映画解説27

「にもつをもってもらいました」——やり・もらいの表現2——

3. 日本語教育映像教材中級編

人に何かを頼むとき——依頼・要求・指示——

4. 国立国語研究所研究発表会

昭和62年12月12日(土)午後2時~4時30分

あいさつ

野元菊雄

通信調査法の再評価

小林隆

中京圏における方言変化プロセス瞥見

真田信治

(大阪大学)

非全国共通形の使用意識

相澤正夫

——北海道言語調査から——

5. 日本語教育研修(104ページ参照)

日本語教育長期専門研修(昭和62年4月13日~昭和63年2月26日)

日本語教育夏季研修（現職者研修・初級研修）

東京会場 昭和62年7月20日～7月24日

大阪会場 昭和62年7月27日～7月31日

日本語教育特別集中研修（昭和63年2月1日～2月26日）

V 外国人研究員及び内地留学生の受入れ

1. 外国人研究員

氏名・国籍・職名	研究題目	研究期間
呂 玉 新 (中華人民共和国) 中国上海衛生職工学 院外国語学部教師	中日言語の比較	61. 1. 6 から 64. 4. 30 まで
陳 常 好 (中華人民共和国) 北京第二外国語学院 講師	日本語の構造と表現についての特徴	61. 10. 6 から 62. 10. 5 まで
ヤコブ・エル・メイ (デンマーク) オーデンセ大学ラス ムスラスク言語学研 究所教授	(1)日本の社会言語学の話題と問題 (2)人間とコンピュータとのコミュニ ケーション	62. 2. 16 から 62. 6. 30 まで
アショク・クマル・ チャウラ (インド) 文部省東京大学国費 留学生	ターミノロジーのための日英専門用 語の対照研究	62. 3. 10 から 63. 3. 31 まで
李 大 清 (中華人民共和国) 北京航空学院外国語 学部日本語教育研究 室主任	和製漢字と和製漢語の研究	62. 4. 1 から 63. 11. 30 まで
エツコ・オバタ・ライ マン (日本) アリゾナ州立大学準 教授	国字の諸問題	62. 5. 1 から 62. 8. 30 まで
フロリアン・クルマス (西ドイツ) 米国ジョージタウン 大学客員教授	明治期における西欧化の反映として みた日本語彙の改新について	62. 5. 6 から 62. 7. 25 まで

余 均 灼 (香港) 香港中文大学日本研 究講座講師	中国人学生のための日本語文法指導 法 ——特に中級以上の場合——	62. 7. 1から 63. 6. 30まで
斉 新 代 (中華人民共和国) 天津外国語学院教師	複合動詞の研究	62. 9. 1から 63. 2. 16まで
ナオ・フクシマ (日本) スインバン工科大学 主任上級講師	CAI 利用による成人(豪人) 学生向 け初級日本語教材の開発研究	63. 1. 1から 63. 12. 31まで

2. 内地留学生

氏 名	勤務・職名	研究題目	研究期間
本田 修	国際交流基金日本語 研究部日本語課職員	日本語教育研修の方法と 内容について	62. 4. 20から 63. 2. 29まで
清水 康行	名古屋大学教養部助 教授	近代東京語の成立に関す る基礎的研究	62. 9. 1から 63. 2. 29まで

3. 外国人来訪者・見学者等

62. 4. 8	上海外国語学院日本語科講師		譚 晶 華
	” 学生		王 前
24	文化庁国語課長		近藤 昌彦
5. 7	仙台市立長町中学校生徒14名		
27	カリフォルニア大学バクレー校言語学科教授	Charles J. Fillmere	
7. 20	台湾成功大学副教授		黄 英甫
31	国立オーストラリア大学教授		Antonio Alfonso
8. 4	西独マルブルク大学日本語研究室教授(代理)		Jens Rickmeyer
21	イタリア中央アジア極東協会ローマ附属学校日本 語主任講師		Paolo Calvetti
9. 2	台湾大学副教授		謝 逸 郎
16	西独デュースブルク大学言語学部日本語 科責任者		ラファエル・ベルマン
17	インドネシア大学日本研究科研修旅行団24名		
22	(社)日本新聞協会・報道資料研究会在京小委員約20名		
10. 20	シュトゥットガルト大学言語学研究所教授・ドイツ	Gerhard Nickel	

- ツ応用言語学会名誉会長・世界応用言語学会名誉会長
- 23 第6回中国日本語教師訪日団10名
11. 2 大連工学院応用数学系教授 周 茂 青
大連外国語学院日語系文史教研室日本経済主任講師 干 永 瀛
12. 3 海外日本語講師長期研修生26名(14ヶ国)
12. 14 群馬大学教育学部国語科学生約20名
63. 1. 5 パリ第七大学助教授 プリュネ・裕子
2. 3 ブラジル国サン・パウロ市日本語普及センター広報部長 森 脇 礼 之
- 10 総務庁行政管理局管理官 片山 登喜男
2. 12 東京外国語大学客員教授・中国内蒙古大学蒙古語文研究所長 确 精 扎 布
3. 25 (財)国際協力サービスセンター日本語講師2名

VI 日 記 抄

62. 4. 13 日本語教育長期専門研修開講式
5. 11 昭和62年度第1回日本語教育映画等企画協議会
- 12 国立国語研究所の組織及び事務・事業の見直し検討委員会(同委員会は10月27日までの間に計14回開催)
- 21 第46回文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議総会(21~22)(学士会館)
- 23 第38回文部省所管研究所事務(部)長会議総会(教育研)
- 25 昭和62年度第2回日本語教育映画等企画協議会
- 28 昭和62年度国立学校等経理部課長会議(東京医科歯科大)(28~29)
6. 2 昭和62年度第3回日本語教育映画等企画協議会
- 15 昭和62年度第4回日本語教育映画等企画協議会
7. 1 定期健康診断
- 7 文化庁施設等機関庶務会計部課長会議(虎ノ門パストラル)
- 15 第112回国立国語研究所評議員会

- 16 昭和62年度第1回日本語教育センター運営委員会
- 20 日本語教育夏季研修（初級，現職者 東京会場）（20～24）
- 27 日本語教育夏季研修（初級，現職者 大阪会場）（27～31）
8. 17 昭和62年度第5回日本語教育映画等企画協議会
- 19 昭和62年度中国帰国者に対する日本語指導者研修会（東日本地区）
（文化庁主催）（19～20）
- 21 昭和62年度中国帰国者に対する日本語指導研究協議会（東日本地区）
（文化庁主催）
- 21 昭和62年度日本語教育機関連絡協議会（東日本地区）（文部省・文化庁主催）
9. 29 昭和62年度第6回日本語教育映画等企画協議会
- 30 昭和62年度第1回基本語用例データベース作成作業委員会
10. 28 国立国語研究所の組織及び事務・事業の見直し起草委員会（同委員会は11月25日までの間に計4回開催）（注）「報告書」の総務庁提出 昭和63年3月
11. 13 昭和62年度文部省所轄研究所等所長会議（国文研）
- 16 昭和62年度日本語教育研究連絡協議会
- 20 昭和62年度文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議（第3部会）
（20～21）（ホテル大阪ガーデンパレス）
- 27 第38回文部省所管研究所第三部会事務（部）長会議（東大山上会館）
- 28 レクリエーション（湯西川温泉旅行）（28～29）
12. 2 昭和62年度各省直轄研究所長連絡協議会共通問題研究会（科学技術庁研究交流センター）
- 12 国立国語研究所研究発表会
- 18 創立記念日 記念講演「言語——機械側から見ると」坂井利之評議員
- 22 昭和62年度第1回国語辞典編集準備調査会
63. 2. 24 文化庁施設等機関次長等幹部会議（都道府県会館）
- 26 日本語教育長期専門研修閉講式
3. 4 昭和62年度各省直轄研究所長連絡協議会定例総会（竹橋会館）

- 8 昭和62年度第2回基本語用例データベース作成作業委員会
- 9 文化庁施設等機関長会議（文部省）
- 11 昭和62年度第7回日本語教育映画等企画協議会
- 16 昭和62年度第2回国語辞典編集準備調査会
- 17 第113回国立国語研究所評議員会
- 18 昭和62年度第2回日本語教育センター運営委員会
- 22 昭和62年度第1回母語別学習辞典編集委員会
- 29 昭和62年度第3回基本語用例データベース作成作業委員会

昭和63年12月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘 3-9-14
電話東京 (900) 3111 (代表)

UDC 058 : 809.56

NDC 810.5

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 ——用法と実例——	〃	2,000円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	〃	品切れ
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における実態調査——	〃	〃
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	〃
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	〃
8	談 話 語 の 実 態	〃	〃
9	読 み の 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語(前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語(後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	〃
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料による研究——	〃	2,000円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品切れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	〃
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	〃	3,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	〃	3,000円

23	話しことばの文型 (2) ——独話資料による研究——	秀英出版刊	2,000円
24	横組みの字形に関する研究	〃	品切れ
25	現代雑誌九十種の用語用字 (3) ——分析——	〃	3,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	品切れ
27	共通語化の過程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	〃
28	類義語の研究	〃	〃
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1	日本語地図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
	日本語地図 (1) <縮刷版>	〃	17,000円
30-2	日本語地図 (2)	〃	品切れ
	日本語地図 (2) <縮刷版>	〃	17,000円
30-3	日本語地図 (3)	〃	品切れ
	日本語地図 (3) <縮刷版>	〃	17,000円
30-4	日本語地図 (4)	〃	品切れ
	日本語地図 (4) <縮刷版>	〃	17,000円
30-5	日本語地図 (5)	〃	品切れ
	日本語地図 (5) <縮刷版>	〃	17,000円
30-6	日本語地図 (6)	〃	品切れ
	日本語地図 (6) <縮刷版>	〃	17,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	品切れ
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	〃
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究 (Ⅱ) ——新聞の用語用字調査の処理組織——	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	〃
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	〃
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	〃
38	電子計算機による新聞の語彙調査 (Ⅱ)	〃	〃

39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	秀英出版刊	品切れ
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 —松江24時間調査資料から—	〃	品切れ
42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	6,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	4,000円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(Ⅳ)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) —性向語彙と価値観—	〃	700円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究(Ⅴ)	〃	900円
50	幼児の文構造の発達 —3歳～6歳児の場合—	〃	品切れ
51	電子計算機による国語研究(Ⅵ)	〃	1,000円
52	地域社会の言語生活 —岡山における20年前との比較—	〃	1,800円
53	言語使用の変遷(1) —福島県北部地域の面接調査—	〃	2,500円
54	電子計算機による国語研究(Ⅶ)	〃	1,000円
55	幼児語の形態論的な分析 —動詞・形容詞・述語名詞—	〃	品切れ
56	現代新聞の漢字	〃	6,000円
57	比喩表現の理論と分類	〃	6,000円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,500円
59	電子計算機による国語研究(Ⅷ)	秀英出版刊	1,300円
60	X線映画資料による母音の発音の研究 —フォネーム研究序説—	〃	2,500円
61	電子計算機による国語研究(Ⅸ)	〃	品切れ
62	研究報告集(1)	〃	1,700円
63	児童の表現力と作文	東京書籍刊	6,000円
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)	秀英出版刊	2,000円
65	研究報告集(2)	〃	3,000円

66	幼 児 の 語 彙 能 力	東京書籍刊	8,000円
67	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (X)	秀英出版刊	1,500円
68	専 門 語 の 諸 問 題	〃	4,000円
69	幼 児 ・ 児 童 の 連 想 語 彙 表	東京書籍刊	6,800円
70-1	大 都 市 の 言 語 生 活 —分析編—	三省堂刊	7,800円
70-2	大 都 市 の 言 語 生 活 —資料編—	〃	12,000円
71	研 究 報 告 集 (3)	秀英出版刊	4,800円
72	幼 児 ・ 児 童 の 概 念 形 成 と 言 語	東京書籍刊	6,800円
73	企 業 の 中 の 敬 語	三省堂刊	9,500円
74	研 究 報 告 集 (4)	秀英出版刊	4,200円
75	現 代 表 記 の ゆ れ	〃	2,700円
76	高 校 教 科 書 の 語 彙 調 査	〃	5,000円
77	敬 語 と 敬 語 意 識 —岡崎における20年前との比較—	三省堂刊	8,000円
78	日 本 語 教 育 の た め の 基 本 語 彙 調 査	秀英出版刊	6,000円
79	研 究 報 告 集 (5)	〃	4,200円
80	言 語 行 動 に お け る 日 独 比 較	三省堂刊	8,000円
81	高 校 教 科 書 の 語 彙 調 査 (2)	秀英出版刊	5,000円
82	現 代 日 本 語 動 詞 の ア ス ペ ク ト と テ ン ス	〃	5,000円
83	研 究 報 告 集 (6)	〃	4,200円
84	方 言 の 諸 相 —『日本語地図』検証調査報告—	三省堂刊	9,800円
85	研 究 報 告 集 (7)	秀英出版刊	4,000円
86	社 会 変 化 と 敬 語 行 動 の 標 準	〃	9,000円
87	中 学 校 教 科 書 の 語 彙 調 査	〃	5,000円
88	日 独 仏 西 基 本 語 彙 対 照 表	〃	8,500円
89	雑 誌 用 語 の 変 遷	〃	7,000円
90	研 究 報 告 集 (8)	〃	3,000円
91	中 学 校 教 科 書 の 語 彙 調 査 II	〃	5,000円
92	談 話 行 動 の 諸 相 —座談資料の分析—	三省堂刊	2,800円
93	方 言 研 究 法 の 探 索	秀英出版	7,000円

94	研 究 報 告 集 (9)	秀英出版刊	3,500円
95	児 童 ・ 生 徒 の 常 用 漢 字 の 習 得	東京書籍	7,800円

国立国語研究所資料集

1	国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17~24年)	秀英出版刊	品切れ
2	語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例——	〃	〃
3	送 り 仮 名 法 資 料 集	〃	〃
4	明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目	〃	〃
5	沖 繩 語 辞 典	大蔵省印刷局刊	4,300円
6	分 類 語 彙 表	秀英出版刊	1,800円
7	動 詞 ・ 形 容 詞 問 題 語 用 例 集	〃	1,700円
8	現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中間報告)	〃	品切れ
9	牛店 雑誌 安 愚 楽 鍋 用 語 索 引	〃	1,500円
10-1	方 言 談 話 資 料 (1) ——山形・群馬・長野——	〃	6,000円
10-2	方 言 談 話 資 料 (2) ——奈良・高知・長崎——	〃	6,000円
10-3	方 言 談 話 資 料 (3) ——青森・新潟・愛知——	〃	6,000円
10-4	方 言 談 話 資 料 (4) ——福井・京都・島根——	〃	6,000円
10-5	方 言 談 話 資 料 (5) ——岩手・宮城・千葉・静岡——	〃	6,000円
10-6	方 言 談 話 資 料 (6) ——鳥取・愛媛・宮崎・沖縄——	〃	6,000円
10-7	方 言 談 話 資 料 (7) ——老年層と若年層との会話——	〃	6,000円
10-8	方 言 談 話 資 料 (8) ——老年層と若年層との会話——	〃	6,000円
10-9	方 言 談 話 資 料 (9) ——場面設定の対話——	〃	6,000円
10-10	方 言 談 話 資 料 ——場面設定の対話 その2——	〃	6,000円
11	日 本 言 語 地 図 語 形 索 引	大蔵省印刷局刊	1,500円

国語辞典編集資料

1	国定読本用語総覧1 ——第1期(あ〜ん)——	三省堂刊	25,000円
2	国定読本用語総覧2 ——第2期(あ〜て)——	〃	28,000円
3	国定読本用語総覧3 ——第2期(と〜ん)——	〃	28,000円

言語処理データ集

1	高校教科書文脈付き用語索引	日本マイクロ写真	35,000円
---	---------------	----------	---------

- | | | | |
|---|-------------------------------------|-----------|---------|
| 2 | 話しことば文脈付き用語索引(1)
—『言語生活』録音器欄データ— | 日本マイクロ写真 | 50,000円 |
| 3 | 現代雑誌九十種の用語用字
五十音順語彙表・採集カード | 東京都板橋福祉工場 | 50,000円 |

国立国語研究所研究部資料

幼児のことば資料 (1)	秀英出版刊	3,800円
幼児のことば資料 (2)	〃	3,800円
幼児のことば資料 (3)	〃	6,000円
幼児のことば資料 (4)	〃	6,000円
幼児のことば資料 (5)	〃	6,000円
幼児のことば資料 (6)	〃	6,000円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	〃
3	ことばの研究 第3集	〃	〃
4	ことばの研究 第4集	〃	〃
5	ことばの研究 第5集	〃	1,300円

日本語教育教材

日本語と日本語教育 —発音・表現編—	国立国語研究所 文化庁共編	大蔵省印刷局刊	700円
日本語と日本語教育 —文字・表現編—	〃	〃	850円
日本語の文法(上) —日本語教育指導参考書4—	〃	〃	450円
日本語の文法(下) —日本語教育指導参考書5—	〃	〃	550円
日本語教育の評価法 —日本語教育指導参考書6—	〃	〃	700円
中・上級の教授法 —日本語教育指導参考書7—	〃	〃	500円
日本語の指示詞 —日本語教育指導参考書8—	〃	〃	500円
日本語教育基本語彙七種 比較対照表 —日本語教育指導参考書9—	〃	〃	1,000円
日本語教育文献索引 —日本語教育指導参考書10—	〃	〃	1,400円
談話の研究と教育 I —日本語教育指導参考書11—	〃	〃	550円

語彙の研究と教育(上)——日本語教育指導参考書 12——	大蔵省印刷局刊	600円
語彙の研究と教育(下)——日本語教育指導参考書 13——	〃	700円
文字・表記の教育——日本語教育指導参考書 14——	〃	700円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和 24 年度	品切れ	21	昭和 44 年度	品切れ
2	昭和 25 年度	〃	22	昭和 45 年度	〃
3	昭和 26 年度	〃	23	昭和 46 年度	450円
4	昭和 27 年度	160円	24	昭和 47 年度	品切れ
5	昭和 28 年度	品切れ	25	昭和 48 年度	〃
6	昭和 29 年度	〃	26	昭和 49 年度	〃
7	昭和 30 年度	〃	27	昭和 50 年度	700円
8	昭和 31 年度	〃	28	昭和 51 年度	非売
9	昭和 32 年度	〃	29	昭和 52 年度	〃
10	昭和 33 年度	〃	30	昭和 53 年度	800円
11	昭和 34 年度	〃	31	昭和 54 年度	1,200円
12	昭和 35 年度	〃	32	昭和 55 年度	1,300円
13	昭和 36 年度	〃	33	昭和 56 年度	1,300円
14	昭和 37 年度	〃	34	昭和 57 年度	2,000円
15	昭和 38 年度	250円	35	昭和 58 年版	2,200円
16	昭和 39 年度	品切れ	36	昭和 59 年版	2,700円
17	昭和 40 年度	〃	37	昭和 60 年度	2,700円
18	昭和 41 年度	300円	38	昭和 61 年度	2,700円
19	昭和 42 年度	300円	39	昭和 62 年度	
20	昭和 43 年度	品切れ			

国語年鑑 秀英出版刊

昭和 29 年版	品切れ	昭和 33 年版	品切れ
昭和 30 年版	〃	昭和 34 年版	〃
昭和 31 年版	〃	昭和 35 年版	〃
昭和 32 年版	〃	昭和 36 年版	〃

昭和 37 年版	品切れ	昭和 51 年版	4,000円
昭和 38 年版	〃	昭和 52 年版	品切れ
昭和 39 年版	〃	昭和 53 年版	〃
昭和 40 年版	〃	昭和 54 年版	〃
昭和 41 年版	〃	昭和 55 年版	〃
昭和 42 年版	〃	昭和 56 年版	〃
昭和 43 年版	〃	昭和 57 年版	5,500円
昭和 44 年版	〃	昭和 58 年版	5,500円
昭和 45 年版	1,500円	昭和 59 年版	5,800円
昭和 46 年版	2,000円	昭和 60 年版	5,800円
昭和 47 年版	2,200円	昭和 61 年版	7,800円
昭和 48 年版	2,700円	昭和 62 年版	7,800円
昭和 49 年版	3,800円	昭和 63 年版	7,800円
昭和 50 年版	品切れ		

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ
国立国語研究所三十年のあゆみ ——研究業績の紹介——		秀英出版刊	1,500円

日本語教育映画基礎編 (全30巻)

(各巻16ミリカラー、5分、日本シネセル社販売)

巻 題 名	制作年度 (昭和)
ユニット 1	
1* これはかえるです ——「こそあと」+「は～です」——	49
2* さいふはどこにありますか ——「こそあと」+「～がある」——	49
3* やすくないです たかいです ——形 容 詞——	49
4* きりんはどこにいますか ——「いる」「ある」——	51
5* なにを しましたか ——動 詞——	50

ユニット 2

- 6* しずかな こうえんで —形容動詞— 50
 7* さあ、かぞえましょう —助 敬 詞— 50
 8* どちらが すきですか —比較・程度表現— 52
 9* かまくらを あるきます —移動表現— 51
 10* もみじが とても きれいでした —です、でした、でしょう— 52

ユニット 3

- 11* きょうは あめが ふっています —して、している、していた— 52
 12* そうじは してありますか —してある、しておく、してしまう— 53
 13* おみまいに いきませんか —依頼・勧誘表現— 53
 14* なみのおとが きこえてきます —「いく」「くる」— 53
 15* うつくしい さらに なりました —「なる」「する」— 50

ユニット 4

- 16* みずうみのえを かいたことが ありますか —経験・予定表現— 54
 17* あのいわまで およげますか —可能表現— 54
 18* よみせを みに いきたいです —意志・希望表現— 54
 19* てんきが いいから さんぽを しましょう —原因・理由表現— 55
 20* さくらが きれいだそうです —伝聞・様態表現— 55

ユニット 5

- 21* おけいこを みに いっても いいですか —許可・禁止表現— 56
 22* あそこに のぼれば うみがみえます —条件表現1— 56
 23 いえが たくさんあるのに ともしずかです —条件表現2— 56
 24 おかねを とられました —受身の表現1— 51
 25 あめに ふられて こまりました —受身の表現2— 55

ユニット 6

- 26* このきっぷを あげます —やり・もらい表現1— 57
 27* にもつを もって もらいました —やり・もらい表現2— 57
 28 てつだいを させました —使役表現— 57
 29* よく いらっしやいました —待遇表現1— 58
 30* せんせいを おたずねします —待遇表現2— 58

販売価格

	16%カラー	VTRカラー (3/4インチ)	VTRカラー (1/2インチ)
全巻セット	¥720,000	¥535,000	¥432,000
各ユニット	¥112,500	¥84,000	¥67,500
各巻	¥30,000	¥22,000	¥18,000

第1巻～第3巻は、文化庁との共同企画

*については日本語教育映画解説の冊子がある。

日本語教育映画 関連教材 (株)ビスコ販売)

日本語教育映画 基礎編 教師用マニュアル (全6分冊)	各分冊1,000円
日本語教育映画 基礎編 練習帳 (全6分冊)	〃 500円
日本語教育映画 基礎編 シナリオ集 (全1冊)	1,000円
日本語教育映画 基礎編 総合語彙表 (全1冊)	1,500円
日本語教育映画 基礎編 総合文型表 (全1冊)	1,500円
映像教材による教育の現状と可能性 (全1冊)	
日本語教育映画ワークショップ報告 日本シネセル社刊	2,500円

日本語教育映像教材中級編一覽

(各巻ビデオ及び16ミリカラー, 約5分, 日本シネセル社販売)

セグメント	題名	制作年度 (昭和)
ユニット 1	初めて会う人と —紹介・あいさつ—	
1	自己紹介をする —会社の歓迎会で—	61
2	人を紹介する —訪問先の応接室で—	61
3	友人に出会う —喫茶店で—	61
4	面会の約束をする —電話で—	61
5	道をきく —交番で—	61
6	会社を訪問する —受付と応接室で—	61
ユニット 2	人に何かを頼むとき —依頼・要求・指示—	
7	届出をする —市役所で—	62
8	買物をする —デパートで—	62
9	打合せをする —出版社で—	62

10	お願いをする	—大学で—	62
11	手伝いを頼む	—家庭で—	62
12	友達を誘う	—友達の家で—	62

販売価格

	16%カラー	VTRカラー (3/4インチ)	VTRカラー (1/2インチ)
各ユニット	¥157,500	¥95,000	¥74,000
各セグメント	¥35,000	¥37,000	¥29,500

1987—1988
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1987 to March 1988

A Descriptive Study of Modern Japanese Grammar

A General Survey of Modern Japanese Vocabulary

A General Survey of Modern Japanese Honorifics

A Sociological Study on the Kinship Vocabulary of Japanese Dialects

A Contrastive Study on the Variations of Language Behavior between
Various Social Groups

A Fundamental Study for Analysis of Verbal Behavior System

A Study of Reading Processes in Kanji-Hiragana-Katakana Mixed
Scripts

A Study of the Physiological Process of Japanese Pronunciation
through Dynamic Palatography

A Nation-Wide Survey of the Grammatical Features of the Dialects

A Historical Study on Dialectal Distributions

Research on the Borrowing of Chinese Words in the Early Meiji Period

A Research into Children's Language Acquisition

A Fundamental Study for Automatic Word Count System by Computer

A Study of Writing in Modern Japanese

A Fundamental Study of Language Data Processing by Computer

Contrastive Linguistic Studies of Japanese

A Study of Valency of Japanese Verbs

A Study of the Current State of Japanese Language Teaching
—Contents and Methodology—

A Contrastive Study of Japanese and English

Contrastive Studies in Japanese and Indonesian

Contrastive Studies in Japanese and Chinese

Assessing Linguistic Competence and Communicative Performance
in Language Learning: A Basic Study

A Study of Teacher Training in Japanese Language Teaching
—Contents and Methodology—

A Study of the Development of Teaching Materials in Japanese

A Contrastive Study of Discourse Structures
—Japanese and Other Languages—

Other

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO